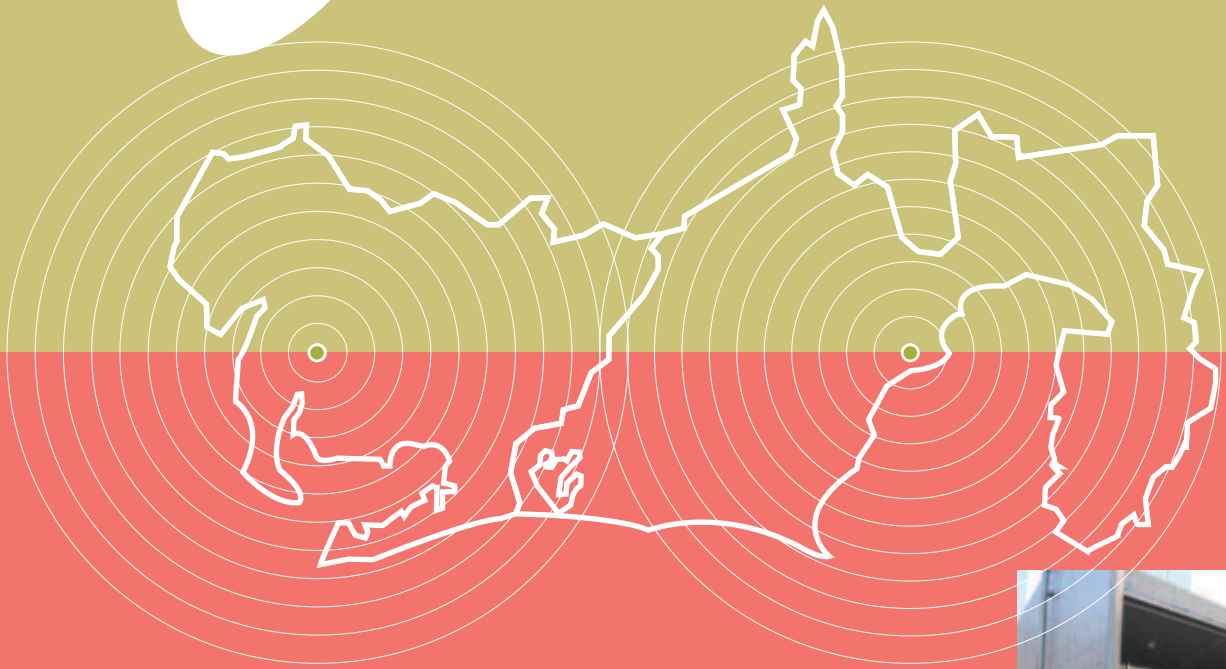


# ROAD

Annual Report  
2016



2017年3月 第5号

愛知教育大学大学院教育学研究科  
静岡大学大学院教育学研究科  
共同教科開発学専攻

---

2016 年度報告書

ROAD



平成 28 年度  
教科開発学セミナーⅢ 合同発表会

Annual Report 2016

平成 28 年 8 月 21 日 (日)  
於：静岡県浜松市



平成 28 年度  
教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ 合同発表会

Annual Report 2016

平成 29 年 2 月 11 日 (土)・12 日 (日)  
於：静岡県浜松市



平成 28 年度  
最終審査 (9月修了生)

Annual Report 2016

平成 28 年 7 月 18 日 (月)  
於：愛知教育大学



平成 28 年度  
最終審査 (3月修了生)

Annual Report 2016

平成 29 年 1 月 22 日 (日)  
於：愛知教育大学



平成 28 年度  
修了式 (9月修了生)

Annual Report 2016

平成 28 年 9 月 30 日 (金)  
於：愛知教育大学



平成 28 年度  
修了式 (3月修了生)

Annual Report 2016

平成 29 年 3 月 23 日 (木)  
於：静岡県静岡市



目次



巻頭言

I. 共同教科開発学専攻の概要	1
II. 共同教科開発学専攻連絡協議会議長年次報告	23
III. 教科開発学研究会	43
IV. 学生の研究活動	47
V. 修了生の論文要旨及び執筆体験談	79
VI. 教員の教育・研究活動	93
VII. 諸資料	127



## 共同大学院博士課程の将来

理事・副学長（教育・学生担当）

中 田 敏 夫

「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」は平成 29 年 8 月 31 日をめどに現在議論が進んでいるところですが、そこでは教員養成大学の博士課程のあり方についても言及されています。H29.4.24 第 7 回有識者会議に示された「第 6 回までの意見をベースとした主な課題と対応策案」（資料 2）には「7. Ed.D.（教職博士）の検討」として次のようになっています。

### (1) 主な課題

#### 【Ed.D.への期待】

○教職大学院制度の定着と今後の更なる充実が期待される中、教職大学院で得られる専門職学位（教職修士）の上に置く、実践性を重視した博士の専門学位が必要との声がある。

### (2) 期待される対応

#### ①中長期的な方針

#### 【必要性やニーズの検討】

○国は、Ed.D.について、新たな学位を設ける必要性、現在の「博士（教育学）」の学位で対応できない理由、学ぶ側のニーズ等について検討すること。

また、第 6 回（H29.3.22）に示された主査ペーパーにも「教職大学院と修士課程・博士課程について」として、「教職大学院との接続強化のため、実践重視の新たな学位である Ed.D.（教職博士）を創設することを検討する」とあります。

ところで、国立教員養成系単科大学のうち大規模な 4 大学（北海道教育大学・東京学芸大学・愛知教育大学・大阪教育大学）は、日本の教員養成教育の諸課題に対応する機構を共同設置するとともに、全国の教員養成系大学・学部との交流の拠点とするべく「大学連携による教員養成の高度化支援システムの構築」を目指した「HATO プロジェクト」を進めてきました。今年度をもって補助金が終了しますが、ここでは様々なプロジェクトが展開されてきました。その一つとして掲げられていたのが「教員養成大学・学部連携によるプロフェッショナル型博士課程構想について」でした。これは北海道教育大学が中心となって構想しているものですが、新たに Ed.D.型の博士課程を設置しようとするものです。HATO4 大学のほかに宮城教育大学・京都教育大学・奈良教育大学が加わって、平成 27 年度にワーキング・グループを立ち上げ、新しい博士課程「連携大学院」の開設に向けたグランドデザインの作成しようとしています。ここでは教育委員会などへのヒアリングを踏まえながら教育長などの行政職の学位取得を検討したり、教職大学院の教員養成を視野に入れたりもしています。

本共同大学院においても養成する人材像に教員養成系大学の教員を想定していますが、有識者会議の議論の方向性を見極めつつ、今後の博士課程のあり方は大いに検討をしていく必要のあるところと考えます。愛知教育大学では現在新たな教職大学院の方向性を模索しているところです。有識者会議で指摘された教職大学院の学部との接続、そして教職大学院の博士課程との接続を新たなテーマとして検討していかなければいけない段階に入ったと考えます。2012 年に開設され、今年度 2017 年度は 3 年プラス 3 年の 2 サイクル目の最終年となります。更に本共同大学院が発展していくために何を改革すべきか、活発な議論を期待します。



## 教職の実践知の結晶化に向けて

静岡大学教育学部 教授

2016年度共同教科開発学専攻 副議長

村 越 真

本博士課程も6年目を迎え、気づいてみれば学生40人の所帯になった。まずは、本博士課程を勉学・研究の場として選んでくださった学生の皆さん、博士課程ならではの面倒な運営を陰に日向に支えてくださっている事務の皆さんにお礼申し上げたい。

もちろん、直接の学生教育に当たる教員の貢献は専攻の核である。直接の授業担当だけでも6日になる。その他にセミナーが最低3日、ガイダンス、入試、最終試験などを含めれば確実に年間10日以上の日出勤となる。多忙化した現在の大学において、それを振り替えるだけでも容易ではない。それ以外にも論文指導が休日やメールで行われる。そんな条件の中で熱心に授業や博士論文の指導を行う博士課程担当教員には頭が下がる。

教員が指導にあたるモチベーションは多様だが、その最大のもは博士課程ならではの「刺激」ではないだろうか。授業中のディスカッションで学生の方々から提示される現場の情報や実践に基づく問題意識は、授業担当教員にとっても示唆的であり、刺激的ですらある。学生たちの感想は研究の励みになるし、そこでの議論が研究や論文の展開に参考になることがしばしばである。この魅力は博士課程ならではのであり、休日出勤を補って余りあるものだ。

1点感じる課題は、授業やセミナーで発表される熟達した実践者である学生さんたちの実践知を、私たちはいまだ十分引き出せていない点である。実践知とは、その名のとおり、実践の中で獲得される容易には言語化されない知識であり、実践をより有効に導く知識でもある。PISAテストの結果から分かるように日本の教育は大きな成功を収めているが、それは教員の実践知に多くを負っている。「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」で指摘されている現在の教員養成学部の問題点の多くは、それを結晶化することによって、かなりの程度対応できると考えられる。だとすれば、教科開発学を名乗る本専攻はそのための方法論を確立させ、それによって新たな知の蓄積を図ることこそが使命だとも言える。これは、私たちにとっても設置当初からの課題であった「教科開発学とはなにか」について答えることにもつながり、学生、教員ともに今後とも努力を続けていかなければならないテーマだと考えつつ、日々の専攻運営にあたる日々である。



# I . 共同教科開発学専攻の概要

## 1. 専攻の趣旨・目的

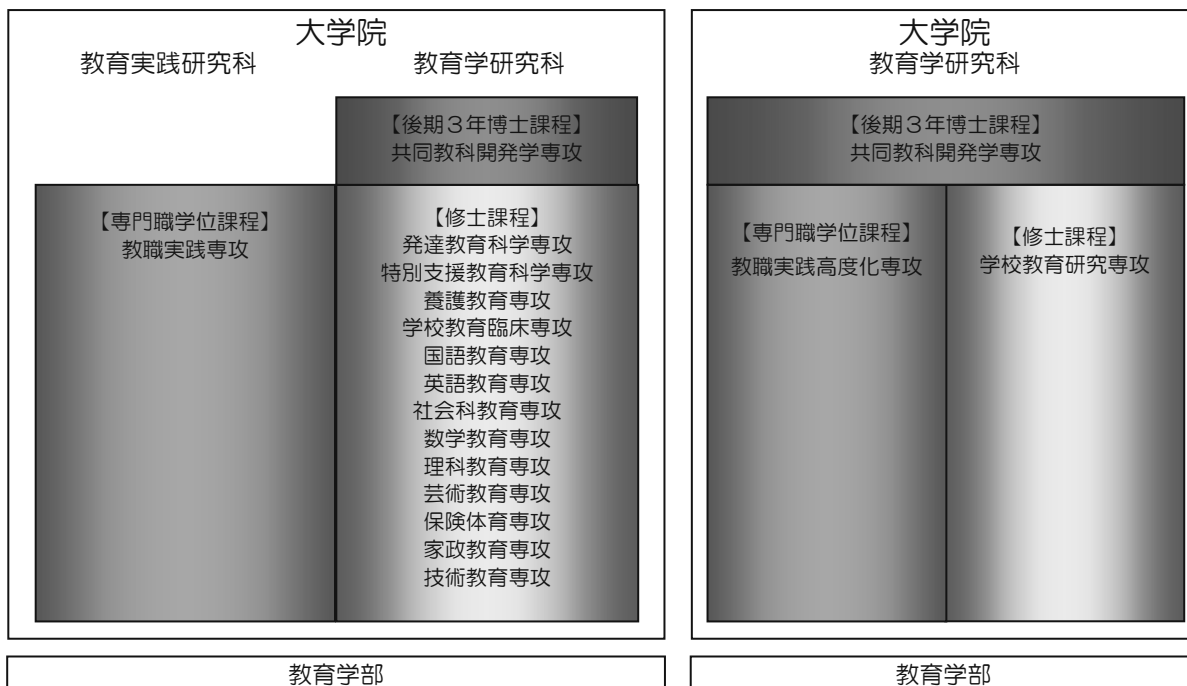
共同教科開発学専攻（以下「本共同専攻」という。）は、共同教育課程制度を活用し、愛知教育大学と静岡大学の教育学研究科に設置された、後期3年のみの博士課程です。

本共同専攻の設置は、教育を取り巻く社会状況や学校教育が抱える課題が複雑化し、学校教育現場の教員に高い資質能力が求められていく一方で、教員養成カリキュラムの目的性や科目の体系的な欠如等の課題が浮き彫りになってきていること、それに加え、中央教育審議会においても、教員の資質能力の向上のための教員養成システムにおける修士レベル化が検討されることとなり、これらに対応するための体系的な教員養成カリキュラムの編成及び専門科目の体系化、また、それを可能とする大学教員の養成が喫緊の課題となっていること、などが背景となっています。これらの課題に応えるため、愛知教育大学及び静岡大学教育学部は、国立の教員養成系大学学部としてこれまで取り組んできた実績を活かし、大学教員養成のための博士課程を設置しました。

専攻名称ともなっている「教科開発学」は、教科専門・教科教育・教職専門の枠を越えて、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行していくため、教科専門と教科教育を融合・発展させた「教科学」と、教職専門を発展させた「教育環境学」とをあわせて体系化することを目指す新たな学問領域です。

本共同専攻は、「教科開発学」の究明を通じて、教科内容の構成原理等を明らかにしながら「教科学」と「教育環境学」の融合・体系化に熱意を持って取り組む大学教員を養成していくこと、また、「教科開発学」を専門とする大学教員を養成し、その教員が「教科開発学」に関する教育研究に基づいた教員養成カリキュラムを編成して学部、あるいは修士課程等で指導を行うことによって、優れた学校教育現場の教員を輩出するという教員養成系大学・学部ならではのサイクルを確立することを目指しています。

### 共同教科開発学専攻が置かれる環境



<愛知教育大学>

<静岡大学>

## 2. 専攻の内容・特色

「教科開発学」は、教科専門・教科教育・教職専門の専門性の枠を越えて、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行していくものです。「教科開発学」は、主に、教育環境に適した教育内容構成の研究（教科学）、教科内容として構成されたものを実践するための教育環境の研究（教育環境学）から構成されます。教科専門と教科教育を融合・発展させた「教科学」と、教職専門を発展させた「教育環境学」が「教科開発学」を構成します。そして、本共同専攻は、「教科学」あるいは「教育環境学」のいずれかを基軸としつつ、もう一方の学問分野の研究を進めていくというところに特色があります。

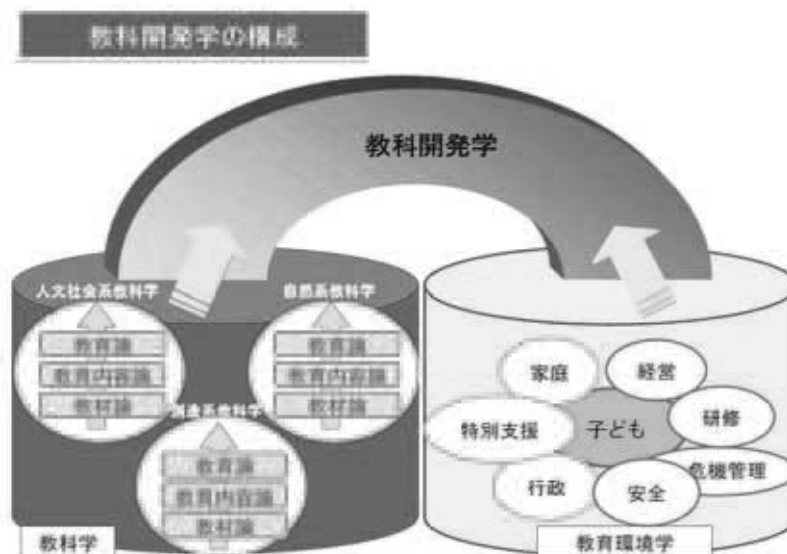
専攻の分野として「教育環境学」、「教科学」（人文社会系教科学、自然系教科学、創造系教科学）という4つの分野を設置しています。

教科学研究のアプローチとして、教育論・教育内容論・教材論という3つの基本軸からのアプローチを行うことも本共同専攻のもう一つの特徴です。「教育論」は、児童生徒の発達のために、どのような教育目標のもとに、どのような内容をどのように教え（教師）・どのように学ぶか（学習者）を論じるもので、従来の「教科教育科目」で検討してきた目標論、指導論、学習過程論をも含みます。

「教育内容論」は、それぞれの学問（学問・芸術）分野を基盤として持ちながら、その全体像から個々の学問分野の必須部分を抽出し、個々の専門分野がどのように関連しながら「教科」の内容がいかなるものから構成されているかを追究するものです。「教材論」は、教科が、それぞれの学問（学問・芸術）分野を基盤としながら構成されている教材の在り方を論究し、教材の開発をすることにより教科内容の構成あるいは教材配列等を実践的に考察・検証するものです。これらの3つのアプローチにより、3つの系を超えて教育論・教育内容論・教材論を集約し、教科内容構成を追究していきます。

教育関係等の仕事に従事しながら、入学して修学することができるよう、講義は、原則的に土曜日、日曜日に実施し、夏期や冬期における集中講義も導入するなど、時間割や学修プログラムを作成している点も本共同専攻の特色です。

（専攻名）		（分野）
共同教科開発学専攻	—	教育環境学 人文社会系教科学 自然系教科学 創造系教科学



## 教育環境学分野

子どもたちが主体的に働きかけ、働きかけられる自然・社会・文化・日常生活等のあらゆる過程を子どもの発達の見地から教育環境を捉える学問。確かな学力・豊かな心・健やかな体の調和を重視して「生きる力」を育む場合、家庭、学校、地域、社会といった学校を取り巻く環境との関連を常に視野に入れておくことが重要です。「教育環境学」においては、従来の教職専門領域で扱ってきた内容を発展させ、子ども、学校、地域、社会を含めた幅広い学校教育を取り巻く多様な環境領域を体系的に研究し、教科の土台や基盤を追究します。

## 教科学分野

従来の教員養成カリキュラムでは、「教科」の学問的内容を「教科専門」、「教科」の指導法を「教科教育」として編成されていますが、両者の体系化はまだ進んでいません。そのため、教員養成における「教科」の研究を本格的に確立するために「教科学」を創設します。「教科学」は、従来の教科専門と教科教育を融合し、教科がどのような構成原理で成り立っているのか等を中心に教科内容の構成原理を探求するものです。教科を「人文社会系」、「自然系」、「創造系」という3つの分野に分類し、教科における学習内容の構成がいかなる原理からなっているか、その編成の仕方はどうあるべきか等を探究します。以下、3つの分野について紹介します。

### ① 人文社会系教科学分野

地域社会における言語、文学、歴史、文化、自然にかかわる人文社会的な課題に対して、自らが実際にかかわることにより主体的に考察を進め、地域に密着した教育方法や教材を作り上げていく必要があります。この分野では、誰かが集めた史資料（二次史資料）や既存の結論で考察を進めるのではなく、史資料読解やフィールドワーク（参加、体験、観察、インタビュー、収集など）により自らが積極的に対象にかかわることによって得られた一次史資料や知見によって地域研究を進め、その研究成果をもとにした教科開発をめざします。具体的には、言語学、歴史学、地理学、民俗学の立場からアプローチして、それらの研究領域から得られた高度な地域研究の成果をふまえた教育論、教育内容の構成原理や教育方法、教材を開発します。

### ② 自然系教科学分野

社会が複雑化し、自然環境が変化し、従来の価値観が変わる中で、科学的リテラシー、数学的リテラシー（科学的、数学的に思考するための基本となる能力）の育成が求められています。観察、仮説の立案（モデルの構築）、検証（論理的説明、実証）などの活動を通して自然系教科における教育論、教科内容の構成原理や教育方法、教材を開発します。具体的には、(ア)地球環境という視点からみた新たな理数教育カリキュラムや日常生活及び先端科学技術とリンクした理数教育カリキュラムの構築、(イ)最先端の研究成果から様々なトピックの提案を「教科学」の立場から行い、情報教育・情報科学の知識を活用して、教材化及び必要なデジタルコンテンツ化を図る、(ウ)電子黒板やPDA端末などのICT環境が整備された教室における教育内容・教育方法のあり方、あるいは学習集団の特性・行動パターンを反映しうる動的な教材を開発します。

### ③ 創造系教科学分野

音楽科・美術科・体育科・家庭科・技術科等では、子どもたちの潜在的能力や感性を引き出し、これらを育てる活動を支援する方法を組織的・系統的に開発していく必要があります。この分野において「生きていく上で基礎となる幅広い生活力や、健康あるいは体力を備え、豊かな表現力を発揮できる人間の育成」を目指し、「生活力」、「身体力」、「表現力」を中心とした教育論、教科内容の構成原理や教育方法、教材を開発します。具体的には「生活力」の周辺領域として、異世代との共感力、自らの生活課題の発見、生活課題を解決する知識・技術、ものづくり教材開発、ものづくり教材の授業実践等があります。「身体力」の周辺領域として、保健情報の収集と分析、体育教師教育論、運動学習、運動に対する動機づけ等があります。「表現力」の周辺領域として、観賞とリテラシー、思考プロセスと表現技法、音楽と身体の動き、発想支援等があります。



#### 4. 修了要件・学位

##### <修了の要件>

標準修業年限は3年ですが、特に優れた研究業績をあげた者にあつては修了年限の短縮も可能です。修了に必要な取得単位数は20単位以上とし、基礎科目は6単位以上、分野科目は10単位以上、応用科目は4単位以上です。なお、分野科目は選択科目から10単位以上を取得する必要がありますが、「教育環境学」の分野科目のうちから2単位及び教育環境学分野以外の3分野の選択科目のうちから2単位の計4単位は必ず履修します。

本共同専攻は、必要な研究指導を受けた上に、学位論文の審査及び論文の内容や専門分野に関する口述ないし筆記試験等に合格することを修了要件として課します。なお、学位論文の提出要件は、本共同専攻内の申し合わせに基づくものとします。

単位履修表

専攻	科目		分野科目				応用科目	合計
	基礎科目		教育環境学 分 野	人文社会系 教科学分野	自 然 系 教科学分野	創 造 系 教科学分野		
	必修	選択	選択	選択	選択	選択	必修	
共同教科 開発学専攻	3	3	10				4	20
合計	6		10				4	20

##### <学位論文と学位の授与>

学位論文は、本共同専攻の目標とするところに従い、「教科開発学」を主領域として「教育環境学」及び「教科学」にかかわる実証的な内容とするものとなります。

本共同専攻の課程を修了した者に対しては、愛知教育大学及び静岡大学から博士の学位を授与します。学位記には愛知教育大学及び静岡大学の大学名が記載されます。

博士の学位を授与するにあたって付記する専攻分野の名称は、「博士（教育学）」とします。

なお、学位を授与された者が、学位の名称を用いるときは、両大学名を付記するものとします。

「博士（教育学，愛知教育大学及び静岡大学）」

#### 5. 研究指導体制

本共同専攻における教育は、授業科目の履修と学位論文の作成に関する指導によって行います。学生の希望等を踏まえて決定した本籍を置く大学の研究指導教員を主指導教員とし、主指導教員は学位論文の指導のみならず、履修指導も行います。本共同専攻では、主指導教員の他に、両方の大学から少なくとも1名以上の副指導教員を配置し、3名以上の教員で指導します。このように共同大学院の特色を活かした指導体制を整え、様々な研究分野を包含する指導体制の充実を図ります。

本共同専攻の学生は、主指導教員の指導の下に科目の履修方針を決めます。講義は、履修登録に沿って履修します。入学時に合同オリエンテーション等を行い、主指導教員、副指導教員等と学生の信頼関係を作り、3年間共に学び、研究していく関係を構築するために両大学の教員と学生、あるいは学生同士が直接対面して密に交流する機会を設けます。

講義や研究指導に関して、遠隔教育システムを取り入れて、教員及び学生の大学間の移動に配慮しています。

セミナー方式で開催する演習等においては、両大学の間地点にある浜松市で行います。

## 6. カリキュラム

本共同専攻の教育課程は、博士後期課程が担う科目群として「教科開発学」に関する「基礎科目」、各分野の専門的な「分野科目」、各分野の総合的な「応用科目」の3つの科目で構成されています。

基礎科目の「教科開発学原論（2単位）」では、「教科開発学」の原理的諸課題や「教科開発学」の研究方法論を習得し、「教科開発学実践論（1単位）」では、大学教員としての教育実践力、教員FD等、実践的諸課題を探究します。これら2科目は、必修です。その他も含めて基礎科目群からは、必修科目の2科目3単位を含め選択科目のうちから3単位、計6単位以上を選定して履修します。

分野科目は、「教育環境学」と「教科学」の先進的かつ多様な知見を習得するとともに各教員の研究活動に基づく最先端の科目を「教科開発学」の分野科目として開講します。教育環境学分野ではマネジメント領域、教育方法領域、環境領域から科目を構成し、学校を取り巻く諸環境や利点を把握し、これらの知見を教科の開発研究に活用することを追究します。

学校教育を取り巻く諸環境の特性や利点を把握し、 それらを取り入れて教育に有効に活用する能力を育成する。		
<u>マネジメント領域</u> 学校経営論研究 学校危機管理論研究 教育経営臨床論研究	<u>方法領域</u> 教育課程論研究 教育工学論研究 学習科学論研究	<u>環境領域</u> 遊び文化環境論研究 学校適応論研究

教育環境学分野における分野科目

「教科学」は、「人文社会系」、「自然系」、「創造系」という三つの分野に分類し、「教育論」、「教育内容論」、「教材論」の三つの基本軸から科目を構成します。「教科学」では、教科内容を構成する学問の構築をめざし、教科のあり方・枠組そのものを検討し、人文社会系教科学、自然系教科学、創造系教科学の各分野の先端的な知識を修得します。

人文社会系教科学分野では、言語・多文化領域、歴史領域、風土領域から科目を構成し、教育方法・教材開発を行います。

言語に関する「教科学」の開発 地理学・民俗学・歴史学における教材の開発		
<u>言語・多文化領域</u> 多言語多文化教材論研究 言語教育内容論研究 外国語教育論研究 国語科教育教材論研究 生活科教育内容論研究 国語教育論研究	<u>歴史領域</u> 歴史教育内容論研究 歴史教材論研究	<u>風土領域</u> 地理学教材論研究 民俗学教材論研究

人文社会系教科学分野における分野科目

自然系教科学では、先端科学と教科内容領域、教材開発と学習支援領域、教育方法の開発領域から科目を構成し、先端科学技術と関連した自然系教科のカリキュラムを構築し、教育の情報化に対応した教育方法・教材開発を行います。

<p>先端科学技術とリンクした理科教育カリキュラムの構築 教育の情報化に対応した教育方法・教材開発</p>		
<p><u>先端科学と教育内容領域</u> 理科教育内容論研究 生物教育内容論研究</p>	<p><u>教材開発と学習支援領域</u> 数学教材論研究 物理教材論研究 自然系教材開発論研究</p>	<p><u>教育方法の開発領域</u> 数学教育論研究 理科教育論研究</p>

自然系教科学分野における分野科目

創造系教科学分野では、生活力領域、身体力領域、表現力領域から科目を構成し、基礎的な生活力や健康・体力を備え、豊かな表現力を発揮できるような教育方法・教材開発を行います。

<p>基本的な生活力や健康・体力を備え、豊かな表現力を発揮できる 人間の育成をめざす教科学を構想できる力量の形成</p>		
<p><u>生活力領域</u> 家政教育内容論研究 技術教育内容論研究 家庭科教材論研究 技術教育教材論研究</p>	<p><u>身体力領域</u> 体育教育論研究 体育教育内容論研究 保健教育内容論研究 体育・課外活動教材論研究</p>	<p><u>表現力領域</u> 音楽教育論研究 美術教材論研究</p>

創造系教科学分野における分野科目

なお、分野科目は選択科目から10単位以上を取得する必要があるが、「教育環境学」の分野科目のうちから2単位及び教育環境学分野以外の3分野の選択科目のうちから2単位の計4単位は必ず履修します。

応用科目では、全教員と全学生が一堂に会し、(1) 教員がそれぞれの研究課題を提示し、学生と討議する、(2) 学生自身が、「教科開発学とは何か」、「その研究方法論と課題」について問いながら自己の研究課題を追究し、その成果をまとめて発表します。「教科開発学セミナーⅠ(2単位)」と「教科開発学セミナーⅡ(2単位)」は、必修です。応用科目群では、必修科目の2科目4単位以上を選定して履修します。



開設予定授業科目・担当教員及び講義開講場所等（2016年度）

科目区分	授業科目	単位数	担当教員	愛知教育大学 キャンパス (刈谷市)	静岡大学 キャンパス (静岡市)	
専攻基礎科目	必修科目	教科開発学原論	2	子安 潤 石川 恭 熊倉 啓之 黒川 みどり 杉山 康司 村上 陽子 益川 弘如	○	○
		教科開発学実践論	1	稲葉 みどり 中野 真志 小川 裕子 小南 陽亮 松永 泰弘 坂口 京子 紅林 秀治	○	○
	選択科目	文化資源活用論	1	西宮 秀紀 野地 恒有 伊藤 貴啓 丹藤 博文	○	
		科学技術活用論	1	岩山 勉 稲毛 正彦 飯島 康之	○	
		教育評価実証方法論	1	石田 靖彦 倉本 哲男 古田 真司 筒井 清次郎	○	
		教育プログラム開発論	1	山崎 保寿 村山 功		○
		表現・鑑賞論	1	北山 敦康 伊藤 文彦		○

		教育フィールド調査論	1	丹沢 哲郎 村越 真		○
		教育プレゼンテーション論	1	白畑 知彦 澤渡 千枝		○
専攻分野科目	教育環境学分野選択科目	教育課程論研究	2	子安 潤	○	
		遊び文化環境論研究	2	石川 恭	○	
		教育経営臨床論研究	2	倉本 哲男	○	
		学校適応論研究	2	石田 靖彦	○	
		学校経営論研究	2	山崎 保寿 益川 弘如		○
		学校危機管理論研究	2	村越 真		○
		教育工学論研究	2	村山 功		○
		学習科学論研究	2	益川 弘如		○
	人文社会科学分野選択科目	多言語多文化教材論研究	2	中田 敏夫	○	
		言語教育内容論研究	2	稲葉 みどり	○	
		歴史教育内容論研究	2	西宮 秀紀	○	
		民俗学教材論研究	2	野地 恒有	○	
		地理学教材論研究	2	伊藤 貴啓	○	
		国語科教育教材論研究	2	丹藤 博文	○	
		生活科教育内容論研究	2	中野 真志	○	
		外国語教育論研究	2	白畑 知彦		○
		歴史教材論研究	2	黒川 みどり		○
		国語教育論研究	2	坂口 京子		○
	自然系科学分野選択科目	数学教材論研究	2	飯島 康之	○	
		物理教材論研究	2	岩山 勉	○	
		理科教育内容論研究	2	稲毛 正彦	○	
		数学教育論研究	2	熊倉 啓之		○
生物教育内容論研究		2	小南 陽亮		○	
理科教育論研究		2	丹沢 哲郎		○	
自然系教材開発論研究		2	澤渡 千枝		○	
		体育教育内容論研究	2	筒井 清次郎	○	
		保健教育内容論研究	2	古田 真司	○	

創造系 科学分野 選択科目		音楽教育論研究	2	北山 敦康		○
		美術教材論研究	2	伊藤 文彦		○
		体育教育論研究	2	新保 淳		○
		技術教育内容論研究	2	松永 泰弘		○
		家政教育内容論研究	2	小川 裕子		○
		技術教育教材論研究	2	紅林 秀治		○
		体育・課外活動教材論研究	2	杉山 康司		○
		家庭科教材論研究	2	村上 陽子		○
専攻応用科目	必修	教科開発学セミナーⅠ	2	全教員	○	○
		教科開発学セミナーⅡ	2	全教員	○	○
	選択	教科開発学セミナーⅢ	2	全教員	○	○

## 7. 教員一覧

( 愛知教育大学 )

分野	氏名	職名・学位	現在の主たる研究テーマ
教育環境学	子安 潤	教授 教育学修士	教育課程論 教科論 教育方法論 授業構成論 教材研究方法論 学力論 生活と教育の関係
	石川 恭	教授 博士(教育学)	遊び文化環境論 教育社会論 余暇教育論 遊戯文化論 生涯スポーツ論 子どもと遊び論
	倉本 哲男	教授 博士(教育学)	授業／教育課程・学級経営・学校経営論 カリキュラムマネジメント論 レッスン・スタディー論 アクションリサーチ論 Ed.D.指導論 サービス・ラーニング論

	石田 靖彦	准教授 博士 (心理学)	教育・社会心理学 学校・学級への適応過程 関係の親密化 自己評価維持機制
人 文 社 会 系 教 科 学	西宮 秀紀	教授 博士 (文学)	歴史教育内容論 古代東海地域史論 日本古代史論 日本古代文物論 日本古代史資料論 日本古代宗教論
	野地 恒有	教授 博士 (文学)	社会科教育内容論 日本民俗論 近現代庶民生活史論 歴史民俗博物館論 博物館教育論 フィールドワーク調査論 郷土研究方法論
	稲葉みどり	教授 博士 (学術)	英語科教育論 英語科教育方法論 英語教授法 異文化理解教育 日本語教授法 日本語教育実践研究 留学生教育 第一言語習得及び第二言語習得
	中田 敏夫	教授 文学修士	外国人児童生徒教育論 国語リライト教材論 母語保持政策論 言語文化論 戦前台湾における国語教育論 標準語と地域言語教育論 近代標準語成立論 近代語彙 (学校用語) の成立論
	伊藤 貴啓	教授 博士 (理学)	地理学教材論 農業地理論 経済地理論 地誌論 教師の力量形成と地域教材開発 農業地域の自立的発展とその条件 ヨーロッパ国境地帯の空間動態 ヨーロッパにおけるルラルツリズムと農村の持続的発展

	中野 真志	教授 博士（文学）	生活科教育論 総合的な学習の理論と実践 社会科教育論 カリキュラム論 教育方法論 ジョン・デューイの教育論
	丹藤 博文	教授 教育学修士	言語教育方法論 文芸批評理論 文学教育論 文学教材研究論 国語科授業方法論 物語理論研究
自然系 教 科 学	岩山 勉	教授 博士（理学）	理科教材開発論 理科（物理）教育論 理科におけるものづくり教育 先端科学技術の活用と還元 自然エネルギー利用技術 半導体光物性 ビーム（イオン，レーザー）物性
	稲毛 正彦	教授 理学博士	理科教育内容論 環境科学による教科開発 無機化学 錯体化学 生物無機化学
	飯島 康之	教授 教育学修士	数学教育論 教材開発論 学習環境開発論 コンテンツ開発論 授業研究 図形指導 数学的問題解決
創造系 教 科 学	古田 真司	教授 博士（医学）	学校保健論 保健教育内容論 学校疾病予防論 健康情報リテラシー 保健分野の批判的思考力 養護教諭が行う保健指導 児童・生徒の不定愁訴への対応
	筒井清次郎	教授 博士（理学）	体育教育内容論 運動学習論 運動認識論 身体の協応

			動機づけ 運動有能感 幼児の運動能力
--	--	--	--------------------------

( 静岡大学 )

分野	氏名	職名・学位	現在の主たる研究テーマ
教育 環境学	山崎 保寿	教授 博士 (学術)	教育課程経営 コミュニティ・スクール 教師の資質能力 キャリア教育 校内研修 高等学校 (後期中等教育)
	村越 真	教授 博士 (心理学)	学校の危機管理 空間認知と地図理解の認知過程 自然体験活動のリスクマネジメント リスク認知 安全教育
	村山 功	教授 教育学修士	認知心理学 理科教育 情報教育 I C T 校内研修 授業研究
	益川 弘如	准教授 博士 (認知科学)	学習科学 21 世紀型スキル・能力 アクティブ・ラーニング I C Tを活用した授業 学力の多面的な評価 学習プロセス分析 授業研究と教師教育 認知科学
人文 社会 系 教科 学	黒川みどり	教授 博士 (文学)	日本近現代史 日本近現代思想史 歴史教育 近代日本のマイノリティ 近代日本のアジア認識
	白畑 知彦	教授 博士 (文学)	第二言語としての英語習得研究 第二言語としての日本語習得研究 外国語としての英語教授法 外国語学習論 児童英語教育論 教室における第二言語習得

			外国語学習評価論 英語教育課程論
	坂口 京子	教授 博士（教育学）	国語・国語科（言語教育）カリキュラム論 国語科目的・目標論 国語科授業研究 国語科教材開発論 国語科教師教育 戦後国語教育史
自然系 教科 学	丹沢 哲郎	教授 博士（教育学）	理科教育課程論 アメリカ理科教育史 理科指導論 科学的リテラシー論 STS教育 理科目的論・目標論 高校生物教育論 理科教師教育
	小南 陽亮	教授 理学博士	生物多様性教育のための教材開発 生態系教育内容論 生態系における生物種間相互作用 里山における生物多様性の保全 生物の共存メカニズム 生物群集の動態 絶滅危惧種の保全 植物の繁殖戦略
	熊倉 啓之	教授 理学修士	算数教育論 数学教育論 算数・数学教育課程論 算数・数学授業研究 算数・数学教材開発論 算数・数学教育の目的論 小・中・高接続カリキュラム論 数学教育の国際比較研究
	澤渡 千枝	教授 学術博士 工学博士	理科-技術科-家庭科の連携による科学教育法の開発 環境との共生を考慮したプラスチック材料の研究 高分子を利用した理科教育教材の開発 繊維・高分子の構造と物性
	新保 淳	教授 博士（教育学）	身体教育論 授業研究論 教員養成論 教師教育論 理論と実践の関係 スポーツ科学論 体育哲学
創 造 学 系 教 科			

松永 泰弘	教授 博士（工学）	熱弾性論 材料強度学 機能性材料応用開発 ものづくり教材開発 ものづくり教材の授業実践 動くおもちゃのデザインとメカニズム 地域におけるものづくり交流 ものづくり教室の評価基準
小川 裕子	教授 博士（工学）	学校行事等から繋げる家庭科の授業 住生活学習の教材開発 住生活学習で育つ能力 家庭科教育論 家庭科内容論
北山 敦康	教授 芸術学修士	授業デザイン ソルミゼーション研究 トニックソルファ法 コダーイ・コンセプト 器楽指導法 吹奏楽指導法 サクソフォン音楽の研究 認知科学
伊藤 文彦	教授 学術修士	美術教育論 デザイン教育論 デザインリテラシー教育論 デザインプロセス論 鑑賞方法 発想支援方法 コミュニケーションデザイン論
紅林 秀治	教授 博士（学校教育学）	技術教育論 技術教育教材開発 設計を主体とした技術教育 システム概念の形成過程
杉山 康司	教授 博士（スポーツ健康科学）	身体運動学 体力科学 体育・スポーツ科学 発育発達の科学 加齢と健康科学 スポーツ指導論
村上 陽子	教授 博士（学術）	食文化 食品・料理色彩学 食品物性学 調理学 家庭科におけるものづくり教育 教科連携



## 8. 教育方法

### 1 教育・研究指導

大学院の教育は、専攻に応じて教育上必要なものとして開設する授業科目の履修及び博士論文の作成等に対する指導によって行われます。

#### (1) 主指導教員

学位論文及び修学その他学生生活上の指導・助言を行うため、専攻に属する専任教員（大学院設置基準第9条に定める教員）のうちから主指導教員を定めます。主指導教員は、入学試験の出願に際して出された第1希望、または第2希望の教員であり、合格発表の際に通知された教員です。

#### (2) 副指導教員等の届

主指導教員とは別に、専攻に属する専任教員の中から、2名以上の副指導教員と、研究上の必要性に応じて指導補佐教員を定め、研究指導を受けます。副指導教員については、各大学から1名以上を選ぶものとします。学生は、原則として、授業開始日（合同ガイダンス実施日）から10日以内に、主指導教員の助言を得て副指導教員および指導補佐教員を選び、所定の様式による「副指導教員等申請書」により、研究科長あてに提出しなければなりません。

#### (3) 副指導教員等の決定

研究科長は、学生から提出のあった副指導教員等申請書に基づき、共同専攻連絡協議会の議を経て、それぞれの副指導教員および指導補佐教員を決定します。

### 2 単 位

各授業科目の単位数は、授業内及び授業外を合わせて、45時間の学修をもって1単位とします。多くの授業が、1時限（1コマ）を2時間（実際は90分）として、16回（定期試験を含む）で2単位としているのは、1時限の教室内の授業に対して、2時限分の教室外での事前学習及び事後学習（以下「自習学習」という。）を行って2単位という意味です（8回では1単位となります）。

### 3 授 業

#### (1) 学 期（授業期間）

学期を前期（4月1日～9月30日）、後期（10月1日～翌年3月31日）の2学期に区分し、さらに、開講する授業の日程によって、前期をおおよそA週（4月から5月）、B週（6月から7月）、C週（7月から8月）、後期をD週（10月）、E週（11月から1月）、F週（1月から2月）に分けて授業を実施します。

●詳細については、「時間割および授業カレンダー」を参照してください。

#### (2) 授業方法

授業の方法は、講義、演習のいずれかにより行います。

#### (3) 授業時間

授業は、原則として土曜日と日曜日の各5時限（計10時限）で実施します。

◎ 授業時間（土曜日および日曜日）

時 限	授業開始 ・ 終了時刻
1 時 限	9 : 0 0 ~ 1 0 : 3 0
2 時 限	1 0 : 4 0 ~ 1 2 : 1 0
3 時 限	1 3 : 0 0 ~ 1 4 : 3 0
4 時 限	1 4 : 4 0 ~ 1 6 : 1 0
5 時 限	1 6 : 2 0 ~ 1 7 : 5 0

(4) 履修方法

学生は、原則として土曜日と日曜日に愛知教育大学・静岡大学の両キャンパスで開講される授業及び夏季・冬季の休業等の長期休業期間に集中講義で開講される授業を履修します。

4 履修登録

(1) 履修手続き

学生は、主指導教員と相談の上、授業開始日（合同ガイダンス実施日）から10日以内に、その年度に履修しようとする全ての授業科目を愛知教育大学では教務課、静岡大学では教育学部学務係に提出します。その際、前期の履修科目については4月中に開講される科目を除き、4月末までに各事務に届け出れば変更は可能です。後期の履修科目については、9月末までに各事務に変更を届け出てください。それぞれの届け出期限以降の変更は、原則として認められません。なお、いずれの変更も主指導教員と相談の上、その許可を得て届け出をしてください。

(2) 講義室（集合場所）

講義等の初回の集合場所は、原則として本籍を置く大学の共同大学院講義室とします。ただし、掲示や合同ガイダンス等により指示ある場合には、指定場所へ集合してください。

5 成績および単位について

(1) 成績の評価は、筆記試験、口答試問、報告書等（以下「筆記試験等」）により行います。

(2) 成績評価のための条件

成績の評価には、その授業時間の3分の2以上の出席を必要とします。

(3) 成績評価の基準

成績の評価は、その授業の構成単位をS秀・A優・B良・C可又はD不可の評語にて判定し、C可以上を合格、D不可は不合格とし、合格した単位は取り消すことができません。ただし、下記の単位は認定しません。

成績評価の基準

- ① 合格した授業科目を再度受講して修得した単位  
② その他、定められた履修方法以外の方法により修得した単位

評価	評価基準（100点満点の場合）	
S 秀	90点以上	合 格
A 優	80点～89点	
B 良	70点～79点	
C 可	60点～69点	
D 不可	0～59点	不 合 格

(4) 単位の授与

本学は、履修登録した授業科目の授業を履修し、当該授業の筆記試験等に合格した学生に対し、所定の単位を授与します。

(5) 再・追試験

- 再試験は行いません。
- 追試験は、病気・災害等の特別の事情がある場合、愛知教育大学では教務課、静岡大学では教育学部学務係に願い出ることによって許可されることがあります。この願い出については、指導教員を通じて提出します。

(6) 不正行為

- 筆記試験等で不正と認められる行為があったときは、当該科目を不合格とします。
- 不正行為の内容によっては、その学期に修得したすべての単位を削除します。場合によっては、学則の規定により処分します。

**6 学位論文の提出**

学位論文及び学位授与は、指導教員の指導を受けて作成し、大学院研究科の審査を受けなければなりません。その詳細については、別途、お知らせします。

**7 長期履修学生制度について**

この制度は、原則として、職業を有している方や、育児・介護等の事由により通常期間での就学が困難であると認められる方の大学院での進学環境を改善するためのものです。現在のところ、両大学での取り扱いが異なるため、その詳細は、別途お知らせします。

**8 修学上の注意事項**

- 休学や退学の手続き等は、必要に応じて、各大学で指導を受けて下さい。
- 気象警報発令時・交通機関運休時・東海地震注意情報発令時等における休講の取扱いについては、両大学で異なるので、別途お知らせします。
- 両大学で利用できる情報ネットサービスの内容については、大学ごとに、別途お知らせします。

# 愛知教育大学と静岡大学の共同教科開発学専攻連絡協議会規程

2011年12月14日  
規程第142号

(目的)

第1条 この規程は、愛知教育大学学則（2004年学則第1号）第25条第3項及び静岡大学大学院規則（昭和39年4月27日）第5条に定める共同教科開発学専攻（以下「共同専攻」という。）に係る教育，研究等に関する重要な事項を協議し，円滑な管理運営を行うため設置する共同教科開発学専攻連絡協議会（以下「連絡協議会」という。）の組織及び運営に関し，必要な事項を定める。

(連絡協議会)

第2条 連絡協議会は，次の各号に掲げる委員で組織する。

- (1) 愛知教育大学及び静岡大学（以下「構成大学」という。）の共同専攻の専任教員
- (2) 構成大学の研究科長が特に必要と認めた者若干名
- 2 連絡協議会に議長を置き，連絡協議会の業務を掌理する。
- 3 議長は，連絡協議会を招集し，その議長となる。
- 4 議長の任期は，1年とし，委員の互選により選出し，構成大学間で隔年交代とする。
- 5 連絡協議会に副議長を置き，副議長は，議長を補佐し，議長に事故があるときは，その職務を代行する。
- 6 副議長の任期は，1年とし，議長が所属する大学と異なる大学の委員のうちから委員の互選により選出する。

(協議事項)

第3条 連絡協議会は，共同専攻に係る次の各号に掲げる事項を協議する。

- (1) 構成大学において開設する授業科目及びこれに係る教員の配置などカリキュラムの編成及び実施に関する基本的事項
- (2) 研究指導教員の選定に関する事項
- (3) 入学者選抜の方針及び実施計画に関する事項
- (4) 学生の身分取扱及び厚生補導に関する事項
- (5) 成績評価の方針に関する事項
- (6) 学位審査委員会の設置に関する事項
- (7) 学位の授与及び課程修了の認定に関する事項
- (8) 教育研究活動等の状況の評価に関する事項
- (9) 予算に関する事項
- (10) 広報に関する事項
- (11) 自己点検・評価に関する事項
- (12) FD推進に関する事項
- (13) 共同専攻の設置に関する協定書の改正及び廃止並びに運用に関する事項
- (14) その他構成大学が必要と認めた事項

2 協議内容は、構成大学の教授会若しくは研究科委員会又は教育研究評議会（以下「会議等」という。）に報告し、必要に応じて承認を得るものとする。

3 前項の承認を得るものについては、同項の会議等の議を経て、連絡協議会が別に定める。  
（専門委員会）

第4条 連絡協議会の円滑な運営を図るため、連絡協議会の下に次の各号に掲げる専門委員会を置く。

- (1) 運営委員会
- (2) 学務委員会
- (3) 入試委員会
- (4) 学位審査委員会
- (5) 教員人事選考委員会
- (6) 紀要編集委員会
- (7) その他連絡協議会が必要と認めた委員会

2 専門委員会に関する事項は、別に定める。  
（議事及び運営）

第5条 連絡協議会は、構成委員の3分の2以上の出席をもって成立する。ただし、次の各号に掲げる者は、構成委員の総数に算入しない。

- (1) 休職又は停職中の者
- (2) 育児休業中の者
- (3) 30日以上にわたる連続した休暇を取得中の者

2 連絡協議会の議事は、出席委員の過半数の賛成をもって決し、可否同数の場合は議長が決する。ただし、連絡協議会が特に重要と認めた事項については、出席委員の3分の2以上の賛成により決する。

3 連絡協議会が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

4 この規程に定めるもののほか、連絡協議会の議事及び運営について必要な事項は、連絡協議会が定める。

（事務局）

第6条 この規程に定める事務を取り扱うために事務局を置く。

2 事務局は、愛知教育大学事務局及び静岡大学教育学部事務部が担当する。

附 則

この規程は、2012年4月1日から施行する。

附 則（2014年規程第39号）

この規程は、2014年12月17日から施行する。

附 則（2015年規程第58号）

この規程は、2015年6月3日から施行する。

## Ⅱ. 共同教科開発学専攻連絡協議会 議長年次報告

## 教科開発学連絡協議会 議長年次報告

### 1. 入学試験及び入学者について

平成29年度入学試験は、平成28年11月5日（土）に愛知教育大学を会場に実施されました。合格発表は11月9日（水）に行い、今回は9名（愛教大籍5名、静大籍4名）の合格者をだすことができました。

なお、平成30年度入学試験は平成29年11月4日（土）、合格発表は11月17日（金）を予定しています。詳しくは、共同教科開発学専攻専用のウェブページを参照下さい。

### 2. 平成28年度合同ガイダンスについて

本年度は、平成28年4月3日（日）に浜松市のアクトシティ浜松内にある、（財）浜松市文化振興財団 コングレスセンターにて開催されました。1年生は午前10時から、2年生以上は午後1時からガイダンスを実施しました。午前と午後あわせて、学生は39名、共同教科開発学専攻専任教員は34名が出席しました。事務手続処理や履修方法を説明する目的以外にも、同じ目的に向かって努力していくという動機づけを高めること、そしてお互いに親睦を深めることも目的です。両大学の間地点である浜松市で合同ガイダンスを行っており、全員参加が原則です。

### 3. 平成28年度教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲについて

教科開発学セミナーⅠ、Ⅱは平成29年2月11、12日（土・日）の2日間にわたって、浜松市のサーラシティ浜松で開催されました。セミナーⅠは1年生が、セミナーⅡは2年生が対象で、それまでに自身が研究してきた成果を報告します。1、2年生や全教員が参加して、朝から夕方まで各報告に対して活発な議論が展開されます。初日の夜は院生や教員が集い、夕食をともにしながら交流を深めます。セミナーⅢは、平成28年8月21日（日）に浜松市のサーラシティ浜松で開催しました。これは、博士論文の概要の準備ができ、提出が目前の3年生が対象で、その報告をもとに、全教員が参加し議論や助言を行い、博士論文提出に向けた最終準備を行う場でもあります。他の学生や今後の提出する予定の学生も多数聴講に来ます。

### 4. 共同教科開発学専攻連絡協議会等と各会員名簿

基本的に、毎月1回、全教員が集まり専攻連絡協議会が開催されます。この会議は愛教大と静大の全教員による会議のため、テレビ会議システムを使用して実施されています。この会議のために、各大学では専攻会議というものを開催し、連絡協議会で審議する議題について、それぞれの大学の意見を集約します。

### 5. 共同教科開発学専攻指導体制

それぞれの大学に在籍する学生に対し、主指導教員1名の他に、複数名の副指導教員、指導補佐教員が指導にあたります。そして、副指導教員の中には、必ず他方の大学の教員が少なくとも1名加わることになっています。様々に異なる研究領域を専門とする教員が指導に加わることで、院生が近視眼的思考に陥らないように努めています。このような指導体制は本専攻の特色の一つでもあります。

### 6. その他

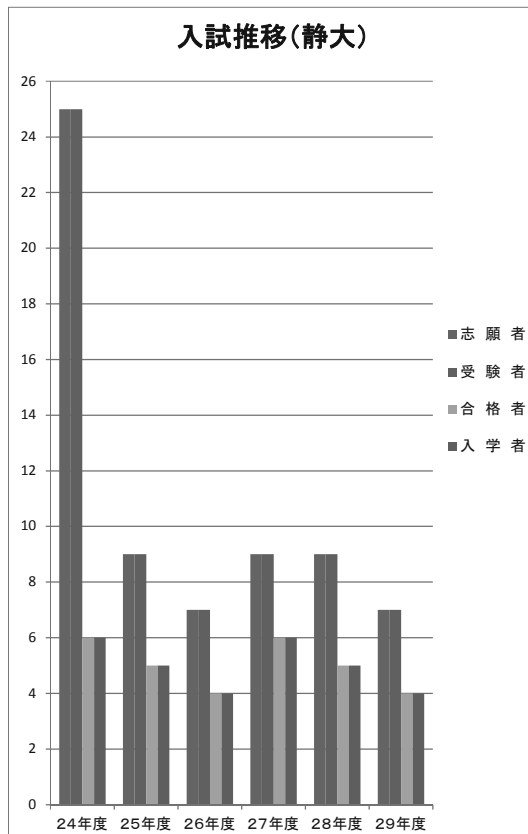
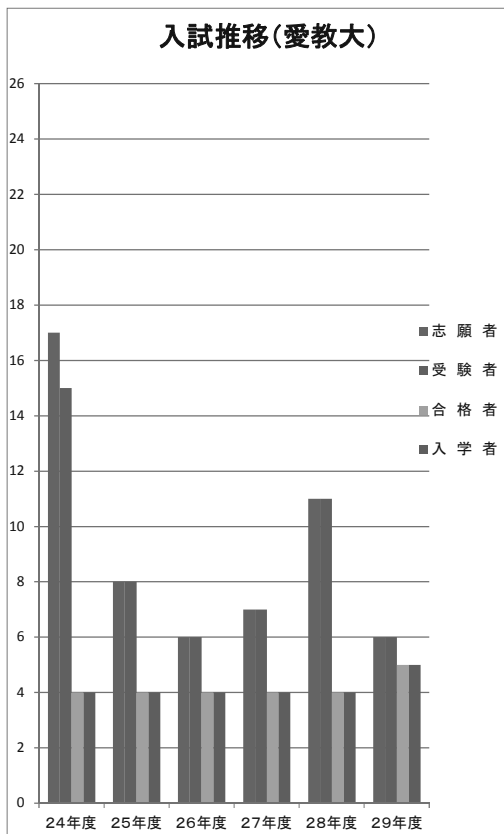
本文には掲げていませんが、論文審査会（最終試験）が平成28年7月18日（月）と平成29年1月22日（日）に愛知教育大学で行われました。審査会は公開で実施され、4名が臨み、博士論文に対して忌憚のない問に対し、明確な回答が行われました。この審査会はテレビ会議システムで静岡大学にも同時に配信されました。その結果、4名の合格が連絡協議会で認められました。その内容に関しては、VI. 修了生の論文要旨と博士論文執筆談が掲載されていますので、ご参照下さい。

入学試験実施状況

愛知教育大学															
年度	区分	定員	志願者			受験者			合格者			入学者			合格率
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
24年度		4	8	9	17	7	8	15	1	3	4	1	3	4	26.67%
25年度		4	4	4	8	4	4	8	1	3	4	1	3	4	50.00%
26年度		4	3	3	6	3	3	6	3	1	4	3	1	4	66.67%
27年度		4	3	4	7	3	4	7	1	3	4	1	3	4	57.14%
28年度		4	5	6	11	5	6	11	3	1	4	3	1	4	36.36%
29年度		4	3	3	6	3	3	6	3	2	5	3	2	5	83.33%

静岡大学															
年度	区分	定員	志願者			受験者			合格者			入学者			合格率
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
24年度		4	21	4	25	21	4	25	5	1	6	5	1	6	24.00%
25年度		4	8	1	9	8	1	9	4	1	5	4	1	5	55.56%
26年度		4	5	2	7	5	2	7	3	1	4	3	1	4	57.14%
27年度		4	5	4	9	5	4	9	4	2	6	4	2	6	66.67%
28年度		4	5	4	9	5	4	9	2	3	5	2	3	5	55.56%
29年度		4	4	3	7	4	3	7	3	1	4	3	1	4	57.14%

合計															
年度	区分	定員	志願者			受験者			合格者			入学者			合格率
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
24年度		8	29	13	42	28	12	40	6	4	10	6	4	10	25.00%
25年度		8	12	5	17	12	5	17	5	4	9	5	4	9	52.94%
26年度		8	8	5	13	8	5	13	6	2	8	6	2	8	61.54%
27年度		8	8	8	16	8	8	16	5	5	10	5	5	10	62.50%
28年度		8	10	10	20	10	10	20	5	4	9	5	4	9	45.00%
29年度		8	7	6	13	7	6	13	6	3	9	6	3	9	69.23%





愛知教育大学大学院・静岡大学大学院 共同教科開発学専攻  
平成28年度 合同ガイダンス

日時： 平成28年4月3日（日） 10時30分～16時30分（予定）  
場所： アクトシティ浜松 コンgressセンター5階 53・54会議室  
（浜松市中区板屋町111番地の1）＜JR浜松駅前＞

◎午前の部（新入生向け）10：30～12：00

出席者： 共同教科開発学専攻連絡協議会 正副議長，石川学務委員長  
新入学生 9名  
両大学事務職員 4名

[プログラム]

1. 挨拶（議長）
2. 出席者紹介 ※所属・氏名等のみ
3. 専攻の概要（議長）
4. 教育方法について（学務委員長）
5. 副指導教員の申請について（学務委員長）
6. 研究紀要について（議長）
7. 履修登録，各大学での手続，学生生活および図書館利用等について（事務職員）

◎午後の部（全学生対象）13：00～16：30

出席予定者： 共同専攻専任教員 34名  
学生 39名（新入学生 9名、2年生 10名、3年生 20名）  
静岡大学教育学部（事務職員）2名  
愛知教育大学（事務職員）2名

[プログラム]

司会進行：石川（学務委員長）

1. 挨拶（共同専攻連絡協議会議長）
2. 出席者紹介（教員、学生） ※所属・氏名等のみ
3. 年間スケジュールと時間割（学務委員長）
  - ・教科開発学セミナーⅢ  
（日程：平成28年8月21日（日）、場所：サーラシティ浜松【予定】）
  - ・教科開発学セミナーⅠ及びⅡ  
（日程：平成29年2月11日（土）・12日（日）、場所：サーラシティ浜松【予定】）
  - ・教科開発学研究会  
（日程：平成29年3月5日（日）、場所：静岡大学）
  - ・平成29年度 合同ガイダンス  
（日程：未定、4月上旬（4月2日）、場所：未定）
4. 研究計画と学位取得について（古田学位審査委員長）
  - ・学位提出までのスケジュールの確認
  - ・提出書類、手続きの確認、審査日程等
5. 研究紀要について（稲毛紀要編集委員長）
6. 教科開発学研究会について（学位審査委員長）
7. 分野別ガイダンス
  - ・教員自己紹介（3～5分程度）
  - ・副指導教員の決定（新入生）

- ・籍を置かない大学側の副指導教員との面談（2～3年生）
- ・履修・研究・博士論文執筆・学生生活等の相談（全学年）

※打ち合わせ終了後は自由解散となります。

●全体ガイダンスでの配付資料：

1. 学生便覧
2. 学生生活に関する冊子（新入生分のみ）
3. 時間割表（一覧表およびカレンダー）
4. 学生名簿
5. 教員名簿（全教員の名簿と連絡先一覧）
6. 指導教員一覧（2年生・3年生の指導教員、副指導教員等の一覧）
7. 履修登録票（1年生から3年生へ配布）
8. 学位提出までのスケジュール表
9. ガイダンス式次第（本資料）

●1年生ガイダンスでの配付資料：

1. 副指導教員等申請書
2. 学生証等
3. 授業シラバス
4. その他、関係書類

**愛知教育大学大学院・静岡大学大学院共同教科開発学専攻**  
**平成28年度教科開発学セミナーⅢ（合同セミナーⅢ）開催要項**

日時：平成28年8月21日（日）10時00分～14時50分

場所：サーラシティ浜松 3F スクエアB

浜松市中区砂山町155-1（JR浜松駅南口より徒歩5分）

出席予定者：平成28年度3年生4名（静大2名，愛教大2名）

共同専攻専任教員

発表者以外の当専攻学生（聴講のみ全学年対象）

**○教科開発学セミナー（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ）の概要**

本教科開発学セミナーは、院生が教科開発学とは何かを問いながら、それまでに研究してきた成果を、他の院生ならびに全教員の前で口頭発表する場である。他分野の教員も加わり、異なる専門性の観点から研究成果について論評する授業形態は、本専攻の特色の1つである。このセミナーでの研究発表の積み重ねが、博士論文となって実を結ぶことが期待される。さらに、「教科開発学という学問領域とは何か」について、全員で議論することにより、教員と院生の共通理解を深めて行く。

**○教科開発学セミナーⅢの概要（シラバスより）**

博士論文の目次構成を確定し、博士論文の草稿を基に、その内容を発表する。

※3年生対象の選択科目であるが、学位論文を提出する年度に履修することが望ましい。

**○セミナーⅢの前後の研究指導**

セミナーⅢは、事前および事後の研究指導の時間を含めて、1科目2単位として認定している。

学生は、事前に主指導教員や他の指導教員による個別の研究指導を受けて、発表内容を検討しておくとともに、事後はセミナーⅢの参加者の意見や議論を踏まえて、指導教員の指導の下に博士論文完成に向けて検討することが必要である。

**○発表の概要**

- ・1演題，発表25分，質疑応答25分の計50分とする。
- ・1会場で，それぞれ午前2本，午後2本とする。
- ・座長は，副指導教員のうち学生が籍を置かない側の教員が担当する。

**○当日のスケジュール 進行：学務委員**

1. 開会の挨拶 共同専攻連絡協議会 議長（10:00～10:05）
2. 午前の発表 2本（10:05～11:50）
3. 午後の発表 2本（13:00～14:45）
4. 全体の講評 共同専攻連絡協議会 副議長（14:45～14:50）

## 平成28年度教科開発学セミナーⅢ 合同発表会プログラム

1. 開会の挨拶 共同専攻連絡協議会議長 (10:00~10:05)

2. 午前の発表 2 演題 (10:05~11:45)

演題 1 (10:05~10:55)

米国ハイスクールにおける「生物学」の成立過程に関する研究  
—ヒトのからだの扱いに焦点を当てて—

発表者：30440022 日高 翼 (自然系教科学分野)

主指導教員：丹沢哲郎 教授 (静岡大学)

座長：稲毛正彦 教授 (愛知教育大学)

演題 2 (11:00~11:50)

投動作学習プログラムの開発とその学習効果

発表者：30440004 大矢隆二 (創造系教科学分野)

主指導教員：新保 淳 教授 (静岡大学)

座長：野地恒有 教授 (愛知教育大学)

3. 昼食 (休憩) (11:50~13:00)

4. 午後の発表 2 演題 (13:00~14:50)

演題 3 (13:00~13:50)

A S D 児の対人関係の向上を目指した心理劇的アプローチ  
—通級指導教室における自立活動—

発表者：214D002 長田洋一 (人文社会系教科学分野)

主指導教員：稲葉みどり 教授 (愛知教育大学)

座長：山崎保寿 教授 (静岡大学)

演題 4 (13:55~14:45)

有意味学習の視点からみた算数・数学の問題解決型授業についての研究

発表者：214D004 小池嘉志 (自然系教科学分野)

主指導教員：稲毛正彦 教授 (愛知教育大学)

座長：熊倉啓之 教授 (静岡大学)

5. 全体の講評 共同専攻連絡協議会副議長 (14:45~14:50)

**愛知教育大学大学院・静岡大学大学院 共同教科開発学専攻**  
**平成28年度 教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ 開催要項**

日時：平成29年2月11日（土）10時00分～17時45分 セミナーⅡ

平成29年2月12日（日）9時30分～17時30分 セミナーⅠ

場所：サーラシティ浜松 3F スクエアB

浜松市中区砂山町155-1（JR浜松駅南口より徒歩5分）

出席予定者：セミナーⅠ受講生12名(愛教大4名，静大8名)，セミナーⅡ受講生9名(愛教大5名，静大4名)  
共同専攻専任教員

### ○教科開発学セミナー（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ）の概要

本教科開発学セミナーは、大学院生が教科開発学とは何かを問いながら、それまでに研究してきた成果を、他の院生ならびに全教員の前で口頭発表する場である。他分野の教員も加わり、異なる専門性の観点から研究成果について論評する授業形態は、本専攻の特色の1つである。このセミナーでの研究発表の積み重ねが、博士論文となって実を結ぶことが期待される。さらに、「教科開発学という学問領域とは何か」について、全員で議論することにより、教員と院生の共通理解を深めて行く。

### ○教科開発学セミナーⅠおよびⅡの位置づけ

セミナーⅠは、博士論文の構想発表会として、セミナーⅡは、博士論文の中間発表会として位置づけられている。

### ○発表の概要

・1演題につき、次の通りとする。

セミナーⅠ：発表15分，質疑応答15分 計30分（午前4本，午後8本）

セミナーⅡ：発表20分，質疑応答20分 計40分（午前3本，午後6本）

・座長は、副指導教員のうち学生が籍を置かない側の教員が担当する。

### ○当日のスケジュール 進行：学務委員

<2月11日> セミナーⅡ

1. 開会の挨拶 共同専攻連絡協議会 議長（10:00～10:05）
2. 午前の発表 3本（10:05～12:15）
3. 午後の発表 6本（13:15～17:40）
4. 全体の講評 共同専攻連絡協議会 副議長（17:40～17:45）
5. 懇親会（18:00～20:00）

<2月12日> セミナーⅠ

1. 開会の挨拶 共同専攻連絡協議会 副議長（9:30～9:35）
2. 午前の発表 4本（9:35～11:50）
3. 午後の発表 8本（12:50～17:25）
4. 全体の講評 共同専攻連絡協議会 議長（17:25～17:30）

平成28年度 教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ  
合同発表会 プログラム  
2月11日(土)  
(教科開発学セミナーⅡ)

1 開会挨拶 共同専攻連絡協議会 議長 10:00～10:05

2 午前の発表 3演題 10:05～12:15

演題1 10:05～10:45

日本語母語話者による英語の動詞の自他動性の修得と指導の効果検証  
—英語能格動詞に焦点をあてて—

発表者：30540001 大瀧 綾乃 (人文社会系教科学)

主指導教員：白畑 知彦 教授 (静岡大学)

座 長：野地 恒有 教授 (愛知教育大学)

演題2 10:50～11:30

中学生のネット依存の予防を目的とした教育実践研究

発表者：30540002 酒井 郷平 (教育環境学)

主指導教員：山崎 保寿 教授 (静岡大学)

座 長：石川 恭 教授 (愛知教育大学)

演題3 11:35～12:15

日本語を母語とする英語学習者の派生接辞習得とその指導研究

発表者：30540005 田村 知子 (人文社会系教科学)

主指導教員：白畑 知彦 教授 (静岡大学)

座 長：野地 恒有 教授 (愛知教育大学)

3 昼食(休憩) 12:15～13:15

4 午後の発表 6演題 13:15～17:40

演題4 13:15～13:55

英語学習における語彙の指導方法に関する研究

発表者：30440001 石川 芳恵 (人文社会系教科学)

主指導教員：白畑 知彦 教授 (静岡大学)

座 長：稲葉 みどり 教授 (愛知教育大学)

演題 5 14:00～14:40

5歳児の社会性の発達を促す集団保育実践に関する研究

発表者：213D002 名倉 一美 (教育環境学)

主指導教員：古田 真司 教授 (愛知教育大学)

座長：村越 真 教授 (静岡大学)

演題 6 14:45～15:25

自己理解を促す「職業」の指導法の開発

一軽度知的障害生徒の職業自立を目指す取組から一

発表者：215D001 伊藤佐奈美 (人文社会系教科学)

主指導教員：稲葉 みどり 教授 (愛知教育大学)

座長：村越 真 教授 (静岡大学)

演題 7 15:30～16:10

日本語教育実習での省察活動による言語教育観の変容の研究

発表者：215D002 小原亜紀子 (人文社会系教科学)

主指導教員：稲葉 みどり 教授 (愛知教育大学)

座長：山崎 保寿 教授 (静岡大学)

演題 8 16:15～16:55

幼児期における運動能力向上につながる運動遊びに関する研究

発表者：215D003 内田 智子 (創造系教科学)

主指導教員：筒井 清次郎 教授 (愛知教育大学)

座長：新保 淳 教授 (静岡大学)

演題 9 17:00～17:40

手遊びを用いて幼児と英語に親しむ保育者養成の研究

発表者：215D004 横井 一之 (人文社会系教科学)

主指導教員：稲葉 みどり 教授 (愛知教育大学)

座長：白畑 知彦 教授 (静岡大学)

**5 全体の講評 共同専攻連絡協議会 副議長 17:40～17:45**

☆セミナーⅡ終了後に、学生・教員参加の懇親会を予定しています

2月12日(日)  
(教科開発学セミナーⅠ)

1 開会挨拶 共同専攻連絡協議会 副議長 9:30～9:35

2 午前の発表 4演題 9:35～11:50

演題1 9:35～10:05

認知言語学を援用した句動詞習得方法

発表者：216D001 中川 右也 (人文社会系教科学)

主指導教員：稲葉 みどり 教授 (愛知教育大学)

座長：白畑 知彦 教授 (静岡大学)

演題2 10:10～10:40

デジタル教科書活用の効果に関する研究

発表者：216D002 渡辺 芳朗 (人文社会系教科学)

主指導教員：稲葉 みどり 教授 (愛知教育大学)

座長：白畑 知彦 教授 (静岡大学)

演題3 10:45～11:15

Nurturant Fathering Scale、Father Involvement Scale 日本語版尺度作成とその意義

発表者：216D003 久米 泰輔 (創造系教科学)

主指導教員：古田 真司 教授 (愛知教育大学)

座長：村越 真 教授 (静岡大学)

演題4 11:20～11:50

保健教育におけるヘルスリテラシー育成に関する研究

発表者：216D004 森 慶恵 (創造系教科学)

主指導教員：古田 真司 教授 (愛知教育大学)

座長：小川 裕子 教授 (静岡大学)

3 昼食(休憩) 11:50～12:50



#### 4 午後の発表 8 演題 12:50～17:30

##### 演題 5 12:50～13:20

高校英語科における英詩のクリエイティブ・ライティングの導入とその効果と応用

発表者：30640001 漆畑 祐佳（人文社会系教科学）

主指導教員：白畑 知彦 教授（静岡大学）

座長：石川 恭 教授（愛知教育大学）

##### 演題 6 13:25～13:55

「単元の核となる社会的事象」を設定した社会科単元構想の一考察

—不平等条約改正過程の再検討に基づく、小学6年生・具体的な単元展開案—

発表者：30640002 大西 洋（人文社会系教科学）

主指導教員：黒川 みどり 教授（静岡大学）

座長：西宮 秀紀 教授（愛知教育大学）

##### 演題 7 14:00～14:30

家庭科教育の指導に関する検討

—子どもと家庭科教員の日常生活経験の視点から—

発表者：30640003 室 雅子（創造系教科学）

主指導教員：小川 裕子 教授（静岡大学）

座長：筒井 清次郎 教授（愛知教育大学）

##### 演題 8 14:35～15:05

日本近代史学の成立と歴史教育論

発表者：30640005 渡邊 明彦（人文社会系教科学）

主指導教員：黒川 みどり 教授（静岡大学）

座長：野地 恒有 教授（愛知教育大学）

##### 演題 9 15:10～15:40

小学校における若手研修主任の力量形成

発表者：30640005 渡邊 千佳（教育環境学）

主指導教員：村越 真 教授（静岡大学）

座長：倉本 哲男 教授（愛知教育大学）

演題 10 15:45～16:15

数学化する力の育成をめざした教材開発

発表者：30540003 佐藤 一（自然系教科学）

主指導教員：熊倉 啓之 教授（静岡大学）

座 長：岩山 勉 教授（愛知教育大学）

演題 11 16:20～16:50

知識構築環境の一貫性を持った説明構築過程の研究

一小学校理科の探究型の単元を題材として一

発表者：30540004 杉山 元洋（自然系教科学）

主指導教員：丹沢 哲郎 教授（静岡大学）

座 長：村越 真 教授（静岡大学）

演題 12 16:55～17:25

走概念及び学習観の変化に着目した走教育の実践研究

一小学6年生を対象として一

発表者：30540006 二見 隆亮（創造系教科学）

主指導教員：村越 真 教授（静岡大学）

座 長：筒井 清次郎 教授（愛知教育大学）

5 全体の講評 共同専攻連絡協議会 議長 17:25～17:30

## 平成28年度 共同教科開発学専攻連絡協議会等 開催日

	専攻会議		連絡協議会
	静岡大学	愛知教育大学	
4月	4/14(木) 研究科教授会終了後	4/11(月) 16時45分～	4/20(水) 16時45分～
5月	5/12(木) 研究科教授会終了後	5/16(月) 16時45分～	5/26(木) 16時45分～
6月	6/16(木) 研究科教授会終了後	6/13(月) 16時45分～	6/22(水) 16時45分～
7月	7/21(木) 研究科教授会終了後	7/19(火) 16時45分～	7/28(木) 16時45分～
8月			
9月	9/8(木) 研究科教授会終了後	9/12(月) 16時45分～	9/21(水) 16時45分～
10月	10/13(木) 研究科教授会終了後	10/17(月) 16時45分～	10/20(木) 16時45分～
11月	11/17(木) 研究科教授会終了後	11/14(月) 16時45分～	11/24(木) 16時45分～
12月	12/15(木) 研究科教授会終了後	12/12(月) 16時45分～	12/21(水) 16時45分～
1月	1/19(木) 研究科教授会終了後	1/16(月) 16時45分～	1/26(木) 16時45分～
2月	2/16(木) 研究科小委員会終了後	2/13(月) 連絡協議会終了後	2/22(水) 16時45分～
3月	3/16(木) 10時00分～	3/13(月) 16時45分～	3/22(水) 16時45分～

平成28年度愛知教育大学・静岡大学共同教科開発学専攻 各委員会委員名簿

委員会名	静岡大学			愛知教育大学		
	分野	H28	氏名	分野	H28	氏名
運営委員会	教育環境学	○	村越 真	人文社会系教科学		中田 敏夫
	自然系教科学		熊倉 啓之	自然科学系教科学	◎	岩山 勉
	人文社会系教科学		白畑 知彦	人文社会系教科学		西宮 秀紀
	教育環境学		山崎 保寿	教育環境学		石川 恭
	人文社会系教科学		黒川みどり	創造系教科学		筒井清次郎
	自然系教科学		丹沢 哲郎	創造系教科学		古田 真司
	創造系教科学		新保 淳	自然科学系教科学		稲毛 正彦
	自然系教科学		小南 陽亮	人文社会系教科学		野地 恒有
	創造系教科学		小川 裕子			
学務委員会	自然系教科学	○	熊倉 啓之	教育環境学	◎	石川 恭
	自然系教科学		丹沢 哲郎	人文社会系教科学		野地 恒有
	自然系教科学		小南 陽亮	自然科学系教科学		飯島 康之
	創造系教科学		村上 陽子	創造系教科学		古田 真司
	創造系教科学		杉山 康司	人文社会系教科学		中野 真志
入試委員会	創造系教科学	○	小川 裕子	教育環境学		子安 潤
	教育環境学		村山 功	人文社会系教科学		伊藤 貴啓
	人文社会系教科学		白畑 知彦	自然科学系教科学		岩山 勉
	人文社会系教科学		坂口 京子	創造系教科学	◎	筒井清次郎
	創造系教科学		新保 淳	人文社会系教科学		丹藤 博文
	自然系教科学		澤渡 千枝			
学位審査委員会	人文社会系教科学	○	黒川みどり	人文社会系教科学		伊藤 貴啓
	教育環境学		山崎 保寿	自然科学系教科学		飯島 康之
	自然系教科学		澤渡 千枝	創造系教科学	◎	古田 真司
	創造系教科学		紅林 秀治	教育環境学		倉本 哲男
紀要編集委員会	創造系教科学	○	伊藤 文彦	教育環境学		石田 靖彦
	教育環境学		益川 弘如	人文社会系教科学		稲葉みどり
	教育環境学		村越 真	自然科学系教科学	◎	稲毛 正彦
				創造系教科学		筒井清次郎
教員人事委員会	人文社会系教科学		白畑 知彦	教育環境学		石川 恭
	教育環境学		山崎 保寿	人文社会系教科学	◎	野地 恒有
	教育環境学	○	村越 真	自然科学系教科学		稲毛 正彦
	人文社会系教科学		黒川みどり	創造系教科学		古田 真司
	自然系教科学		丹沢 哲郎			
	自然系教科学		熊倉 啓之			
	自然系教科学		小南 陽亮			
	創造系教科学		新保 淳			
	創造系教科学		小川 裕子			

\* ◎は委員長, ○は副委員長

\* 将来構想, カリキュラム改革等の対応は, 運営委員会が行う。

平成24年度 共同教科開発学専攻指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	30240006	ながい 長倉 守	新保 淳	西宮秀紀	村越 真	村山 功	伊藤貴啓	中学校社会科における教師の授業実践力向上のための方法論開発に関する研究

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	212D001	おおしま みつよ 大島 光代	稲葉みどり	古田真司	村越 真			発達障害児の国語科指導に効果的な教材開発の研究
自然系教科学	212D002	おおはら しひろ 大西 俊弘	岩山 勉	稲毛正彦	熊倉啓之	飯島康之	丹沢哲郎	テクノロジー利用を前提とした高等学校教科のカリキュラム開発
教育環境学	212D003	はら いくみ 原 郁永	古田真司	筒井清次郎	新保 淳			児童・生徒のレジリエンスに着目した保健指導プログラムの開発とその検証
教育環境学	212D004	やまだ ちけみ 山田 丈美	稲葉みどり	西宮秀紀	山崎保寿			「言語」と「体験」を結び付ける合科的指導の実践的研究

平成25年度博士課程共同教科開発学専攻指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30340001	河合 美保 かわい みほ	村越 真	山崎保寿	古田真司	丹沢哲郎		小学校児童における学校内の危険箇所の認知に 基づく安全学習プログラムの構築
教育環境学	30340002	望月 耕夫 もちつき こうた	山崎保寿	村越 真	石川 恭	村山 功	子安 潤	新任教師の自律的な力量形成の過程に関する研 究
創造系教科学	30340003	加藤 敏弘 かとう としひろ	新保 淳	村越 真	野地恒有			技能獲得における知識・理解と感性の関連につい て ー小学校高学年のバスケットボール学習に着 目してー
創造系教科学	30340004	齋藤 昇 さいとう のぼる	新保 淳	村越 真	野地恒有	北山敦康		「言葉と音楽とのつながり」に着目した、声による表 現学習の研究
創造系教科学	30340005	山田 哲也 やまだ てつや	新保 淳	山崎保寿	岩山 勉	松永泰弘		紙製教材を使用した技術教育の設計学習に関す る研究

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	213D002	名倉 一美 なぐら かずみ	古田真司	石川 恭	村越 真			幼稚園の「人間関係」領域における発達障害児の 支援に関する研究
人文社会系教科学	213D003	今井 隆夫 いまい たかお	稲葉みどり	野地恒有	白畑知彦	中田敏夫		認知言語学を参照した英語学習プログラムの開発

平成26年度入学生博士課程共同教科開発学専攻指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会系教科学	30440001	いしかわ 石川 芳恵	白畑知彦	山崎保寿	村越 真	稲葉みどり (副指導教員)	野地恒有 (副指導教員)	稲葉みどり (副指導教員)	野地恒有 (副指導教員)	英語学習における語彙の指導方法
自然系教科学	30440002	ひだか 日高 翼	丹沢哲郎	小南陽亮	稲毛正彦	新保 淳		新保 淳		高等学校生物における「ヒト」に関わる分野の新たなカリキュラムフレームの開発と評価
創造系教科学	30440003	おおむら 大村 基将	新保 淳	丹沢哲郎	岩山 勉	松永泰弘	紅林秀治	松永泰弘	紅林秀治	プログラミング初学者に対し、プログラミング教育を行う上での初学者が学ぶべきソフトウェア設計要素および開発プロセスの検討・評価
創造系教科学	30440004	おおや 大矢 隆一	新保 淳	白畑知彦	野地恒有	筒井清次郎 (副指導教員)		筒井清次郎 (副指導教員)		グローバル化を視座とした体育教員養成プログラムに関する研究

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	214D001	おおにし 大西 英夫	稲毛正彦	古田真司	古田真司	山崎保寿	飯島康之	飯島康之	村山 功	聴覚障害児の化学概念修得プログラムの開発とその効果に関する研究(仮)
教育環境学	214D002	おさだ 長田 洋一	稲葉みどり	古田真司	古田真司	山崎保寿				読み困難児の国語科漢字学習プログラムの開発とその効果に関する研究(仮)
人文社会系教科学	214D003	たにぐち 谷口 征子	稲葉みどり	西宮秀紀	白畑知彦	中田敏夫		中田敏夫		日本語支援が必要な児童生徒を対象にした読解力を育成するための研究
自然系教科学	214D004	こいけ 小池 嘉志	稲毛正彦	岩山 勉	熊倉啓之	飯島康之		飯島康之		算数科における創造性を育てる指導法の研究

平成27年度入学生博士課程共同教科開発学専攻指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会系教科学	30540001	おおたき 綾乃 あやの	白畑知彦	新保 淳	野地恒有	村越 真 (副指導教員)	中田敏夫	中田敏夫	第二言語習得理論に基づく各文法項目に適した 英文法指導法の体系化
教育環境学	30540002	さかい 郷平 きょうへい	山崎保寿	村越 真	石川 恭	村山 功	益川弘如	益川弘如	行動変容を旨とした情報モラル教育の実践的研 究
自然系教科学	30540003	さとう はじめ はじめ	熊倉啓之	岩山 勉	丹沢 哲郎	飯島康之			経済を中心とする社会現象を組み込んだ高等学 校数学科カリキュラムの創造
自然系教科学	30540004	すぎやま 元洋 もとひろ	丹沢 哲郎	村越 真	中野真志	益川弘如			科学的概念の理解における学習者の問いの意義
人文社会系教科学	30540005	たむら 知子 ともこ	白畑知彦	黒川みどり	野地恒有	新保 淳 (副指導教員)	中田敏夫	中田敏夫	日本人学習者のための英語の語彙指導の研究
教育環境学	30540006	ふたみ 隆亮 たかあき	村越 真	新保 淳	筒井清次郎				生き方教育としての走教育の研究

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会系教科学	215D001	いとう 伊藤 いとう	稲葉みどり	西宮秀紀	村越 真	古田真司	中田敏夫	中田敏夫	高等学校における特別支援教育の推進を阻む要 因についての研究－教師の意識に視点を置いて
人文社会系教科学	215D002	おはら 小原 あきこ	稲葉みどり	伊藤貴啓	山崎保寿	子安 潤	中田敏夫	中田敏夫	日本語教師養成プログラムにおけるティーチング ポートフォリオの有効性の検証
創造系教科学	215D003	うちだ 内田 ともこ	筒井清次郎	野地恒有	新保 淳				幼児期における体力・運動能力向上につながる運 動指導に関する研究
人文社会系教科学	215D004	よこい 横井 かずゆき	稲葉みどり	野地恒有	白畑知彦	子安 潤	石川 恭	石川 恭	幼児期の英語教育の指導法についての研究－国 際理解教育、非英語国での実践から得られた知 見をふまえて－



平成28年度入学生博士課程共同教科開発学専攻指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会系教科学	30640001	うるしばた ゆか 漆畑 祐佳	白畑知彦	村越 真	石川 恭	益川弘如		高校の英語授業におけるクリエイティブ・ライティングの導入について
人文社会系教科学	30640002	おおにし ひろし 大西 洋	黒川みどり	白畑知彦	西宮秀紀	野地恒有	伊藤貴啓	旧徳川幕府から明治政府への条約改正に関する継承性—社会科教材に開発における単元の核の社会的象設定についての考察—
創造系教科学	30640003	むろま さこ 室 雅子	小川裕子	澤渡千枝	筒井清次郎	子安 潤		生活力育成のための家庭科のあり方
人文社会系教科学	30640004	わたなべ あきひこ 渡邊 明彦	黒川みどり	山崎保寿	野地恒有	白畑知彦	西宮秀紀	日本近現代史における歴史教育の成立と教員養成に関する研究
教育環境学	30640005	わたなべ ちか 渡邊 千佳	村越 真	山崎保寿	倉本哲男	村山 功		「楽しい授業, わかる授業」の実現を目指す校内研修フアンリテーターの育成

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会系教科学	216D001	なかがわ ゆうや 中川 右也	稲葉みどり	西宮秀紀	村越 真			句動詞修得における認知言語学的アプローチ
人文社会系教科学	216D002	わたなべ よしろう 渡辺 芳朗	稲葉みどり	伊藤貴啓	山崎保寿			新たな英語教育の実現のための教師養成支援システムの構築
創造系教科学	216D003	くめ たいすけ 久米 泰輔	古田真司	石川 恭	村越 真			父親の子育てと家庭関与が児童の心理, 学習行動そして学校適応度に及ぼす影響
創造系教科学	216D004	もり えい 森 慶恵	古田真司	筒井清次郎	小川裕子			学校における健康情報リテラシー育成の理論と方法に関する研究

### Ⅲ. 教科開発学研究会

愛知教育大学大学院・静岡大学大学院 共同教科開発学専攻  
第7回教科開発学研究会

日時：平成29年3月5日（日）

場所：静岡大学静岡キャンパス教育学部G棟

●開会式 9:45

挨拶 共同教科開発学専攻連絡協議会副議長 村越 真

●研究発表（10:00～12:00） ※1名30分程度

[司会者]

第1室 静大（小川）（紅林） 第2室 静大（熊倉）（小南） 第3室 静大（白畑）（黒川）

第1室（敬称略）

1. 小長谷 恭平, 紅林 秀治（静岡大）

タブレット端末を活かした教育用モーションキャプチャシステムの開発

2. 山下 友矢, 紅林 秀治（静岡大）

乗車可能な車輪型倒立振子の製作と教育への利用

3. 長井 将之, 紅林 秀治（静岡大）

協働学習を想定した計測制御基板の開発と運用

4. 増田 麻人（町田市立金井中学校）, 紅林 秀治（静岡大）

蒸気タービンの製作から原子力発電について考える授業



第2室 (敬称略)

1. 筒井 清次郎 (愛教大), 石川 駿 (岡崎市立六ツ美中部小学校)

リスク感受性は複数の運動課題遂行に共通するのか

2. 松永 泰弘, 古田 このみ (静岡大)

4足受動歩行模型教材を用いた授業提案と上肢下肢をもつ歩行模型の開発

3. 田中 滉至, 山田 浩平, 古田 真司 (愛教大)

効果的な保健学習の授業方法に関する研究 ―学習者の授業意識から―

4. 山崎 保寿 (静岡大)

教職キャリア形成における教職大学院の役割に関する研究



第3室 (敬称略)

1. 長田 洋一, 稲葉 みどり (愛教大)

ASD児の自発性および疎通性の改善を目指した心理劇

2. 中川 右也 (愛教大)

理論と実践の融合をめざして ―時を表す前置詞について―

3. 稲葉 みどり (愛教大)

海外短期研修による学士力醸成の可能性 ―探求型・発信型・交流型の研修を通じて―



●講演 13:00~14:30 教育学部G棟204教室

京都大学教育学研究科 石井 英真 准教授

今求められる学力とその指導・評価



●平成28年度修了予定者及び修了者による発表 15:00~17:00 1名30分



●閉会式 17:00 教育学部G棟204教室

挨拶 共同教科開発学専攻連絡協議会議長 岩山 勉

## IV. 学生の研究活動

# 大島 光代

(学籍：愛知教育大学)

## 1. 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

読み困難の障がい幼児の「ことばの学習プログラム」の開発と応用

### (2) 研究の経過

今年度は、一昨年度開発した障がい幼児に対する「読み」を促進するための言語指導プログラムを用いて、その有効性やニーズを把握するために以下のような研究と実践を行った。昨年度、定型発達の年長児（5歳児）及び発達に障がいをかかえる年長児（5歳児）の音韻意識の獲得・語彙の獲得状況を把握するため、G県A市の教育委員会幼児教育課の協力を得て、A市の子ども園3園において調査を実施した。さらに、実際に「ことばの学習プログラム」を用いて障がい幼児3名の音韻意識の獲得及び語彙の獲得を目指した。また、昨年度の定型発達の年長児の調査から、獲得語彙数や音韻意識の獲得が充分ではなく、小学校の就学に向けて意識的にことばの力を伸ばすかわりや取組が期待される幼児には、そのデータを示しながら園長及び担任に実態を伝えた。今年度は、そのうち1園の年長児が、小学校就学後どのように「読解力」を身につけたかを追跡調査した。この調査においても、同様にG県A市の教育委員会幼児教育課の協力を得た上で、小学校長の承諾を得た。

- ① G県A市の子ども発達センターにおける発達障害児幼児（自閉症スペクトラム）2名および脳性麻痺の幼児1名に対する「読み」を促進するための言語指導プログラムの活用と検証。  
(平成28年1月～9月)
- ② G県A市の全子ども園の保護者向け「生活アンケート」（言語力との関連性）の実施と分析。  
(平成28年3月～5月)
- ③ G県A市の子ども園のうち1園の小学校就学後の「読解力」を追跡調査。  
(11月) ※現在分析中
- ④ A県B市の小学校及び校区内の幼稚園・保育園における教諭及び保育士の「音韻意識等に関する意識調査」実施中。

### (3) 今後の展開

今後は、実際に言語指導プログラムを活用して幼児の言語指導を行った実践データを分析し、その有効性を検証する。また小学校に就学した後の読解力についての追跡調査結果を分析するとともに、音韻意識に注目した「ことばの学習プログラム」開発にあたって、「音韻意識」の概念が、幼児教育施設及び小学校の教諭や保育士に周知されているのか現状を把握することによって、「読み」の力を根底から支えることばの力が「幼小接続期」において十分に指導・支援されているかについて考察する。

## 2. 本年度の研究活動

- 1) 日本保育学会にて口頭発表：大島光代他「おもちゃメソッドプログラム（1）－ 生活言語から学習言語へ －」
- 2) 日本LD学会にて自主シンポジウム企画・口頭発表：大島光代「聴覚障害児教育のスキルを活かした発達障害児への指導・支援（4）～ 聴覚障害児教育の指導者からみた発達障害児への指導 ～」
- 3) 日本LD学会にて口頭発表：大島光代「保育現場で活用する聴覚障害児教育の指導スキル～ 音韻意識及び語彙の獲得状況をふまえた言葉の力を伸ばす実践 ～」
- 4) 日本特殊教育学会にて口頭発表：大島光代「音韻意識の獲得・語彙拡充及び文字認識を目差す取組－障がいを有する幼児（脳性麻痺児）への実践から－」
- 5) 日本子ども学会にてポスター発表：大島光代他「インクルーシブ保育を目指した『紙芝居』製作と読み聞かせの実践」
- 6) 大島光代他（2017）「自然環境における幼児との触れ合い活動によるアクティブ・ラーニングの試み― 保育園・大学・おもちゃプロジェクト・地域の協働実践からの学び ―」名古屋学芸大学紀要（印刷中）
- 7) 大島光代（2017）「健常幼児と障害幼児の語彙及び音韻意識獲得の特徴」（印刷中）

# 原 郁 水

(学籍：愛知教育大学)

## 1. 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

小学生のレジリエンスを高めることを目的とした保健教育プログラムの開発

### (2) 研究の経過

近年、不登校等の心の健康に関する課題を抱える子どもの増加を背景に、困難に直面した際に、適応に導く特性や能力であると考えられる「レジリエンス」が心理学や医療などの領域において注目を集めている。「回復力」等と訳されるレジリエンスは、「生きる力」と類似したものであるという指摘もあり教育の領域においても研究が行われ始めている。小学校で養護教諭として勤務していた経験から、困難を回避するのではなく困難に直面しても適応する、あるいは落ち込んでも立ち直ることが、情報化や少子高齢化などで先の見えにくくなった社会を生きていく児童にとって重要であると考えからレジリエンスに着目した。博士論文では小学校体育科保健分野、単元「心の健康」に着目し、先行研究の整理を行い、基礎研究を基にレジリエンスに関する保健学習プログラムの開発及び効果検証を行うことを大きな目的として研究を進めた。

2016年度は最終年度として、これまで行ってきた研究をまとめ博士論文を執筆した。

## 2. 本年度の研究活動

### <著書>

原郁水 (2016) レジリエンス (回復力) と保健学習、愛知教育大学教科学研究会編、教科学を創る第2集 愛知教育大学出版会、pp101-115.

### <論文>

原郁水・古田真司 (2016) 自己理解を促す保健指導が児童のレジリエンスに与える影響の検討 愛知教育大学研究報告. 教育科学編 65, 53-39.

原郁水・都築繁幸 (2017) 帰属スタイルが小学5年生のレジリエンスに及ぼす影響 障害者教育・福祉学研究 13, 印刷中.

原郁水・都築繁幸 (2017) 小学5年生のレジリエンスを育成する授業の有効性に関する研究 日本教育保健学会年報 24, 印刷中.

### <学会発表>

原郁水・森慶恵・古田真司 (2016) 小学校における学芸会が小学生のレジリエンスに与える影響 日本学校保健学会第63回学術大会講演集 179.

森慶恵・原郁水・古田真司 (2016) 保健教育における批判的思考に関する一考察 日本学校保健学会第63回学術大会講演集 206.



# 山田丈美

(学籍：愛知教育大学)

## 1. 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

思考力・表現力の育成をめざす国語科における教科等横断的指導の研究

### (2) 研究の経過

昨年度から国語科と図画工作科の合科的指導の授業モデルの作成とその実践に取り組んできた。今年度は、2回の授業実践を行い、昨年度の実践と併せて論文作成を行った。授業実践のねらいは以下の通りである。

- ①図画工作科の側面から、絵画を鑑賞し考えたことを身体表現（動作化）することができる。
- ②国語科の側面から、物語の挿絵を鑑賞し考えたことを言語表現（言語化）することができる。
- ③図画工作科と国語科との合科的指導として、絵画や物語の挿絵について鑑賞・思考したことを身体表現・言語表現することができる。

今年度1回目の実践（2016.7.13）では、K小学校4年1組において、国語科教材「モチモチの木」と図画工作科教材「からだでかんしょう」の合科的指導を行った。2回目の実践（2016.11.4）では、K小学校4年2組・3組において、国語科教材「ごんぎつね」と図画工作科教材「からだでかんしょう」との合科的指導を行った。今年度からは、パワーポイントを取り入れた授業づくりをしている。また、それぞれの実践について、効果検証のための評価テストを行い、分析にあたっては、量的分析と質的分析を組み合わせるように心がけた。昨年度実践した「ごんぎつね」の挿絵5社比較を柱とした国語科と図画工作科の合科的指導についても論文としてまとめた。

### (3) 今後の研究計画

次期学習指導要領案が文部科学省から出され、改訂の方向が見えてきた。その中で「教科等横断的な視点」の文言が使われている。このことと合科的指導との関係性を明らかにしていきたい。また、これまで合科的指導として行ってきた実践に、「教科等横断的視点」として新たに語彙指導を加え、その指導効果について検討していきたい。

次年度はこれまでの研究成果と、新たな次年度の研究成果を併せ、博士論文本体の執筆に取りかかりたい。

## 2. 本年度の研究活動（学会発表、投稿状況等）

- 1) 2016/7/13 国語科教材「モチモチの木」と図画工作科教材「からだでかんしょう」の合科的指導実践（新聞掲載）
- 2) 2016/11/4 国語科教材「ごんぎつね」と図画工作科教材「からだでかんしょう」との合科的指導実践
- 3) 2016/11/20 第17回人間福祉学会（於 岐阜大学）口頭発表  
「小学校における国語科と図画工作科の合科的指導」
- 4) 2017/2/10 読書学会『読書科学』投稿  
「思考力と表現力の向上を目指した教科横断的な指導の試み—教科書の挿絵を活用して—」  
※「修正再審査」のため現在修正中

# 今井隆夫

(学籍：愛知教育大学)

## 1. 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

The Effects of Teaching Linguistic Motivation through Image English Grammar

(感覚英文法による言語表現の意味づけ指導の効果)

### (2) 研究の経過

2016年度は、2016年3月に博士論文を予備審査に提出、5月に本審査に提出、7月18日に最終試験を受け、9月30日に学位[博士(教育学)]を取得することができた。今年度の研究活動は、博士論文の提出と最終試験などで7月18日までは費やし、9月には日本認知言語学会にて博士論文の第3章に相当する部分をポスター発表し、2の論文(3)を執筆した。これにて博士論文の、第3章、第5章、第6章は『日本認知言語学会論文集』に、第4章はARELE (*Annual Review of English Language Education in Japan*)に掲載されたことになる。また、学位取得後の2016年度後期には3つの講演会の依頼をいただき、博士論文に関連した研究について講演を行う機会を得た。3つの講演会は、愛知教育大学教育学部英語専攻・選修(2の(4))、愛知大学国際コミュニケーション学部(2の(5))、中部地区英語教育学会三重支部(2の(6))である。

### (3) 今後の展開

今後は、博士論文の第5章及び第6章で扱った「学習者のアナロジー力の活用」に関する研究を発展させていきたいと考えている。具体的には、日本語と英語の比喻表現の違いについて調査し、教室での授業実践及び実験研究を行う。また、英語教育は、教授内容、教員、学習者、環境など多くの要因が関わる複雑系科学であると考えられるので、複雑系(Complex System)についても勉強し、教科開発学の枠組みで研究を発展させていきたいと思います。

## 2. 本年度の研究活動

- (1) Imai, T. (2016) *The Effects of Teaching Linguistic Motivation through Image English Grammar*, 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院共同教科開発学専攻博士論文, 愛知教育大学, 査読有, 161頁
- (2) 今井隆夫 (2016) 「感覚英文法による言語表現の意味づけアプローチ—表面的な学びから深い学びへ—」『英語教育』Vol. 65 No.9, 大修館書店, 執筆依頼原稿, pp.20-22
- (3) 今井隆夫 (2016) 「英語感覚習得の実態と認知言語学を参照した指導法」第17回日本認知言語学会全国大会(於 明治大学中野キャンパス), ポスター発表, <審査あり>
- (4) 今井隆夫 (2017) 「英語感覚習得の実態と認知言語学を参照した指導法」『日本認知言語学会論文集』第17巻, (採択決定・2017.6発行予定)【査読論文】
- (5) 今井隆夫 (2016) 「感覚英文法による言語表現の意味づけ：認知言語学を参照した英語学習アプローチ」愛知教育大学英語専攻学術講演会講演(2016.11.4.)
- (6) 今井隆夫 (2016) 「認知言語学と英語教育・言語コミュニケーション論」愛知大学国際コミュニケーション学部(言語学概論)特別講演(2016.12.12)
- (7) 今井隆夫 (2017) 「認知言語学と英語教育：有機的な英語感覚学習について考える」中部地区英語教育学会(CELES)三重支部講演(2017.02.25)
- (8) 大森裕實・北尾泰幸・今井隆夫 (2016) 「言語研究の複眼的視点から考察する関係節の効果的学習法(Effective Approaches to “Relative Clause” from Multiple Viewpoints of Language Studies)」大学英語教育学会(JACET)第55回国際大会シンポジウム(2016.09.02)

# 大西 英夫

(学籍：愛知教育大学)

## 1 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

聴覚障害児の内包量概念形成過程に関する研究

### (2) 研究の経過

内包量概念は自然科学領域における算数・数学と理科の結節点に位置する重要な概念である。この内包量は、算数・数学教育では小学校5年生の後半に「単位量あたり」、6年生後半に「速さ(単位量あたり)」として扱われるが、子どもにとってその理解は難しく、つまづきを多く生み出す単元の一つである。本研究は、聴覚障害児の算数・数学・理科の指導法を改善していくための基礎研究として、内包量概念形成過程に焦点をあてるものである。本年度の研究の進行状況は以下のとおりである。

#### 1) 聴覚障害児の比例概念の発達の領域性に関する研究

健聴児の比例概念の発達の領域性に関する従来の研究では、調整課題においては領域一般性が、比較課題においては領域固有性が示されるとされてきた(藤村1993)。一方、聴覚障害生徒(聾学校高等部)では、速度領域の比例概念の発達が濃度領域の比例概念の発達に先行することはないとする報告のみであり(脇中1999、2003)、領域性については検討されていない。2015年9月～2016年5月にかけて通常の学校に在籍し、聾学校教員による巡回通級指導を受けている、口話を主体とする聴覚障害(難聴)児童・生徒、20名を対象に、速度と濃度に関する内包量調整課題と内包量比較課題及び論理操作課題を同時に実施した。その結果、1)調整課題では、速度領域と濃度領域のいずれも小学4年生と6年生との間で、比較課題では、速度領域で小学5年生と6年生の間で、濃度領域で小学4年生と6年生の間で有意差が認められた、2)論理操作課題の成績からみると、速度領域の調整課題の一部の条件で論理操作未完成群と論理操作完成群との間で有意差が認められたが、濃度領域の調整課題と比較課題では有意差は認められなかった、3)学年別、論理操作課題成績別、聴力損失度損失度別でみたところ、全てにおいて調整課題と比較課題における速度領域と濃度領域との間に有意差は認められず、比例概念の発達の領域一般性が認められた。これらのことから、聴障児にあつては、1)小学4年生と6年生との間に比例概念の発達の節目(加藤1987)があることが考えられる、2)比例概念の発達においては、4・5年生では生活経験上で積み上げてきた比例の考え方を、6年生以上では5年生時に学習した「単位量あたり」の考え方を、速度と濃度の両領域に適用したことによって領域一般性が示されるのではないかと、3)比例概念指導では、上位の大きな枠組みにおいて領域一般的に比例概念を形成・発達させたあとに、比例関係とか内包量、速度や濃度といった下位の個別な枠組みにおいて領域固有的に比例概念を形成・発達させることが重要ではないかと、等が考察された。

#### 2) 聴覚障害児の算数文章題の解法過程における困難さに関する検討(レビュー研究)

従来の聴覚障害児の算数文章題の実態に関する研究において、学習の到達度が低い、学年が上がるとともに到達度は低下する、読書力が遅滞している、問題文がしっかり読めない、計算問題はよくできるが文章題になると困難を示す、などの実態が示されてきてはいるが、解法過程における困難さの要因等については、必ずしも納得ができる説明がなく、その要因の解明については、今後の検討を待つところであった。健聴児を対象とした算数文章題(割合と内包量領域)の解法過程における困難点を検討した結果、聴覚障害児の解法過程で見られる困難点の特徴を明らかにしていくには、1)算数文章題の解法過程を複数の過程や段階で捉えていく、2)算数文章題の読み取りにおいて、何が基にする量(全体)で、何が比べる量(部分)なのかを読み取っていく、3)算数文章題の解法過程における「メンタルモデルの形成・構成」と「メタ認知」の視点が重要である、等が指摘された。

#### 3) 聴覚障害児の論理的思考に関する研究

2016年9月～11月にかけて、聴覚障害児の論理的思考について、聴覚障害の小学校4年生から中学校3年生までの20名(口話を主体とするコミュニケーション方法で生活し、公立の小学校に通って聾学校教員による巡回通級指導を受けている聴覚障害の児童・生徒を対象に、命題の真偽、推論の妥当・非妥当を素材として、クラスの論理と命題の論理について調査した。

#### 4) 聴覚障害児の乗除法作問と文章題解決の関連について

2017年1月～3月にかけて、聴覚障害児の論理的思考について、聴覚障害の小学校4年生から中学校3年生までの20名(口話を主体とするコミュニケーション方法で生活し、公立の小学校に通って聾学校教員による巡回通級指導を受けている聴覚障害の児童・生徒を対象に、乗除法作問、乗除法文章題立式、マトリックス課題と文章完成課題を素材として、乗除法作問と文章題解決の関連について調査した。

### (3) 今後の計画

(2)の3)と4)について原著論文としてまとめ投稿発表する。

## 2 本年度の研究活動

(論文)

大西英夫他 2016 聴覚障害児の内包量概念の形成過程に関する縦断的研究 ろう教育科学, 58(3), 115-132. (査読あり)

大西英夫他 2017 聴覚障害児の算数文章題の解法過程における困難さに関する検討 -割合と内包量領域に焦点をあてて- 障害児教育・福祉学研究, 第13巻, 85-91.

大西英夫他 2017 聴覚障害児の比例概念の発達の領域性に関する一考察 (投稿準備中)

# 長 田 洋 一

(学籍：愛知教育大学)

## 1. 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

ASD児の対人関係の向上を目指した心理劇的アプローチに関する研究

### (2) 研究の経過

昨年度より小学校の通級指導教室で自立活動の時間にASD（自閉症スペクトラム）児に対し、対人関係の向上を目指して「童話を用いた心理劇」を実施している。今年度は、5年生A児（女子）と4年生B児（男子）のペアに対し、1学期に4回、2学期に11回の心理劇を試みた。以下、その概要を述べる。

#### 1) 1学期の実践（目的：対象児童が抱える対人関係上の問題点を特定する）

5月に対象児童の学級担任に対人関係に関する評価をしてもらったところ、両児童とも「人間関係の形成」と「コミュニケーション」の評価が低かったが、その原因を特定することはできなかった。6月から心理劇を開始し、「浦島太郎」（6/20と6/30）、「桃太郎」（7/4と7/14）の2話4回を実施した結果、A児は「疎通性」と「自発性」に、B児は「疎通性」に困難が見られた。同時に、学級担任から通常学級での生活に関する情報を提供してもらい、心理劇場面で見られた問題点と照合し、総合的に判断したところ、A児は自発性や積極性に欠けること、B児は言語を用いた意思の疎通に困難があることが問題点として特定された。以上のことより、対象児童に対するアセスメントは、心理劇による行動分析と学級担任からの評価や情報提供を合わせることにより、正確なアセスメントができることが明らかになった。

#### 2) 2学期の実践（目的：対象児童の問題点を改善する）

2学期に実施した劇の題目は、戦いの場面があり、力強さや積極性を主題にした童話を授業者が選定した。「一寸法師」（9/15と9/26）、「猿蟹合戦」（10/3と10/13）、「3匹の子豚」（10/20と10/27）、「力太郎」（11/2と11/10）、「金太郎」（11/16と11/28）、「三枚のお札」（12/5）の6話11回の劇を実施した。その結果、A児は授業場で役へのこだわりが薄くなると同時に自発性が増加し、同じ頃に通常学級では特定の級友と人間関係を深めたり、外国語活動で大勢とコミュニケーションを取ったりした。B児は主役を積極的に立候補するなど何度も主役を重ねたことにより自己肯定感や自信が形成され、通常学級では自発的な要求言語、話し合いの時の意見表示、何人かの級友との深い交流等が見られた。以上のことより、童話を用いた心理劇は、ASD児の内面的な成長を促し、問題点の改善に役立つ可能性があることが示唆された。

## 2. 本年度の研究活動（学会発表、投稿論文）

### 1) 2016/11/20 第25回日本LD学会東京大会（於 パシフィコ横浜）口頭発表

「小学3年生ASD児の対人関係の向上を目指した童話を用いた心理劇」

### 2) 2017/3/5 第7回愛知教育大学・静岡大学 教科開発学研究会（於 静岡大学）口頭発表

「ASD児の自発性および疎通性の改善を目指した心理劇」発表論文集，pp.45-52.

### 3) 2017/3 長田洋一・稲葉みどり「心理劇のアセスメント機能を応用したASD児の問題点の特定」『愛知教育大学大学院・静岡大学大学院 教科開発学論集』第5号，pp.65-78.（査読付）（印刷中）

### 4) 2017/3 都築繁幸・長田洋一「心理劇の学校教育場面の適用に関する実践的課題」

『愛知教育大学 障害児教育講座 障害児教育・福祉学研究』第13巻，pp.117-126.（印刷中）

# 小池 嘉志

(学籍：愛知教育大学)

## 1. 本年度の研究活動の概要

本年度はこれまでの研究のまとめとして、博士論文の執筆に取り組んだ。算数・数学教育における問題解決型授業では、全ての子どもが自力で問題の解決に至るということは難しく、通常は、解決できた子どもの解法を代表例として取り上げ、その解説を通して全体での理解へと導いていく。ところがその活動の際に、自力での解決に至らなかった子どもたちの十分な理解が保障されないという問題点が指摘されている。そこで本研究では、解法の理解を精緻化の視点から捉え直し、クラス全体が解法を有意味に理解するためには精緻化が重要であることから、それを促す支援として「発見的追跡法」を提案した。そして、授業実践を通じて考察した結果、「発見的追跡法」は解法の精緻化を促し、自力での解決に至らなかった子どもたちの解法の理解と定着に有効にはたらく支援となり得ることがわかった。

## 2. 算数・数学の問題解決型授業における解法理解と精緻化に関する研究

### ①精緻化を促す支援としての「発見的追跡法」

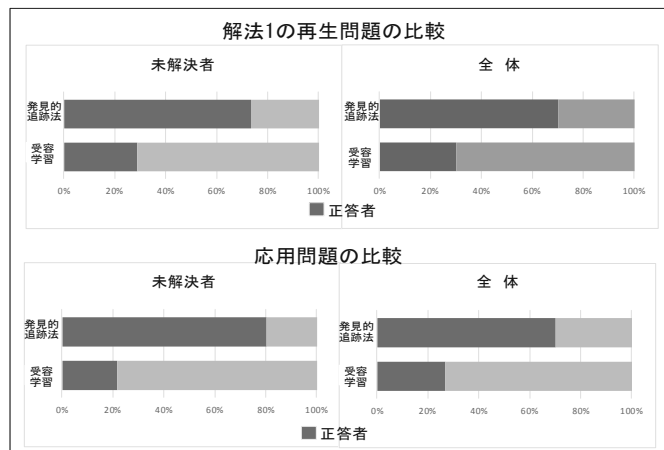
問題解決型授業の解法理解場面における説明の多くは、提示された式や図の意味、考えの筋道などが子どもたちや教師の言葉で述べられる。これらの言葉は解法の理解に必要な情報である。子どもたちが解法を理解する過程では、はじめはわからなかった式や図の意味を、提供された情報と関連づけることによって、自分なりに納得できる知識として解釈することが必要となる。この情報処理過程は精緻化と呼ばれている（北尾, 1984, pp. 77-81）。そして、この精緻化ができてこそ、子どもたちは解法の深い理解に達することができる。そこで解法理解場面での子どもたち一人一人の十分な納得や理解を得るために、解法の精緻化を促す支援として、解法の部分提示とメタ認知的問いかけ、そして概要の完成などからなる教授-学習過程を「発見的追跡法」として提案した。

### ②発見的追跡法の有効性の検証

発見的追跡法の有効性を実証するために、実験群としての発見的追跡法が、未解決者の解法の精緻化を促し、理解を深めることにより、学習内容の定着と応用にどの程度効果的にはたらくかを、統制群としての受容学習とで比較し考察した。

昨年度までの実践では、授業後の理解度については2授業の間に有意な差が見られないことが分かっている。そこで授業実践の2週間後に、定着度を見る解法1の再生問題、転移を見る応用問題で事後テストを行い比較した。その結果、2授業の間には明らかな差異が見られ、発見的追跡法の有意性が認められた。

したがって発見的追跡法は受容学習と比較して、質の高い精緻化がなされ、記憶の保持また転移の可能性にも高い効果が認められることが検証できた。今後はこの成果を確実なものとするために、さらなる実践の積み上げが期待される。



# 伊藤 佐奈美

(学籍：愛知教育大学)

## 1 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

軽度知的障害生徒の職業自立に有効な教科開発的取組

### (2) 研究の目的

特別支援学校においては、高等部の在籍生徒数が増加しており、特に軽度知的障害生徒の増加が著しい。それに伴い、生徒指導上の問題や不登校など学校適応に関わる問題も増加してきている。そうした生徒の中には、特別支援学校への入学に際し、自らの意思で就学先の学校を決定していなかったり、特別支援学校についてよく知らないまま受検してきたりする者もいる。本研究では、このような状況を問題と捉え、軽度知的障害生徒の学校生活への適応に焦点を当て、生徒が自分の将来の展望を描き、自らの目標をもって学校生活を送るための有効な支援や指導の在り方について検討し、職業自立に向けて主体的に取り組むための教科「職業」における有効な指導内容・方法について開発することを目的とする。

### (3) 研究の経過

特別支援学校高等部に在籍する軽度知的障害生徒の事例を提示する中で、学校適応の問題を明示し、不適応事例に対する考察を行った。知的障害生徒の多くが自己の障害を具体的な自分の苦手さ（話すことが苦手、計算することが苦手、人間関係の取りにくさ等）として捉えることが多いことから、軽度知的障害生徒に障害受容を促すには、障害そのものの理解でなく生徒自身が自分の性格や特性、自分のできること、できないことなど自分の能力や適性を含めた自分に関するものの理解を深めることが重要と考えた。

また、軽度知的障害生徒 78 名を対象とし学校適応に関する意識調査を実施したところ、特別支援学校で「役に立った授業は何か」の質問に対し、「職業」との回答が非常に多かった。就職や進路に直接結びつく教科「職業」は、職業・進路に関する目標を多く掲げる生徒たちのニーズに応える学習内容を提供する授業といえる。知的障害児が失敗体験から回復する際に、「振る舞い方をおぼえる」（阿部・廣瀬，2008）という言い方をしているが、正に「職業」は、理論だけではなく、場に即して体験しながら「やり方をおぼえる」学習である。こうした授業を通して、生徒たちは実際に知識や技術が身についたと感ずることができたのであろう。そして、多くの生徒が、授業における経験を通してできるようになることで、自分自身の成長を感じ、自己肯定感や自己理解につなげていけたのではないかと考えられる。

そこで、2校の特別支援学校高等部1年生に在籍する軽度知的障害生徒計62名に対し、教科「職業」における自己理解を促すことを目的とした授業実践を行い、軽度知的障害生徒が、自分のやれること、やれないことを率直に評価することができるような教材開発を行った。また、生徒の自己理解の指標として、自己評価と他者評価（教師による評価）の比較を行い、検討する。

## 2 本年度の研究活動

- ・学校適応に困難を示す特別支援学校高等部生徒への支援実践—知的障害の程度が軽度な2事例を取り上げて、学校教育相談研究 第27号、平成29年6月発行予定（平成29年3月受理）
- ・軽度知的障害生徒の学校生活への適応に関する研究—特別支援学校高等部における質問紙調査をもとに—、教科開発学論集第5号(2017)掲載予定
- ・肢体不自由児における自立活動の指導、『教職教育の新展開2018』 中部現代教育研究会編、pp250-258

# 小原 亜紀子

(学籍：愛知教育大学)

## 1 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

日本語教育実習における省察の効果の研究

### (2) 研究の経過

日本語教師資格取得のための講義を受講している学部生（以下「学生」）を対象とし、「自律的に成長を続けられる日本語教師」育成の方法として省察活動を取り入れ、その効果を検証する。

本稿では、学生の実習による学びを成人学習として捉え、変容理論の枠組みの中で分析をする。学習者として無意識に培ってきた言語教育観を変容理論における意味パースペクティブとして捉え、教師の立場の体験を通して現れる変容を調査・分析する。それにより、日本語教師養成プログラムにおける省察活動の効果的な実践方法の開発を目的としている。

本論では、以下の点を明らかにしたい。

1. 言語教育観は実習の中で変容するか。
2. 省察方法・対象の違いが、言語学習観の変容に影響をもたらすか。
3. 省察活動に関する省察（Reflecting on Reflection）を省察活動に加えることで、言語学習観の自覚と変容にどのような影響をもたらすか。

これに先行して、大学生を対象とした日本語教育関連講義において、教師トレーニング型に近い方法（授業後、学習者役、観察者役、講師から授業の問題点の指摘を受ける評価活動を実施）で模擬授業・実習を実施し、a. 教室活動の実践は、学生の持つ言語教育観に変容をもたらしたか、b. どういった点に変容が認められたか、c. 先行研究にある教師成長型プログラム参加者の変容との相違点は何か の3点を分析した。分析の対象は、受講した学生24名が実践の前後に記述した言語教育観（「良い語学教師とは」）に関するエッセイである。

分析の結果、24名中23名の言語教育観の記述に変化が認められた。変化した観点の中で、特に変化が大きかったのは、「授業実践力」と「学習者の理解度への配慮」についての記述であった。授業実践力については、実践前にも観点として挙げられていたが、その内容記述がより具体的になったことと、実践前にはなかった「臨機応変に対応できること」という表現が現れた。一方、学習者の理解度への配慮は、実践前のエッセイにはなかった観点である。実践前は教師としての立場から言語教育をとらえていたのが、実践後には、学習者側からの視点が得られている。学習者の心情や視線の重視し、学習者を、教室活動を能動的に担う構成者として意識するようになっていくことが伺える。

### (3) 今後の展開

今後は、省察の方法と対象を変えた結果が、省察の深まりと変容過程に与える影響を分析する予定である。

## 2 これまでの研究活動

小原亜紀子・稲葉みどり（2016）「教師トレーニング型日本語教育実習における実習生の言語教育観の変容－SCATによる記録分析から読み取れるもの－」『教科開発学論集』第4号

# 内田 智子

(学籍：愛知教育大学)

## 1 博士論文の計画

### (1)論文のテーマ

幼児期における運動能力向上につながる運動遊びに関する研究

### (2)研究の経過

幼児期の子どもを対象とした課外運動クラブにおける運動能力向上を意図とした運動遊びプログラムの開発を目的とする。

習い事をしている幼児については半数以上おり、年齢が高くなるにつれて増加している(厚生労働省,2007)。これらのことは、少子化によって身近に遊び仲間がいないこと、子どもが自由に遊べる空間(場所)がないこと、自由に遊ぶ時間がないことによって、子どもの運動遊びが成り立たなくさせている。保護者の保育園や幼稚園に対する要望について2005年と2010年を比較すると「知的教育」や「保育終了後におけいこ事をやってほしい」、「集団生活のルールを教えてほしい」の要望が増加している(ベネッセ次世代育成研究所,2010)。近年では幼稚園・保育園での保育時間外に有料で習い事を行うケースが増加し、幼稚園・保育園で習っている比率が幼稚園・保育園以外で習っている比率を上回った習い事として「体操」「サッカー」が報告されている(ベネッセ,2010)。世界的にみてスポーツ参加年齢は早期化傾向にあり、心身の発達を総合的に考慮すると、小学校になるまではスポーツに参加させない方が良いと考えられている(スモール・スミス 2008)。従来報告においても特定の運動の上達を目指した技術指導が子どもの育ちを阻害することが指摘されている(近藤,1994)。一流選手の多くは、幼児期・児童期には専門化されたスポーツとしてではなく、遊びとして多くの運動を経験していることも明らかにされている(中本,2011)。

そこで、本研究では幼稚園で実施されている課外運動クラブにおいて、幼児向けの運動遊びを中心とした運動プログラムが幼児への運動能力に与える影響を明らかにすることによって、画一的運動指導と何もしない自由遊び群を比較することによる運動指導の有効性の検討することを目的とした。

## 2 本年度の研究活動

(1)研究1および研究2において、運動プログラム前後の運動能力テストの結果について執筆中である。

(2)研究3については学会誌投稿済みであり、査読結果待ちである。

	比較対象	内容	指導方法	課題の指示
研究1	画一的指導と自由遊び群との比較	幼児向けの運動遊びを中心とした運動指導1(画一的指導型)	指導者が運動課題を提示した通りに実施させる。	指導者の指示通りに実施させる
研究2	内発的動機づけを意識したサーキット遊びと自由遊び群の比較	幼児向けの運動遊びを中心とした運動指導2(内発的動機づけ型)	内発的動機づけである「自己有能感、自律性、関係性」が確保させて実施させる。動作方法は課題を大きく逸脱しない限り、自由に行わせる。	課題を子どもに選択させる。動作方法は課題を大きく逸脱しない限り、自由に行わせる。
研究3	内発的動機づけを意識したサーキット遊びとラダー遊びと自由遊びの比較	ラダー運動	運動課題(ラダー7種類)を提示する	課題の順番は子どもが選択して実施する。回数(2回)が終われば自由遊びができる
		サーキット運動	運動課題を6種目並べ、順番に課題を周る。動作方法は課題を大きく逸脱しない限り、自由に行わせる。	課題の順番は子どもが選択して実施する。
		自由遊び	自由に遊ばせる	特になし



# 横 井 一 之

(学籍：愛知教育大学)

## 1 博士論文の計画

「手遊びを用いて幼児と英語に親しむ保育者養成の研究」という論題で、以下のように取り組んでいる。

### (1) 論文の主旨

幼児期の英語活動では、ピクチャーカード・フラッシュカード・視覚的教材・ゲームの活用、伝承遊び・手遊び、天気・日付・曜日・挨拶・数・色・乗物・食べ物等(秀他 2013)を扱っている。

本研究では、これらの幼児の英語活動から手遊びを取り上げる。保育者養成校の学生が、英語の手遊び指導を身に付ける方法、つまり英語の手遊び指導法として、どんな指導プログラムを考えるべきかを研究する。また、受講した学生が英語の手遊びを指導できる基準に達しているかの判定法を定め、さらにそのプログラムの有効性について分析する。

## 2 本年度の研究活動 2016年1月～12月

- (1) 2016. 2. 22. みよし市 K 保育園を訪問 (下記 (2) 日本保育学会の発表のための訪問) 年長組の英語活動を参観
- (2) 2016. 5. 7. 土～5. 8. 日 東京学芸大学小金井C第 69 回日本保育学会  
口頭発表 共同発表(秀真一郎含 7 名) 現場保育者による英語活動実践事例—キラキラ星と Twinkle Twinkle Little Star を題材に—
- (3) 2016. 8. 26. 全国保育士養成協議会第 54 回研究大会  
主催校：東北福祉大学 会場：いわて県民情報交流センター「アイーナ」  
ポスター発表 (中島真吾含 7 名) 保育者をめざす学生の幼稚園・保育所における英語教育に対する意識—保育者養成課程に在籍する学生のアンケート調査からの考察—
- (4) 2016. 9. 10. 日本英語英文学会第 26 回大会 東京家政大学板橋C 研究発表  
英語を話す保育者養成について
- (5) 2016. 9. 6. 幼児英語指導の参観について  
岐阜県多治見市 H 幼稚園の特別保育・英語 (外国人講師) を参観 (年少 2 クラス、年中 2 クラス、年長 2 クラス)
- (6) 保育専攻学生へ保育原理、保育者論の授業で日本語と英語の手遊びを指導した。
- (7) 発表論文
  - ① 横井一之(2016)「保育原理における手遊び指導の実践—日本語と英語の手遊びを用いて—」『東海学園大学スポーツ健康科学部教育研究紀要第 2 号』162-167.
  - ② 横井一之・吉見昌弘(2017) オーストラリアと日本の保育観の違いについて—オーストラリアの National Quality Standard を基準として—『名古屋短期大学研究紀要第 54 号』(発行予定)
- (8) 研究ノート
  - ① 横井一之(2017)「幼稚園の遊びを通じた英語活動における総合的な指導についての一考察」『東海学園大学教育学部教育研究紀要第 1 巻』(発行予定)

# 中川 右也

(学籍：愛知教育大学)

## 1 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

認知言語学を援用した句動詞習得方法

### (2) 研究の経過

本研究は、認知言語学の理論を基に、イメージ・スキーマを用いて句動詞を効果的に習得する方法について、教授法と学習法の2つの観点から提案するものである。

本年度行った研究の1つ目として、提案する学習法の有効性を多角的に検証できるよう、従来のような統計手法を用いた量的アプローチによる対照群と処置群の間における有意差の検証だけでなく、どれだけ学習者が活動に関与し認知活動が活性化されたかをテキストマイニングによって明らかにする質的アプローチを模索し、研究デザインの構築を行った。

2つ目として、近年、急速に広まりつつあるアクティブ・ラーニングを取り入れた学校において、学習者中心主義に基づいた、問題解決型学習など、学習者を支援できる句動詞学習法を研究し、ジグソー法 (cf. Aronson, E. et al, 1978) を援用した句動詞学習法の着想を得た。

### (3) 今後の展開

- ①本研究で用いる句動詞を定義付けした上で、静的と動的、抽象的と具体的とに意味分類する。
- ②イメージ・スキーマの提示方法に関して、スーパー・スキーマのみ VS スーパー・スキーマ&ローカル・スキーマ、静止画 VS 動画のそれぞれ4つの組み合わせと句動詞の種類による習得率の違いを検証する。
- ③ジグソー法を援用した方法で学習する処置群と句動詞の意味と例文を記した教材を使って暗記学習する対照群に分け、習得率の違いと、その後における未知語に対する推測力の向上の違いを検証する。さらに、学習に対し、どれだけ関与でき、活動を活性化できたかを探るために自由記述調査を行い、テキストマイニングによって検証する。

## 2 本年度の主な研究活動

- ・「Teacher から Facilitator へ」『平成 27 年度英語教育推進リーダー中央研修会報告』, 第 252 号, 日本私学教育研究所.
- ・「文型・文法事項の知識を整理する」『COLUMBUS 21 通信』, vol.4, 光村図書出版.
- ・「CLIL で、教科横断的に学ぶ」『COLUMBUS 21 通信』, vol.4, 光村図書出版.
- ・「明示的句動詞習得方法とその効果－認知言語学の理論を援用した試み－」全国英語教育学会 第 42 回埼玉研究大会. (口頭発表)
- ・「発展的な語彙学習を促進するための動画を活用した授業」外国語教育メディア学会 第 88 回秋季中部支部研究大会. (パネリスト)
- ・「電子黒板をインタラクティブに使う生徒をアクティブに」外国語教育メディア学会 第 88 回秋季中部支部研究大会. (講師)
- ・「理論と実践の融合をめざして～時を表す前置詞について～」第 7 回教科開発学研究会. (口頭発表)

# 渡辺芳朗

(学籍:愛知教育大学)

## 1 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

デジタル教科書活用の効果に関する研究

### (2) 研究の目的

本研究は、英語力の格差が目立つようになる中学1年生の2学期において、ICT活用による授業実践での学習意欲の向上の可能性を探るものである。デジタル教科書の特徴を明らかにした上で、どのように活用すれば、学習効果が上がるかについて明らかにすることを目的とする。

### (3) 研究の経過

本年度は、若手英語教員の養成とデジタル教科書活用の効果について取り組んだ。

デジタル教科書活用の効果に関する研究においては、デジタル教科書の特徴を明らかにした上で、どのように活用すれば、学習効果が上がるかについて授業実践と事前・事後調査からの究明を試みた。授業および調査の対象者は、公立中学校1年生で、デジタル教科書を使用するA群と使用しないB群とした。その上で、デジタル教科書が有する、Q-AやT or Fによる内容理解、マスキング機能などを取り入れた授業プログラムを作成し、実践した。調査として「テストの観点別評価」、「CAN-DOによる振り返り」「授業に対する意識調査」を行った。「テストの観点別評価」の結果から、デジタル教科書の音声再生機能や表示機能を活用することによって、機能を活用しない授業よりも、「表現」において優位な結果が得られた。「CAN-DOによる振り返り」からは、「聞き取り」「本文の読み」「本文の内容や意味」「基本文や重要文の暗唱」「自分自身について話す」で肯定的な回答の増加が見られた。「授業に対する意識調査」においても、「授業が楽しい」や「英語の授業に活躍できる」の項目回答の増加が認められた。デジタル教科書を活用すれば、生徒の学習意欲を高める英語の授業を期待できることが明らかとなった。しかし、授業における具体的な活用法やデジタル教科書のデメリットについて明らかにすることができなかった。デジタル教科書の問題点を見出し、解決するための方策を考えていきたい。

### (4) 今後の展開

本年度の研究成果を基に、言語学、社会心理学・教育学・心理統計学の知見から本年度の研究を見直すとともに、調査や使用語句を学術的に定義づける。また、「観点別得点結果」、「CAN-DOによる振り返り」、「授業に関する意識調査」の項目の相関を探る。その上で、発信できる表現力と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるための教育方法の提示を図りたい。

## 2 本年度の研究活動

### 〈口頭発表〉

「個別対応による教師養成支援システムに関する研究」, 第46回中部地区英語教育学会(於 鈴鹿医療科学大学 三重県白子キャンパス)2016年6月

「デジタル教科書活用による授業改善の試み」, 外国語教育メディア中部支部第88回秋季研究大会(於 鈴鹿高校)2016年12月 <査読あり>

# 久米泰輔

(学籍：愛知教育大学)

## 1 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

父親の育児の子供に対する心理的影響、学習動機付けへの影響の欧米との比較

### (2) 研究の執筆計画

1 欧米での父親の育児を測定する尺度の先行研究の比較

2 最も新しく凡庸性が高い尺度『Father Involvement Scale』『Nurturant Fathering Scale』の日本語版作成

2-1 翻訳版の信頼性、妥当性の調査研究

3 その日本語版尺度を使った、父親の育児と学習動機付けとの相関関係を調べる調査研究

4 3の結果から父親の育児参画と学習動機付けの理論の構築

## 2 研究の経過

今年度は博士課程1年目ということで、まず、父親の育児ともう一つの柱となる教育環境において、教育学という学問が何を行っているか、人文系の社会学、哲学、もしくは自然科学である発達心理学など何をベースにしているか、教育学がアカデミーの中でどのような位置づけにある学問か把握することから始まった。また、研究手法がどのような基準で行われているか、講義、研究生の研究調査を見ることにより、知見を深めていった。その上で、父親の育児に対する研究の手法、方向性を探り、何が科学的な知見を得ていくうえでしていくべき研究かを検討することで心理学の手法が適切であるという結論に至った。心理学の父親育児に関する先行研究を把握したうえで、研究の科学的水準に達したものの多くが欧米に偏しているため、それらの研究成果を日本で応用することが効果的であると考えた。欧米の研究手法を日本で展開する上で、尺度の日本語版作成が不可欠ということを考え、フィンリー&スチュワートとやりとりし、『Father Involvement Scale』『Nurturant Fathering Scale』の翻訳及び、バックトランスレーションを行い、質問紙を完成させていった。今後のそれらを使い、200人程度の質問紙調査を行い、尺度の妥当性、信頼性を検討していく。それにより、尺度が日本で父親の育児度合いを測るのに耐えうる事が判明されれば、それを使用して、欧米の結果との比較研究を行っていく。まず何より、来年度は尺度を作成するための研究を積み重ねていく予定である。

## 3 次年度の研究活動の方向性

完成した質問紙の妥当性、信頼性を測定するため、ローゼンバーグ自尊感情尺度、ダイナー生活満足度尺度、日本語版日本語版 The Positive and Negative Affect Schedule (PANAS)を同時に使用し、200名ほどの調査対象者に質問紙調査を行う。それらの結果を分析することにより、尺度の信頼性と妥当性を検証する。

# 森 慶 恵

(学籍：愛知教育大学)

## 1 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

保健教育におけるヘルスリテラシー育成に関する研究

### (2) 論文の主旨

情報化が進化する現代社会においては、健康に関する情報を批判的に吟味し、適切な情報を選択、活用し、課題解決のために意思決定をすることが重要である。このような健康に関する情報選択力や情報活用力を含む概念として、WHO (2016) やNutbeam (1998) などの研究者はヘルスリテラシーを提唱している。ヘルスリテラシーとは健康情報についての情報リテラシー (中山 2016) であり、根拠に基づいて合理的 (理性的・論理的) に考える批判的思考はその中核的役割を担っている (楠見 2015)。しかし、ヘルスリテラシーの研究は健康問題の違いや研究の目的、対象によって様々で、その概念や育成方法が定まっているとは言えない。

そこで、本研究では日本の保健教育におけるヘルスリテラシーとその中核となる批判的思考を理論的、実践的に明らかにし、保健教育におけるヘルスリテラシーとは何かを定義付け、ヘルスリテラシーの育成方法を提案することを目的とする。

### (3) 論文の構成

序章 研究の背景と目的

第1章 ヘルスリテラシーに関する研究の概観

第2章 保健教育におけるヘルスリテラシーについての基礎的研究

第1節 中学生の保健分野における批判的思考力に関する基礎的検討

第2節 質問生成に着目した保健教育における批判的思考

第3章 保健教育におけるヘルスリテラシー育成モデルの開発

第4章 保健教育におけるヘルスリテラシー育成モデルの実践

第5章 研究の成果と課題

### (4) 研究の計画

第1章では、これまで国内外で報告されているヘルスリテラシーに関する研究を、歴史や定義、測定方法、育成のための介入などの点から整理し、日本の保健教育におけるヘルスリテラシー育成についての課題を明らかにする。第2章では、第1章の課題を解決するための基礎研究を行う。これまでの先行研究であげられたヘルスリテラシー尺度の妥当性の検討、第1章の課題を解決するための育成モデル開発に関する予備的な研究を行う。「中学生の保健分野における批判的思考力に関する基礎的検討」「質問生成に着目した保健教育における批判的思考」についてまとめた。第3章では、第2章の成果と課題をもとに保健教育におけるヘルスリテラシー育成モデルを開発する。第4章では、第3章で開発した介入モデルを実施して、効果を検証する実証的研究を行う。第5章では、本研究で得られた結果を整理してまとめるとともに、課題を明らかにする。

## 2 本年度の研究活動

### (1) 論文発表

森 慶恵・古田真司 2017 質問生成に着目した保健教育における批判的思考 教科開発学論集 第5号 (査読付き・印刷中)

森 慶恵 2016 養護教諭が行う保健教育に関する一考察 - 批判的思考における質問生成の影響 - 研究収録第51集 日本教育大学協会養護教諭部会・全国国立大学附属学校連盟養護教諭部会

### (2) 学会発表

森 慶恵・古田真司 2016 保健教育における批判的思考に関する研究 第59回東海学校保健学会

森 慶恵・原 郁水・古田真司 2016 保健教育における批判的思考に関する一考察 第63回日本学校保健学会 (優秀発表賞)

森 慶恵 2017 中学生の健康情報に関する批判的思考についての検討 第14回日本教育保健学会

# 長 倉 守

(学籍：静岡大学)

## 1 博士論文の概要

### (1) 論文テーマ

中学校社会科世界地誌学習の授業実践力向上に関する教科開発学的研究

### (2) 研究の目的・結果等

本研究は、中学校社会科世界地誌学習の授業実践力向上に向け、省察を中核とした教師支援の具体的方途を検討するため、外部支援者との協働的な省察による授業実践力の向上、授業実践の実態・実践的知識及び研修ニーズ、省察と授業実践との関係性について明らかにすることを目的とする。

本研究では次のような3つの検討課題を設定し、教科学及び教育環境学的にアプローチの視点や方法について検討を行い、それぞれ調査を実施した。

1) 世界地誌学習に関する専門性を有する外部支援者との協働的な省察による教師の授業実践力の向上を明らかにする。

研究参加者である教師には、授業実践の中核となる課題意識があり、世界地誌学習の授業実践力の基本的枠組みを単に伝達するのみでは、授業実践力の向上を促すことは困難であった。そこで、単元を越えた複数の授業時間を対象に、教師の状況に即して翻案し、協働省察を重ねたことにより、省察を中核とする授業実践力向上の構成要素である、①実践的知識の形成や変容、②授業実践の変容、③教師自身の変容の自覚化について可視化することができた。

2) 世界地誌学習に関する授業実践の実態、実践的知識について質的に明らかにする。

経験豊かで授業実践力が高いと判断される教師の語りをもとに、教師の感覚による断片の提示ではなく、質的帰納的研究法を導入し、世界地誌学習における授業実践に関する教師の経験や実践的知識に関する理論仮説を生成した。5つのカテゴリーと33の概念、及びプロセスの結果図により構造化した。授業実践のプロセスについては文脈性やジレンマが存在し、授業実践の模索を続ける教師の姿が明らかとなった。

3) 世界地誌学習に関する実践的知識、研修ニーズ、省察と授業実践の関係性について量的に明らかにする。

S県の社会科教師を対象に質問紙調査を行った。統計学的な分析により、「主題・生徒基軸単元開発」を中核として理念と授業実践の現実的矛盾の中で各枠組みが相互に関連性を有する実践的知識の構造的な特性が明らかになった。これは、質的分析結果を裏付けるものでもあった。また研修ニーズについては、主題学習の理念を具体的に理解したいニーズが浮かび上がった。また求める相談・助言者としては、実践的研究を行う中学校教員が突出して高かった。さらに授業実践力向上の規定要因では、日常省察機会の影響が大きく全ての指標に有意な正の影響を与えていた。ただし、指標によっては研修など日常省察機会以上に影響を与えている項目もあり、授業実践力向上の方途を複合的に検討する必要性が示唆された。

以上の考察を踏まえ、省察を中核とした教師支援の具体的方途について検討した。多忙な学校現場ではあるが、まずは教科開発学の研究者や博士課程修了者が外部支援の機能を果たすことや既存の研修体系に意図的に埋め込むことが考えられる。加えて持続可能なものとなるよう実践者支援だけでなく指導者養成を担っていくことが必要であろう。本研究の特質は、教科開発学の研究枠組みにもとづき、研究者個人の新たな教科開発に留まらず、他の教師への支援や普及を視野に入れているところにある。筆者が学校現場にいる強みを生かし、引続き世界地誌学習の教科開発について検討するとともに、教育委員会や教員育成協議会への提言や自身の周辺の実現可能なところから教師支援の枠組みの構築を展開したいと考える。

## 2 本年度の研究活動

### (1) 論文

長倉守 (2017)、中学校世界地誌学習の授業実践力の変容に関する研究－教科開発学の視点をもった外部支援者との省察を踏まえて－、静岡大学教育実践総合センター紀要、26、掲載予定

神谷耕平・長倉守 (2017)、アクティブ・ラーニングを志向した小学校社会科授業における社会認識形成過程の考察、静岡大学教育実践総合センター紀要、26、掲載予定

### (2) 学会発表

長倉守 (2016)、世界地誌学習のカリキュラムデザインに関する実証的研究、日本地理教育学会 第66回大会、慶應義塾大学

○本年度は学位論文執筆活動を中心に行った。2016年11月に本提出をし、2017年3月に学位を取得した。

# 望 月 耕 太

(学籍：静岡大学)

## 1. 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

教師の養成期から初任期にかけての能力形成に関する研究—経験学習論による学習モデルの概念に基づいて—

### (2) 研究の経過

本研究の目的は、養成期から初任期の間にある教師が学び続ける教師になるべく、教師としての能力を向上させる教育方法や能力を向上させることに必要な条件を明らかにすることにある。この能力とは、教師が自ら教育実践上の課題を見つけ、それを解決するものである。仮説的ではあるが、能力の向上に有効な方法として、教師自身が自らの教育実践を振り返ることで実践上の課題を明確にし、その課題解決に取り組みその結果を自己評価し、課題を修正したり新たな課題を見出したりすることや課題解決のために周りの教師と協働し、時に周りの協力を得ながら自らの実践を客観的に見つめ直すことが挙げられる。これらの方法の有効性をインタビュー調査と質問紙調査を通して明らかにしたいと考えている。

先行研究より、初任期の教師は日々の職務に取り組むことを通して、教師の職務内容や役割、職務への取り組み方（例、仕事を行うタイミング、周りとの協力の仕方、など）を理解していることが分かっている。日々の職務の中には、子どもや周りの教師との関わる体験、自分の実践を振り返り、次の実践に生かす体験など、多様な体験がある。これらの体験を通して、教師としての能力を形成するための学習に取り組んでいる。

### (3) 今後の展開

#### ①教師の職務能力の形成に関わる体験学習モデルの提示

教師が職務能力を形成していく過程を明らかにするため、教職経験と学習との関係を示したモデルを提示したい。先行研究の調査の結果、ディヴィッド・コルプやピーター・ジャーヴィスの学習モデルがこの学習過程を捉える上で参考になることが明らかになっている。しかし、そのモデルでは教師の職務に関する独自性を示すことに限界があるため、より適切な体験学習モデルを示したい。

#### ②養成期の教師（本稿では大学生）に対する調査

これまでの調査から、養成期の教師は大学生活を通して子どもや教職に対する興味や関心を変化させながら能力を形成していること、大学生が能力を形成するためには教育現場における実践体験とその体験の振り返りが有効であることが明らかになっている。今後は、これまでに実施した実践体験に関する効果検証、および教師としての能力に対する自己評価に注目した質問紙調査の結果の分析に取り組んでいく。

#### ③初任期の教師に対する調査

これまでの調査から、初任期の教師が教育実践の質を高めるには、先輩・同僚教師のアドバイスや様々な問題（障害・問題行動・貧困など）を抱えた子どもとの交流（＝格闘）が有効であることが明らかになっている。初任期の教師を対象に実施した、インタビュー調査および質問紙調査の結果の分析を通して、初任期の教師の職務能力の形成の過程及びその能力の形成に関わる先輩・同僚教師の関わりの内容を明らかにしたい。

## 2. 本年度の研究活動

- 1) 教師教育学研究の課題—若手からの意見（研究者として）—：日本教師教育学会第26回研究大会（於：帝京大学） 2016年9月18日
- 2) FD/SD 研修プログラムの効果測定方法に関する開発動向—海外の研究動向と新たな測定法開発—：2016年度12月日本教育工学会研究会（於：仁愛女子短期大学） 2016年12月17日

# 加藤 敏 弘

(学籍：静岡大学)

## 1. 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

バスケットボールにおける学習者の状況判断を深めるための指導方法に関する研究

### (2) 博士論文の計画

本研究では、ゲーム（小3・4学年）・ボール運動（小5・6学年）・球技（中学・高校）のゴール型のうち特にバスケットボールのボールを持たないときの動きにおいて、子どもが的確な状況判断ができるようにするための指導方法について、理論的かつ実践的提言を行うことを目的とする。そのために、次の課題を明らかにする。

#### ・研究課題①

バスケットボールの構造をゴール型のその他の種目との関係から明らかにする。

#### ・研究課題②

バスケットボールの構造を踏まえたボールを持たないときの動きの指導内容を明確にし、子どもの状況判断を深める学習教材を考案し、その効果と課題を検証する。

#### ・研究課題③

学習教材を用いて指導する際の方法論上の問題点を明らかにし、学習者の状況判断を深めるための指導原理を構築する。

研究課題①では、バスケットボールにおける学習内容をゴール型の多種目との関係から明らかにする。そのためにゴール型の構造に関する文献研究を行う。研究課題②では、ボールを持たないときの動きを学習するための教材を考案し、実践研究を行う。また、学習者と指導者の立場の違いによっても学習内容のとらえ方が変化してしまうことを明らかにする。研究課題③では、指導者の過去の経験によって学習内容のとらえ方が異なる点などを踏まえた上で、学習者の状況判断を深めるための指導原理に繋がる調査研究を行う。

## 2. 本年度の研究活動

1) 論文：(共) 吉野聡・加藤敏弘・篠田明音・斎藤拓真・宇井俊介・飯塚明彦・佐藤竜也（2015年12月）「学習者の自己評価による球技の種類と各型に位置づく類似の行為」『体育学研究』第60巻第2号，511-525頁（休学中であったため本号に掲載）。

2) 著書：(分・単) 加藤敏弘ほか編著（2016年9月）「状況判断力の育成」「フットワーク」「パス」「ドリブル」「リバウンド」「マンツーマンディフェンスの考え方」「トランジションの指導」「インバウンズプレイ」「ワンショットプレイ」「ジャンプボール」「ハーフタイム」「ゲーム後の対応」「トレーニング」公益財団法人日本バスケットボール協会／加藤敏弘・倉石平・加藤大仁・鈴木淳・佐藤光彦・松中敦子（編）岡嶋昭人他16名のうち2番目『バスケットボール指導教本改訂版下巻』（大修館書店）2-4頁・35-40頁・41-57頁・58-73頁・74-96頁・144-146頁・235-254頁・256-267頁・275-277頁・278-280頁・285-286頁・303-322頁。



# 石川 芳 恵

(学籍：静岡大学)

## 1 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

英語学習における語彙の指導方法の研究

### (2) 研究計画

本研究は、英語学習における語彙の指導の効果的な方法を考察し、高等学校における英語科の指導の改善に資することを目的とするものである。そのために、授業における語彙の指導として用いられているタスクの内容について効果を比較し、さらに、高校生の語彙の学習方法を調査し、実際にどのような方略が用いられているかを考察する。それらの結果を基にして、高等学校の英語の授業における効果的な語彙指導についての手立てを提案する。タスクの効果を実験、考察するために、次のような要因が果たす役割を明らかにする必要がある。

#### ① 単語の音声がかつたす役割

語彙学習とは単語という情報を長期記憶に永久的に保存する作業であり、その際、言語情報は視覚情報であるか聴覚情報であるかを問わず、必ず音韻化され、情報の処理・記憶システムに保存されるという研究が報告されている。したがって、視覚呈示された単語であっても、内的に復唱する（声を出さずに心の中で繰り返す）ことで定着し、記憶・獲得されることになる。実際に、タスクにおいて音声を利用することでどれだけ効果的に語彙を学習することができるのかを検証する。

#### ② 単語の意味がかつたす役割

認知過程がいくつかの水準の処理からなり、ある項目に対する処理の水準が深いほどその項目の記憶が強固になると仮定する「処理水準モデル」を語彙学習にあてはめると、単語の形態や音韻よりも意味との関わりを持たせながら処理するほうが深い記憶痕跡を残すとされている。これは、さらに「精緻化」という概念で説明されているが、新しい語彙の意味を用いて、長期記憶に存在する既知情報とどのように関わりを持たせると効果的に語彙が習得できるかを考察する。

#### ③ 母語がかつたす役割

母語が確立した後に L2 を学ぶ学習者の場合、心内辞書の発達過程が母語話者とは異なって、L2 の使用の際にも母語の干渉が起こることから、L2 習得に際しての母語の仲介の有効性を主張する研究が報告されている。L2 学習者が既存の母語訳と意味知識に依存するのは自然なことであり、語彙の学習においても母語訳の使用は学習を促進すると考えられるが、本研究では英語の授業においてどのように日本語を取り入れて語彙の学習を効果的に行うことができるかを考察する。

## 2 本年度の研究活動

語彙学習の実態を把握するために、アンケート調査を実施した。内容は以下のとおりである。

### (1) 対象

- ・ 静岡県内の公立高校に勤務する英語科教員
- ・ 静岡県内の公立高校に在籍する生徒（1・2・3年生）

### (2) 質問内容

- ・ 教員対象：①学習者として受けた語彙指導 ②語彙指導についての考え ③現在実践している語彙指導
- ・ 生徒対象：①授業における英単語学習 ②英単語学習についての考え ③今やっている英単語勉強法

### (3) 結果は現在分析中である。

# 大 矢 隆 二

(学籍：静岡大学)

## 1. 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

投動作学習プログラムの開発とその学習効果

### (2) 研究の経過

本研究は、小学校教師の指導実態の検証とともに、投動作学習プログラム後の投距離および投動作変化、児童の意識の変容を検証することで、効果的な投動作学習プログラムの開発と投動作学習の効果を明らかにすることを目的とした。

第1章では、小学校における「投動作」学習の実態を探るために、S県S市を事例として、小学校教師の体育指導の指導実態について質問紙調査を求め量的に分析した。分析は、分析対象者の基本属性に関する項目(単純集計)、重要だと思ふ程度および実施した程度の項目(相関分析)から求めた。単純集計では、対象者全体の基本属性、体育指導の自信のない運動領域比較(男女別、年代別)である。相関分析では、苦手意識や年代別についても分析を試みた。

第2章では、独自に開発した投能力改善のための学習プログラムを実際の体育授業で実践し、その効果を検証した。この章では、小学校第5学年を対象としたプログラム実践を試み、学習前後の投距離および学習後の動作変容を検証した。投距離変化の検証とともに、初速度、投射角度の平均値の変容について検討を試みた。

第3章では、学習プログラム(第2章)の改訂を試みた。改訂のもととなるものは、たとえば児童の感想から、「運動の難しさ」、「分かりにくさ」があげられ、教師からは、「専門的な動き」や「運動の自由度」について指摘を受けた。これらの意見を参考に実践校の教師と再検討を重ね、改訂版学習プログラムを開発した。改訂版学習プログラムをもとに、小学校第4学年を対象とした学習プログラムを試みた。この研究の特徴は、学習後の動作変容として、改訂版学習プログラムの実践をもとに、学習前後の投距離変化および初速度、投射角度、投射位置、後傾角度、ステップ長の5項目の動作変容の検討を試み、投距離に影響する要因を検証している点である。また、実験群と統制群の学習前後の投距離比較および経過観測を試み、学習の保持について検討を加えている。

第4章では、第2・第3章を受けて、本研究の目的である投動作学習プログラムの学習効果を児童の心理的側面から検討した。対象者は、投動作学習を実施した児童たちであり、面接者によるインタビューの質問に応えた。インタビュー内容は、発言例として逐語化し、複数の専門の異なる研究者により概念を生成した。

第5章では、小学校第4学年を対象に比較的投運動を得意とする児童と苦手とする児童を抽出し、投動作学習後の投距離変化を検討した。第4章では用いなかった児童の背景を加え、学習後のインタビュー(半構造化面接法)から意識の変容を検討している。とくに、消極的な発言や投運動の苦手な児童の発言を中心に考察している。こうした中で、前出の学習プログラム実施後の児童の投距離変化、動作変容、意識変容を検証することで、投動作学習プログラムの学習効果について考察が展開される。

結章では、投動作学習における投動作の量的変化および心理的側面の変容から、新たな体育学習の可能性への言及がなされる。最後に、研究のまとめと課題点をあげ、今後の研究活動のさらなる展開を示す。

## 2. 本年度の研究活動

平成28年度において、以下のような発表および学術誌への投稿を行った。

〈口頭発表〉

大矢隆二(2016)投動作学習を通じた児童の心理的変容プロセス。教科開発学研究会第6回大会。

〈学術誌への投稿〉

大矢隆二・百瀬容美子・山根悠介・柳本雄次(2016)投動作学習を通じた児童の心理的変容プロセス。日本教科教育学会誌, 39(4): 59-69。(査読有)

# 日 高 翼

(学籍：静岡大学)

## 1. 博士論文の主題

米国ハイスクールにおける「生物学」の成立過程に関する研究 ―ヒトの身体の扱いに焦点を当てて―

## 2. 学術論文

- 日高翼・丹沢哲郎 (2016) 19 世紀アメリカのハイスクールにおける「生理学」の変遷過程の研究. 「生物教育」第 57 巻 1 号, 日本生物教育学会

本研究では 19 世紀の米国におけるハイスクール教科「生理学」(physiology) の学習内容の変遷を歴史的に吟味した。

当時用いられていた教科書や各種史料を用いて研究を行った結果、教科としての「生理学」は学習内容やねらい、アプローチ等の特徴によって 3 つの時代に区分できた。19 世紀を通して、「生理学」教科書で扱われる対象が動物界全体からヒトのみへ、実験主義思想の芽生え、実生活との関連の扱いの変化、タバコやアルコールの害に関する扱いの変化、宗教的・道徳的側面の衰退等が確認された。

また、これらの変化は、人々の劣悪な生活環境、temperance 思想の大衆化、教育行政の影響等の要因によって解釈された。今後の課題として、19 世紀末から 20 世紀初頭に生物学関連の各種教科が「生物学」へと収斂する過程を明らかにすることの必要性があげられた。

- 日高翼 (2017) 19 世紀アメリカのハイスクールにおける「植物学」の変遷過程の研究. 「理科教育学研究」(投稿中), 日本理科教育学会

本研究は 19 世紀のアメリカ合衆国におけるハイスクール教科「植物学」(botany) の歴史的変遷過程を解明するものである。

当時用いられていた「植物学」教科書や各種史料を用いて研究を行った結果、1826 年にハイスクール教育課程に導入されてから、19 世紀の間に学習のねらい、方法、内容等の特徴によって大きく 2 度の変化が確認できた。全体として、宗教的なものから科学的な物の見方を育てようとする方向への学習のねらいに関する変化、また、多くの種に関する網羅的な扱いから生徒にとって身近な植物を中心とした扱いへの変化、毒性や薬効のようなヒトの身体への影響に関する記述の縮小等の学習内容の変化、問答形式から実習への学習方法の変化が確認された。

また、これらの変化は、学問としての植物学の成熟、科学と宗教の分離、形式陶冶思想、高等教育の影響等の要因によって解釈された。今後の課題として、19 世紀末から 20 世紀初頭に生物学系の諸教科が「生物学」へと収斂する過程を明らかにすることの必要性があげられた。

昨年度に投稿した学術論文も含め、博士論文において研究の仔細を述べた。

## 3. 学会発表

- 日高翼・丹沢哲郎 (2017) 米国ハイスクール「動物学」の歴史的変遷―ヒトの身体の扱いを中心に―. 日本生物教育学会 第 101 回全国大会, 東京学芸大学

# 大 瀧 綾 乃

(学籍：静岡大学)

## 1 博士論文の計画

(1) 論文テーマ 日本語母語話者による英語の動詞の自他動性の習得と指導の効果検証

－ 英語能格動詞に焦点をあてて －

(2) 研究の目的：本研究は、自動詞用法・他動詞用法両方に使われる「英語能格動詞（自他両用動詞）」に焦点をあて、日本語を母語とする英語学習者（以下 JLEs）が、英語能格動詞の自動詞性と他動詞性の違いについて、どの程度習得しているのかを調査する。自他動性の習得が難しい英語能格動詞があればその理由を考察し、その研究成果をもとに JLEs に適した英語能格動詞の効果的な指導方法（明示的文法指導）を提示することを目的とする。本研究の調査・実験は、Study1：英語動詞の教科書分析、Study 2：英語能格動詞の自他動性の習得研究、Study 3：英語能格動詞の明示的文法指導の効果検証のから成る。

(3) 研究の経過：本年度は、「Study2：英語能格動詞の自他動性の習得研究の実施・考察」と「Study 3：明示的文法指導の効果検証の実施」を行った。Study 2 では、英語能格動詞の他動詞用法・自動詞用法を正しく解釈することができるかを調べるため、大学生 JLEs 65 名に文法性判断タスクを実施した。その結果、自動詞用法の方が他動詞用法よりも解釈が難しいことがわかった。また、有生名詞が主語の文の方が、無生名詞を主語に持つ文よりも、文の文法性を判断することが難しいという結果から、JLEs が英語の能格動詞の文法性を判断する際に、主語の有生性の影響が存在することもわかった。Study2 での考察をもとに、英語能格動詞の構造に関する明示的文法指導が有効に機能するかを検証するため Study 3 を実施した。大学生 45 名に明示的文法指導を計 3 回実施し、指導実施前、実施直後、実施 13 週間後に文法性判断タスクを行った。指導実施前と実施直後では、文法性判断タスクの結果が上昇したことがわかった。

(4) 今後の展開：2017 年度は、Study 2 では結果を更に詳細に分析する。（動詞別分析・被験者別分析・英語熟達度別分析・各主語の有生性の特徴の分析）。Study3 では、全 3 回の文法性判断タスクの結果を分析、考察を行った後、動詞別、被験者別、被験者の感想（自由記述）等の分析も実施する予定である。

## 2. 本年度の研究活動

(論文)

(1) Otaki, A., & Shirahata, T. (2017). The Role of Animacy in the Acquisition of Ergative Verbs by Japanese Learners of English. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 28. pp. 177-192.

(2) Shirahata, T., Mochizuki, K., Suda, K., Yokota, H., Kondo, T., Tamura, T., & Otaki, A. (2017) The Acquisition of English Aspects in Achievement Verbs by Japanese Learners of English. *Bulletin of the Center for Educational Research and Teacher Development, Shizuoka University* (26). (印刷中)

(3) 小町将之・大瀧綾乃 (2017) 母語獲得の視点で見る相互代名詞の統語構造. 『人文論集：静岡大学人文社会科学部 社会学科・言語文化学科研究報告(67/2)』. pp. 111-125

(学会発表)

(1) Otaki, A., & Shirahata, T. (2016). *The Acquisition of Ergative Verbs by Japanese Learners of English*. Talk at the 42nd Annual Convention of the Japan Society of English Language Education, Saitama.

(2) Otaki, A., & Komachi, M. (2016). *Why children have difficulty in acquiring each other in L1 English?* Poster presentation at the 18th Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences, Tokyo.

# 酒井郷平

(学籍：静岡大学)

## 1 博士論文の計画

### 1) 研究テーマ

中学生のネット依存の予防を目指したプログラムの開発と評価

### 2) 研究概要

近年、情報機器の普及によりインターネット依存の問題が指摘されている。この課題に対して学校教育では情報モラル教育が行われており、子どもたちに適切なネット利用を指導することを目的とした取り組みが行われているが、その多くは家庭や学校でのルール作りや危険事例を提示する指導となっており、危険性を知識として伝えているものの、実際に子どもの行動を変容させる指導が行われているとは言い難い。さらに、文科省が推進している「学校の情報化」が進むにつれ、インターネットの利用者が低年齢化すると考えられ、そのためには発達段階において早期から予防的なネット依存対策が必要であると考えられる。そこで、本研究では、インターネットの利用が増加する中学生を対象とし、ネット依存の自覚と自律に着目した予防的な教育プログラムを開発・実践し、そのプログラムの効果について尺度を用いて検証することを本研究の目的とする。

### 3) 研究計画

今後の研究計画として、①ネット依存測定尺度の開発、②授業プログラムの開発、③授業プログラムの実践と評価を行う予定である。①については、先行研究において、子どものネット依存の測定を試みた尺度の開発は行われているものの、ネット依存者に対するネット依存度を測定することを目的とした尺度が多く、ネット依存の「自覚」や「自律」の側面から測定を試みた尺度は見当たらないことから、中学生を対象としたネット依存の「自覚」や「自律」の側面から測定する尺度を開発するため、静岡県内の中学生を対象とした質問紙調査を400名程度行い、回答の分析を通して尺度の開発を行う予定である。②、③については、ネット依存の予防を目指した3回程程度の授業プログラムの開発を行い、静岡県内の中学校で実践を行い、効果について検証する予定である。

## 2 本年度の研究活動

- 1) 塩田真吾,酒井郷平,松永由弥子,佐藤敦,井上千春 (2016)「各年代のネット利用の認識・感覚のズレに関する調査研究」 コンピュータ利用教育学会 2016PCCConference,pp69-70
- 2) 酒井郷平, 塩田真吾, 江口清貴 (2016)「『リスクの見積もり』に着目した情報モラル授業の開発と評価ー中学生のネットワーク上のコミュニケーションにおける行動変容を目指してー」第32回日本教育工学会全国大会,pp299-300
- 3) Shingo Shiota, Kyohei Sakai,Keita Kobayashi”DEVELOPMENT OF A DIAGNOSTIC SYSTEM FOR INFORMATION ETHICS EDUCATION”,ITS, ICEduTech and STE 2016(Australia),pp.350-352,2016
- 4) 酒井郷平 (2017)「中学生の『ネット依存行動』の改善に向けた要因の分析ー『ネット依存』に関する自己認識に着目してー」,教科開発学論集第5号,pp107-116

# 杉山元洋

(学籍：静岡大学)

## 1 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

知識構築環境における一貫性を持った説明構築過程の研究：小学校理科の探究型単元を題材として

### (2) 計画

本研究では、小学校理科における概念的理解を強調する学習において、複数のドキュメントの「断片化した情報に一貫性を構築する作業によって、新たな知識を創造する」(Scardamalia & Beretier, 2014) プロセスに着目し、一つのテーマに関するナラティブ形式の文章と科学的な情報を説明する文章の間で一貫性を持った説明を構築するプロセスを明らかにすると共に、それをサポートする社会的インタラクションの特徴を明らかにする。

#### ①知識構築アプローチにおける社会的インタラクションを利用した研究の文献調査

Hmelo-Silver & Barrows(2008)では、ファシリテーターと少人数のグループによる Problem-based Learning の手法による知識構築アプローチを示している。他にも、Engle & Conant (2008) など社会的相互作用や役割の設定等の方略を利用した研究がある。これらの研究における社会的インタラクションに関する原則を、知識構築環境をサポートするソフトウェアである Knowledge Forum(KF) (Scardamalia et al., 2014)が提供する機能に対応した分類を試みる。

#### ②小学校理科における複数資料に基づく説明構築に対する社会的インタラクションの影響

小学校理科における概念的理解のために、一つのテーマに基づくナラティブ形式と情報テキストの資料から一貫性を構築する個人のプロセスと同プロセスをペアで行う場合の違いと、元の資料からの知識獲得に対するそれらの及ぼす影響を明らかにする。

#### ③ 一貫した説明を作り出す過程を支援する社会的方略の開発とその効果の検証

上記研究に基づき、複数の資料から一貫した説明を作り出す過程を支援する、社会的方略を開発して小学校に導入し、導入前と後における児童の一貫性のある説明構築に対する効果を調べる研究を行う。

## 2 本年度の研究活動

(1) Darling-Hammond, L. (2008). Chapter 5, Creating schools that develop understanding. In Darling-Hammond, L.(Ed). *Powerful Learning: What We Know about Teaching for Understanding*. 2008. Jossey-Bass. 共同翻訳 (北大路出版) 印刷中

(2) 東京学芸大学附属大泉小学校公開研究発表会 分科会講師・パネルディスカッションパネリスト 「グローバル社会に生きる力を育む ～UOI 単元の開発とアクティブ・ラーニングの実践～」 (2017.1)

(3) IB Global Conference Yokohama 2017 ポスター発表 “Designs for principles for the support of multiple document comprehension: Transcending the genres of literacy and science” (2017.3)

(4) 教育情報システム学会 学会誌 34 巻 2 号 「世界の窓」執筆 (2017)

# 田村 知子

(学籍：静岡大学)

## 1 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

日本語を母語とする英語学習者の派生接辞習得とその指導研究

### (2) 研究の目的

本論文の目的は、日本語を母語とし教室環境で英語を学ぶ大学生（以下「日本人学習者」）による英語の派生接辞（例：un-, pre-, -ment, -ness）の習得状況とその指導効果を明らかにすることである。具体的には、1) 日本人学習者にとって、どの派生接辞の習得が易しい、あるいは難しいか、2) 派生語の構造や派生接辞の知識を教師が明示的に与えることにより、どのような指導効果が得られるか、の2点を検証する。また、接辞のあいだに難易度や指導効果の差があるならば、なぜそのような差が生じるかを考察する。さらに、得られた調査結果に基づいて、派生接辞の体系的な指導・学習の方法を提案する。

### (3) 研究の経過

2016年度は、派生接辞の明示的指導の効果を主な研究テーマとした。日本人学習者を対象に、派生語形成の仕組みと、個々の派生接辞の形態、発音、文法機能、意味について明示的な指導をおこない、指導前後のテストの正答数を比較した。その結果、1) 接頭辞（例：un-, pre-）・接尾辞（例：-ment, -ness）ともに派生接辞の難易度順序は基本的に変わらないが、全体として習熟度が上がり、2) 個々の接辞のあいだには指導困難度に差があることを明らかにした。また、指導効果の差が生じる要因についても一部考察した。

### (4) 今後の展開

次年度の課題は、2015年度から考察してきた接頭辞・接尾辞それぞれの難易度の差の要因について、派生接辞全体の包括的な考察をおこなうことである。また、本年度の研究で明らかにした明示的指導の効果の差について、接頭辞・接尾辞それぞれの要因を理論的に解明し、説明的記述をおこなう。さらに、今年度末に実施した質問紙調査の結果を集計・分析し、国内の教室における派生接辞や派生語の指導や学習の現状を報告する。

## 2 本年度の研究活動

- 2017 Tamura, T. "Suffix Difficulty Order among Japanese EFL Learners." *Pacific Second Language Research Forum (PacSLRF) Proceedings* (in press).
- 2017 Tamura, T. & T. Shirahata. "Knowledge of English Prefixes among Japanese Adult Learners of English." *JACET Journal*, 61, 69-87.
- 2016 35th Second Language Research Forum (SLRF): "The Effects of Explicit Instruction on Derivational Suffixes for Japanese Adult L2 Learners of English." Teachers College, Columbia University, New York. 24 September. (with T. Shirahata, K. Suda, H. Yokota, & T. Kondo).
- 2016 Pacific Second Language Research Forum (PacSLRF) 2016: "Suffix Difficulty Order among Japanese EFL learners." Chuo University, Tokyo. 11 September.
- 2016 42nd Annual Convention of the Japan Society of English Language Education (JASELE): "The Effects of Explicit Instruction on Prefixes for Japanese Adult L2 Learners of English." Dokkyo University, Saitama. 21 August. (with T. Shirahata).

## 二見 隆 亮

(学籍：静岡大学)

### 1 博士論文の計画

#### (1) 論文テーマ

「生き方教育としての走教育」

#### (2) 研究の経過

2016年度は「小学生を対象とした合科的走教育」に拘って「生き方教育としての走教育」を考えてみた。『明日の学び舎』執筆もそのひとつである。しかし、走教育に纏わる現状が整理しきれていないため空理空論に留まった。受講した教科開発学実践論、教育プレゼンテーション論、教科開発学セミナーⅠのいずれにおいても大きく不足していることは、学校教育における走にはない文脈、走った人にしかわからない感覚や気づき、また走っていても認識また明文化しきれていない走の世界、走の概念を整理することであった。内容を決める以前に走教育・走学習の現状と走教育・走学習における課題を明確にする必要がある。

研究の手掛かりにすることを目的に、社会人ランナーによる2つの勉強会（自然流ランニング大学、修身教授録を学ぶ勉強会）に参加したが、難解さや特殊性からこれらに類似した教育を小学生対象に行うことは困難だと感じた。

#### (3) 今後の展開

経過の通り、まずは先行研究、各資料、予備調査からレビュー論文を作成することが先決である。また研究方法の検討しながら試行的実践を行い、研究の方向性を整えたい。

本研究では学校教育では確かめきれない走における教育力を調査することが大きな意図にある。ことに人材育成に関与する教育力を確かめたいと考えているため、学校教育を経験し終えた大学生を対象に実践したいと考えている。競技者でも愛好者でもない一般学生を対象にした実践を通じて、言葉や行動の変化、心理や思考の変化、走以外の活動の変化を追い求めたい。その上で学校教育での実践が可能かどうか、有用かどうかを吟味するという段階を踏みたい。

併せて、教科開発学への理解度を上げること、博士論文の水準を把握すること、専門領域が特定することに努めていきたい。私自身が競技者とも愛好者とも異なる研究者の立場で様々な走の世界に触れていくことも感覚的な知見を磨いていくために必要な点であると考えます。

### 2 本年度の研究活動

#### (1) 社会活動

1. ロンドンマラソンワールドカップ（加治佐博昭選手伴走）4月
2. アミノバリューランニングクラブ in 静岡 6～3月
3. みしま健幸大学「親子快走塾」「こども快走塾」10月
4. SBS学苑「親子快走塾」「こども快走塾」7月、12月、3月
5. 岡部公民館生涯学習講座「いきいきジョギング教室」「おとなの学び舎」5～1月
6. IAIスタジアム「初心者向けマラソンクリニック～静岡マラソンに挑戦しよう～」11月、12月

#### (2) 執筆活動 ※いずれも2016年度内に執筆

1. 単著：『明日の学び舎』二見隆亮,リーブル出版 2017年4月
2. 寄稿：『ランニングの世界22号』「自著を語る『明日の学び舎』」山西哲郎編著,創文企画 2017年4月



# 大 西 洋

(学籍：静岡大学)

## 1. 博士論文の計画

### (1)論文テーマ

不平等条約改正過程の再検討に基づく，教科開発学の一考察

—「単元の核となる社会的事象」を設定した，社会科単元構想と展開—

### (2)研究の概要

本研究は，歴史学研究を踏まえ，社会科内容学と社会科教育学を基軸に，教育論・教育内容論・教材論からアプローチすることを通して教科開発学の一実践を試みようというものである。歴史学研究では，不平等条約改正（以下，条約改正）が徳川幕府（以下，旧幕府）時代から意識されていたことを先行研究及び一次史料の分析から，明治政府での条約改正過程は旧幕府から継承されたものであることを検証する。教科専門としては，小・中学校社会科に含まれる幕末・維新时期及び明治期における不平等条約締結及び改正の歴史的な位置付けを明らかにする。また，教科教育では，不平等条約問題を社会科教育での授業方法や評価等の試案と実践を実施する。そして，教育環境学では，教育制度の視点としての小中一貫教育の面から，小中学校学習指導要領（解説）社会科編及び小中学校社会科教科書の分析・調査を行う。なお，社会科内容学と社会科教育学においては，現在が現行学習指導要領と次期学習指導要領の移行期であるため，両方に言及する。

### (3)研究の目的

全国的に小学6年及び中学生の，明治の近代化政策・大正から昭和への出来事が全て習熟基準を大きく下回っており，日本近現代史の理解を深めることが課題であると報告されている。この課題は，㊤小・中学校で前近代史に時数をかけすぎた結果，近現代史の指導時数が減り，内容を端折ることで習熟度が下がる，㊦日本近現代史を苦手としている教員の指導力不足で学習者の習熟度が下がることに起因している，とも言われている。しかし，筆者は授業の基になる学習指導要領解説社会編の記述内容が適切ではない，中心概念より単元の内容を把握しややすい「単元の核となる社会的事象」を設定したほうがよい，と考える。そこで，以下の3点を通して課題解決を図る。

- ①条約改正過程を再検討する。従来の研究では，条約改正が明治期に入ってから意識され実現されたと考えられてきたが，近年，条約締結の面で旧幕府の外交能力を評価する研究が見られるようになってきた。筆者は，旧幕府と明治政府の海軍創設・整備を通して，近代化の意識が継承されたことを研究してきた。この研究成果を，旧幕府の条約改正への意識と関わらせ，条約改正が旧幕府から継承されたことを明らかにする。また，ナショナリズムや国権の確立への批判といった視点にも言及する。
- ②小・中学校社会科歴史分野の「条約改正」や「その過程」の位置付けを明らかにし，現行及び次期小・中学校社会科学習指導要領解説の当該箇所の記述に修正を提案する。条約改正については旧幕府・明治政府の両政権にとって喫緊の中心的課題であって，これに関わる対策として諸政策（海軍整備・廃藩置県・殖産興業・明治憲法制定・議会制民主主義推進等）が実施されていったことを検討する。
- ③当該大単元の構想・展開案（指導案）を作成し，授業実践を行う。①と②を踏まえ，筆者考案の「単元の核」を「条約改正」と設定し，「単元の核の社会的事象」についても，小学6年大単元「新しい時代の幕開け」では「条約締結・改正問題との関わりの中で徳川幕府が倒れ，明治政府ができた」，大単元「近代国家に向けて」では「条約改正に向けて様々な政策を実施し，日清・日露戦争を通して達成された」と各々設定し，両大単元の授業実践を行う。

### (3)研究状況

- ①条約改正史と陸奥宗光に関する先行研究と一次資料を読み込んでいる。
- ②現行小・中学校学習指導要領解説社会編と同教科書の分析は終了した。
- ③「単元の核となる社会的事象」を設定してから授業（単元構想・展開・実践）を行う方が，より学習指導要領に準拠し，学術的に根拠のある教材開発・付けるべき力を付ける指導ができることが分かった。

## 2. 本年度の研究活動

・論文『「単元の核となる社会的事象」を設定した社会科地域教材開発の一考察—小学4年生・静岡市を近代都市化した，海野孝三郎の静岡茶直輸出の具体的事例から—』『教科開発学論集』第5号，投稿（2017年掲載）

# 室 雅 子

(学籍：静岡大学)

## 1 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

家庭科の学習指導に関する検討 ―子どもと家庭科教員の日常生活経験の視点から―

### (2) 研究の経過

本研究では、家庭科を子どもたちにはより学習しやすく、また教員にとってはより教えやすくするのに必要な事項を明らかにするため、現在の家庭科教育が抱える問題を、家庭科を学習する子どもに起因することと、家庭科教育を教える一大人としての家庭科教員に起因することを中心に、検討することを目的としている。本年度は、これまで行ってきた家庭科で育成する生活力の調査の整理と家政系専門科生との比較検討、18年前に行った家庭科教員対象の指導に関する調査のデータ再分析と本研究で行う比較調査の準備、そして改めて家政学および家庭科教育学理論や変遷の確認を行った。また、全体的な博論の構成検討を行った。また、関連研究として、家庭科の保育学習はキャリア教育（保育職養成のみならず一般社会人の職業認識形成を含む）にとってどうあるべきか（次年度5月日本保育学会第70回大会発表・確定）、被服内容の指導において指導方法の違いによって学習者の理解がどのように変化するか（次年度実験継続）、食物内容の指導において味覚実験結果と日常生活とのかかわりについての考察（次年度8月Asian Regional Association for Home Economics第19回大会発表・確定）を行った。

### (3) 今後の展開

次年度は上記で述べた2017年度版の家庭科教員調査の分析を行い前回調査や既存類似調査との比較を行う。この春実施する調査は愛知県内の高等学校家庭科教員を対象とした質問紙調査であるが、分析結果によっては調査範囲を再検討し、調査地域の拡大やインタビューによる追調査を実施する。

また、本年度発表を行った普通科生と専門科生の生活力調査と、上記の教員調査の論文作成を行う。並行して家庭科と子どもおよび子どもを取り巻く環境とのかかわりについての検討と、教科指導に関する調査や子どもの生活能力に関する既存調査の収集と検討、上記内容別の関連研究の成果から博論とのつながりを考える。博論の構成についても再考する。

## 2 本年度の研究活動

- ・室雅子・上野顕子・小川裕子・吉原崇恵「高校生の生活力認識と家庭科教育」日本家政学会第68回大会発表要旨集,2016.5,金城学院大学
- ・室雅子・蟹江教子「保育者における初期キャリアの形成」,日本保育学会第69回大会要旨集,2016.5,東京学芸大学
- ・Masako MURO(2016.8) “The Necessity of Career Education about Child Care Specialists by Home Economics in Japan”, XXIII IFHE World Congress 2016, Daejeon Convention Center, Korea,

# 渡 邊 明 彦

(学籍：静岡大学)

## 1 博士論文の計画

### (1) 論文テーマ

日本近代史学の成立と歴史教育論

### (2) 論文の主旨

本論文は、日本近代史学が成立した明治後期の歴史認識の方法論を分析することを通じて、日本近代史学の成果と課題を明らかにすることを目的とする。明治後期は歴史学をはじめとする人文社会科学が学問として成立・発展する反面、政府の思想弾圧が繰り返され、常に学問の独立が脅かされる状況であった。特に歴史学は国体論との対立関係をはらみ、学問の独立の維持は困難を極めた。その対立は1891(明治24)年の「久米事件」で表面化し、1911(明治44)年の「南北朝正閏問題」で歴史学と歴史教育の分離が決定化した。当該時期における歴史認識論、歴史教育論を幅広く検証し、皇国史観が主流となった過程を明らかにすることで、学問と教育、政治のあるべき姿を問い直す。それらの検討を踏まえ、次期学習指導要領における新科目『歴史基礎』及び『日本史探求』のモデル案を作成・実践し、現代における歴史研究と歴史教育の架橋を目指す。

### (3) 研究の経過

博士論文博士論文構成案のうち、該当する執筆済み論文は以下のとおりである。

- ・渡邊明彦「南北朝正閏問題」と新聞報道  
(『早稲田大学大学院教育学部研究紀要 別冊』14号-2、2007年、263-274頁)
- ・「南北朝正閏問題に関する一研究～雑誌『初等教育』の分析を中心に」  
(『日本史攻究』31号、2007年、1-25頁)
- ・「高校日本史における「歴史的基礎知識」定着の課題 ―静岡県東部の「授業時数」を事例に―  
(『教科開発学論集』第5号、2017年掲載予定)

来年度は以下2稿を執筆する予定である

#### ①「南北朝正閏問題と歴史意識(仮称)」

##### 【概要】

歴史教育史上の一大事件である「南北朝正閏問題」の研究史上、明らかにされていない課題は以下の二つになる。

一つは、「南北朝正閏問題」における教育関係者の議論の分析である。同事件についての史学史、思想史、政治史上の分析は先行研究によりほぼ明らかになった。しかしながら、同事件の当事者である現場の歴史教員がどのようにこの事件にかかわっていったのかについての詳細は明らかにされていない。歴史教員の事件への意識と関わりを分析することが、歴史学と歴史教育の関係性を巡る歴史、歴史教育史上の課題だと考える。

もう一つは、明治後期の歴史教育者における歴史認識の問題である。明治30年代の歴史学の発展については、アカデミズム史学の発展という形で近年研究が進められている。しかし、同時代の歴史教育の現場を担う教師の歴史観を分析した研究は認められない。歴史研究は常に歴史教育と表裏一体であり、史学史上においてもこの研究の欠落は看過できるものではない。

以上2点の課題を踏まえ、近代日本の歴史学―歴史教育の非対称性が成立する過程を学問―教育の両面から双方向的に明らかにすることが、本論文の主題である。明治44年の「南北朝正閏問題」に対する論説を分析し、「歴史学＝純正史学」「歴史教育＝応用史学」の分離が確定し、その主張が広く言論界に定着した思想的背景を論証する。

#### ②「高校日本史B「歴史の論述」の実践―静岡県仁科鉦山を事例に―」

##### 【概要】

次期学習指導要領で新設される「日本史探求」の前身の項目である現学習指導要領の「日本史B」の大項目「(6)現代の日本と世界」の「ウ 歴史の論述」の単元を構想し、授業実践とその分析を行う。本授業では静岡県賀茂郡西伊豆町仁科鉦山におけるアジア・太平洋戦争下における中国人強制連行の実態と、戦後の地元住民による慰霊活動を対象とし、現在を生きる我々にとって歴史を学ぶ意味は何なのかを具体的事例をもとに考えさせる。生徒自身が教科書の記述と向き合い、さらに実際の資料、フィールドワークを通じて考察し、論述することを通じて歴史的思考力の育成を目指す。

## 2 本年度の研究活動

- ・「高校日本史における「歴史的基礎知識」定着の課題 ―静岡県東部の「授業時数」を事例に―  
(『教科開発学論集』第5号、2017年掲載予定)

# 渡 邊 千 佳

(学籍：静岡大学)

## 1 博士論文の計画

### 1) 研究テーマ

小学校における若手研修主任の力量

### 2) 研究概要

教師が行っている研修には、最も効果が期待できる研修は「校内研修」でありたいと考える。なぜなら、「校内研修」は、同じ学校に通う子どもたちの実態をとらえ、願う子ども像を具現化するために、全教職員が共通な手立てで取り組む研修だからである。ところが、校内研修が全ての教員の力量向上の場となっていないことも多いと考えられる。筆者は研究授業後に行われる研究協議会の話し合いに課題があると考えた。そこで、修士時代(2010)研究会の協議会の活性化をめざすために、校内研究授業協議会の発話分析に着目し、研究授業協議会の話し合いがどのように行われているかを可視化する用具(「発言分析シート 2010AB」)を開発し、その活用法を実証的に検討した。このシートを使用して、話し合いの様子が可視化し、課題も見えてきた。しかも様々な課題は、複雑に絡み合っていることも現実である。中教審の答申(平成28年12月)においても、「チームとしての学校の実現」が改革の柱の1本として位置づけられている。「チーム学校」が経営的な側面も、研修的な側面においても、キーワードになっていることは間違いない。また職員の世代交代も急速に進み、現場はここ数年で若手教員が大量に採用されている。研修主任は、ベテラン層ではなく若手教員も経験するケースも増えてきている。

そこで、筆者は、テーマを小学校における若手研修主任の力量育成と設定し、小学校における校内研修の活性化における課題を明確にし、それらの課題を解決する具体的な手立てを提案したいと考えた。

### 3) 研究計画

発言分析シート2017ABを開発し、実証的に研究すると同時に、アメリカでの授業研究を視察する。(キャサリンルイスチーム)その後、研修主任の実態を把握するために、アンケートを作成し、配布、回収し分析する。分析結果を元に、若手研修主任にインタビューをする。若手研修主任の問題を明らかにしつつ、現場で1年間、管理職、同僚も含めて、観察調査を行い、研修主任の成長のプロセスを明らかにする。

## 2 本年度の研究活動

### (1) 「校内研究改善のための授業検討会分析ツールの開発」 科研費奨励研究

・発言シート2017ABの成果と課題を明確にし、2017年 学会投稿予定。

・「授業研究—lesson Study」 アメリカ視察(2017年3月下旬)

Lesson Studyの第一人者 ミルズ大学のキャサリンルイスとの対談

セントルイス、オークランド、サンフランシスコの小学校算数の授業研究に参加。

### (2) 先行研究の整理

### (3) 静岡市の研修主任へのアンケート原案作成。

・質問紙の作成(内容・項目・問題)

# V. 修了生の論文要旨及び執筆 体験談

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

# 学位論文要旨

## Summary of Doctoral Thesis

専攻：教科開発学

氏名：今井 隆夫

Course : Subject Development

Name : IMAI, Takao

論文題目：感覚英文法による言語表現の意味づけ指導の効果

Title of dissertation : The Effects of Teaching Linguistic Motivation through Image English Grammar

論文要旨：

Summary :

本論文は、英語学習者に英語母語話者が持つ英語感覚を身に着けさせることを目的に、「感覚英文法」を用いて、言語表現の意味的動機付け (Linguistic Motivation) を教えることの効果について教室での実験授業及び調査の結果から論ずるものである。「感覚英文法」とは、筆者の学習経験、授業実践、及び認知言語学の道具立てを参照して開発してきた学習英文法のことであり、説明が比喩的・アナロジカルであるため、学習者の既存の知識に取り込みやすいことを特徴としている。Linguistic Motivation とは、言語の恣意性 (arbitrariness) の反対の概念で、ある表現がなぜそのような表現になるのかの意味づけをすることであり、認知言語学の主要な道具立てである。具体的には、以下の4つの点について検証した。

(1) 高校までに英語学習をある程度終了した中堅レベルの大学生 (ボリューム層という意味で、大学生のプロフィールと言える) が母語話者の英語感覚を身に着けていない現状を確かめた。

(2) 「感覚英文法」の明示的指導の効果について調べた。

(3) 学習者の比喩能力を活性化することで、学習者が既存の知識に関連づけて新たな内容を学ぶことができることを調べた。

(4) 感覚英文法の授業を学習者が、「価値があり」、「学ぶこと自体が楽しい」と感じることを明らかにした。

本論文の構成は、次のとおりである。第1章では、論文全体のアウトラインを述べた後、教科開発学の枠組みに、本研究がどのような形で当てはまるかを述べる。要点を述べると、教科専門として認知言語学、教科教育として英語科教育法、教育環境学として学習者の学習スタイルと動機付けである。第2章は、言語教育研究を行う際に、研究者の言語観・コミュニケーション観について述べるのが重要であると考えるので、著者の言語観、コミュニケーション観に関わる理論的枠組みについて述べる。第3章は、上記(1)について、大学生339名を対象とした調査結果を示し、ほとんどの項目について正答率が30%以下であることを示す。また、それぞれの文法項目を授業でどのように教えるか

について述べる。第4章は、上記(2)と(3)に関わるもので、感覚英文法による言語表現の意味付け指導が大学生の英語学習に与える効果について12項目を取り上げ、その意味付け指導と効果について、プレテストとポストテストの正答率比較と授業内容に関するアンケート(動機づけと深層学習を調べるもの)を実施した研究について述べる。感覚英文法による意味付け指導は効果があること、学習者は学習プロセス自体を価値があり楽しいと感じることが示された。第5章と第6章は、第4章の研究をよりミクロレベルで観察する目的で行ったもので、上記(3)と(4)に関わる。Ausubelの言う「有意味・受容学習」とも整合性があるものと言える。学習者にすべてを教えなくても、学習者のもつ知識(英語の知識のみでなく、背景知識や世界に関する知識も含む)に比喩的に(metaphorically or analogically)取り込めれば、学習者が自らヒントを手掛かりに答えに辿り着けることを実験授業で確かめた。具体的には、第5章では、類似した語彙の意味の違いを理解する方法として、反意語というフレーム知識を視野に入れることの有効性について調べ、その結果、学習者に反意語フレームを意識させる学習法は、ある程度有効であるが、理解には高度な認知能力が要求されることが考えられるため難しい面もあり、この点は、今後の課題として残された。しかし、学習者は、学習プロセス自体の価値は認めている。第6章では、認知言語学の道具立ての1つ、事例化とスキーマ化という認知能力の活用について観察する実験授業を実施し、学習者の事例化とスキーマ化能力の活用について観察した。授業では、学習者の母語である日本語の例から初めて、能力を活性化し、英語の例へと移行した。与えられたヒントと事例化とスキーマ化能力を活用して解答できる正答率は、50%から70%と問題によって違いはあったものの活用できることは確認できた。さらに、アンケート結果から、この授業について価値があると捉えている参加者は90.9%、学習のプロセス自体がおもしろいと捉えている参加者は、74.4%であった。これらの結果から、事例化とスキーマ化のプロセスを意識させることは効果があり、この学び方を参加者は、価値があり、おもしろいと捉えていると言える。第7章では、結論と今後の課題について述べる。結論については、上記、(1)～(4)の仮説は、概ね検証されたと言えること。今後の課題については、教室現場で感覚英文法を使用する場合、teachability(教えやすさ)とlearnability(学びやすさ)の2つを考えることが必要であり、本研究でlearnabilityについてはあると言えるが、teachabilityについては、著者自身が授業をしなくても、他の教員がやっても感覚英文法は効果があることを調べる必要性がある。今後、進めていきたい。

# 博士論文執筆体験談

(今井 隆夫 学籍：愛知教育大学)

博士論文の体験談を書く機会を与えられ、振り返ってみると、一言で体験を表せば、「虫の目的な見方」と「鳥の目的な見方」を繰り返してきたことかと思います。「虫の目的な見方」とは、教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲ、学会での発表・論文の締め切りなどの具体的な1つ1つの目標に向けて、1つの形を完成させていくことです。「鳥の目的な見方」とは、それまでやってきたことの全体象を眺め、1つ1つの関連性やつながりを確認することです。

「虫の目的な見方」では、「セミナーがある」、「学会がある」など、自分では調整ができないスケジュールを基準とし、発表することがあるから学会で発表するという姿勢ではなく、学会があるから発表するという姿勢で臨みました。D1とD2の時期は、このようなスタイルを中心に進めながら、方向性を探り、セミナーⅡの時点で鳥の目的な方向性が見えてきたと思います。

「虫の目的な見方」で個々の研究をやっていると研究全体が進んでいく方向からずれてしまう可能性がありますので、博士論文として1つのストーリーになるように、常に方向性を確認しました。私の場合、教室での実践調査研究がD3の実施となりましたので、博論の執筆は、D3の後半からになりました。論文執筆を始めたときには、全体のストーリーの中にそれまでにやってきた研究を埋め込み、繋げていく作業が中心となりました。論文の第1章～第3章にあたる理論編については2010年(入学前)に単著を出版した時点で内容がほぼ固まっていたので、それを基に博士論文に合うよう調整する作業が中心となりましたので、理論編の執筆は比較的準備が整っていたと言えます。教科開発学の中でどのように位置づけるかという理論については、3年間でいろいろ考えた執筆時点での結果を纏めました。実践・実証編は、個々の論文で執筆したものを組み込む形になっていますので、こちらは「虫の目的な見方」でやってきたことを「鳥の目的に」纏めることに集中しました。

3年半で博士論文を完成させることができましたのは、本研究科のシステムと指導教員、副指導教員、セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲで意見をくださった教科開発学研究科の先生方のお陰です。本研究科では、自分の専門以外の学問分野に触れることができたのは個人的には大変有意義な経験でした。指導教員の稲葉みどり先生には、セミナー等の前には、長時間にわたってご指導いただいたことや国際交流セミナーでのラウンドテーブルの機会を設けていただきましたのは、論文の改良・執筆に大変有意義でした。副指導教員の白畑知彦先生には、他の院生も交えての勉強会を愛知まで来て夏季、春季の休暇中に設けてくださいましたのは、研究を進めていくうえで、大変有意義でした。教科開発学セミナーでの様々な分野の先生方の発表者へのコメントは、他の受講生に対するものも自分に研究に参考になるものが多く、とても有意義な機会でした。



(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

# 学位論文要旨

## Summary of Doctoral Thesis

専攻： 共同教科開発学専攻 氏名： 原 郁水

論文題目：小学生のレジリエンスを高めることを目的とした保健教育プログラムの開発

論文要旨：

本研究の目的は、「困難に直面した際の適応や回復を導く心理特性であり、高めることができるもの」と定義した「レジリエンス」を、小学校において育成するための実践プログラムを開発して、その効果評価を厳密に行い、小学校体育科保健領域で活用可能なレジリエンスの育成方法を提案することである。

第1章では、これまで国内外で報告されているレジリエンスに関する研究を、歴史や定義、測定方法、育成のための介入などの点から整理し、特に、レジリエンスの尺度と育成のための介入方法については、それぞれを新たな視点での分類を提案した。また、これらの分析から、①日本における小学生に関する基礎研究が不足していることや尺度が整備されていないこと、②子どもへの介入に関する研究も不足していることを課題として挙げた。

第2章では、第1章の①を解決するために、レジリエンスとストレス、セルフエスティームに関する基礎研究を行い、子どものレジリエンスは、ストレスやストレス感受性とはほぼ独立して存在し、独自にセルフエスティームを高める働きがあることを明らかにした。さらに、尺度に関する課題を解決するために、これまでの欧米での先行研究であげられた因子のうち個人内要因を概ねカバーしていると考えられる精神的回復力尺度を援用して、「肯定的な未来志向」「興味関心の追求」「感情調整」の3因子からなる小学生用レジリエンス尺度を開発し、回復経験の点からその妥当性を確認した。

第3章では、第1章の②を解決するために、子どもへの介入プログラムの開発に関する予備的な研究を行った。ここでは、第1章の既存の介入プログラムのまとめを受けて、小学校で実施可能なスキル重視型のプログラムとして、「原因帰属」「自己理解」「気持ちと考え」の3つに着目した。原因帰属では、調査研究により、原因によっては失敗が今後も続かないとする永続性次元の認知がレジリエンスと関連することを明らかにした。自己理解では、自己理解に関する10分間の実践を行うことで、児童のレジリエンスが高まることを確認した。また、気持ちと考えでは、30分と10分間の講義形式の実践を組み合わせることで、授業の時間や内容に応じてレジリエンスの下位尺度である感情調整や興味関心が高まることを明らかにした。しかしこれらの研究では、1つは調査研究であり、他の2つは時間の短い介入であったため、いずれもこのままでは介入プログラムとしては不十分だと考えられた。そのため、これらの内容を45分間の授業形式の実践で行うことが必要であると考えられた。

第4章では、第3章の課題を克服するべく、45分間の介入内容をさらに検討し、これを実際に小学校で実施して効果を検証する実証的研究を行った。その結果、45分の実践の前後で、原因帰属に関する実践によって未来志向が、自己理解に関する実践によって興味関心の追求が、気持ちと考えに関する実践を行うことによって感情調整が高まることが明らかになった。また、事前調査で把握していた児童の授業前の「落ちこみ」の有無によっても、その効果は異なっていた。さらに、実践直後と1週間後のフォローアップ調査の結果を比較すると、各レジリエンス得点が減少していないことも明らかになった。しかし、第4章では、レジリエンスを構成する3つの因子1つずつに着目して実践が行われたため、その後の課題として、①レジリエンス全体が高まるかどうかを検討すること、②厳密な評価のために統制群と比較することの2点を挙げた。

第5章では、第4章で述べた2つの課題と、複数の介入プログラムを組み合わせたパッケージの効果を検討するために、同一の対象者に45分の実践プログラムを「原因帰属」「自己理解」「気持ちと考え」の順序で3回行い、また、同年代の対照群を設定し、効果測定のために第2章で開発した小学生用レジリエンス尺度の合計得点を用いた介入研究を行った。その結果、介入を重ねる毎にレジリエンス全体や各因子得点が高まること、授業前から「落ちこみ」がある児童であっても、それ以外の児童とほとんど並行してレジリエンスの各得点が高まることが明らかとなった。また、統制群との比較で反復測定分散分析の交互作用が有意となったため単純主効果の比較を行い、介入群のみプログラムの前後でレジリエンスが有意に高まるという結果を得た。この結果は、このパッケージ化されたプログラムの有効性を示す、本研究における重要なエビデンスであると思われる。一方、授業後の感想を分析した結果から、「原因帰属」および「気持ちと考え」の介入と、「自己理解」に関する介入とでは、授業後にレジリエンスが高まる生徒の感想の内容に違いがあることが明らかとなった。さらに、「落ちこみ」がある児童の変化を詳細に分析した結果から、1つの介入では効果が低くても、パッケージ化された複数の介入を組み合わせたプログラムを準備することで、そうした児童に対しても、一定の効果を上げることができることを確認することができた。

第6章では、本研究で得られた結果を整理してまとめるとともに、今後の課題について、介入順序に関する問題、日常の体験活動や生徒指導との関連、縦断的研究の必要性の3点を論じた。

# 博士論文執筆体験談

(原 郁水 学籍：愛知教育大学)

## 1. 博士課程入学まで

卒業論文をきっかけにレジリエンスと出会い、卒業後に小学校の養護教諭として勤務する日々の中でレジリエンスの重要性を感じ、研究を進めたいと考えたことから母校の博士課程の入学試験を受けました。

## 2. 博士論文のテーマ

博士論文のテーマは「小学生のレジリエンスを高めることを目的とした保健教育プログラムの開発」です。入学時から一貫してレジリエンスの育成ということについて考え取り組んできました。この研究を進めるにあたって最も問われたことは「レジリエンスとは何か」です。レジリエンスとは何か、どのように定義できるのか、測定できるものなのか、高めるということが出来るものなのかという質問が先生方からなされました。このような質問に対してはじめは全く答えられず曖昧なままでしたが、少しずつ文献を集め、指導教官の都築先生のご指導を受け、研究を進めていくにつれて見えてくるものがありました。

## 3. 実践について

博士課程に在籍して2年目の半ばごろから少しずつ小学校で実践を行わせていただきました。国内外の文献などからレジリエンスを高めるための実践のヒントを集め、整理してきましたが、いきなり45分の授業実践として実施するには不十分なことも多々あり、10分間程度の実践を何回か行わせていただきました。そこで少しずつでも自分の定義したレジリエンスが高まったということを確認したことで、自信を得ることができました。それらを積み重ね、いざ45分の授業を小学5年生に対して実施しました。様々な子どもたちと出会いましたが、どの子どもも私の稚拙な授業に対してとても積極的に授業に参加し、素直に反応してくれたことを鮮明に覚えています。授業に協力してくれた学校、先生方、子どもたちの存在が研究の励みになりました。

## 4. 執筆

一通り実践を終えたのは在籍4年目が終了する頃で、約半年でこれまでの積み重ねをまとめ、博士論文を一通り書き終えるということを目指しました。この作業が思っていたよりも大変で、5年目に入ってから指導教員になった古田先生に指導を受け、改めて「レジリエンスとはなにか」ということに直面しながら執筆を行いました。

## 5. 今後

博士論文は何とか形にすることができましたが、まだまだレジリエンスに関して追求したいことは尽きません。論文を執筆してみてわかる新たな課題もあり、これからもこの研究を行っていきたいと考えています。また、様々な先生からご指導いただいたことを、今後は大学教員として学生たちに伝えていく所存です。温かいご指導・ご支援をいただき感謝しております。本当にありがとうございました。

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

# 学位論文要旨

Summary of doctoral dissertation

専攻： 共同教科開発学専攻 氏名： 長倉 守

論文題目： 中学校社会科世界地誌学習の授業実践力向上に関する教科開発学的研究

論文要旨：

本研究は、中学校社会科世界地誌学習の授業実践力向上に向け、省察を中核とした教師支援の具体的方途を検討するため、外部支援者との協働的な省察による授業実践力の向上、授業実践の実態・実践的知識及び研修ニーズ、省察と授業実践との関係性について明らかにすることを目的とする。

中学校社会科世界地誌学習は、網羅的・羅列的な学習の克服を目指し主題の設定に基づく高度な授業実践が求められているが、現状では授業理念の理解の困難性から従前と変わらない授業実践が見られている。一方、教師教育改革においては、教職生活全体を通じて、実践的指導力等を高める学び続ける教師であることが求められ、教師を反省的实践家として捉え、省察を中核として教師の成長過程を明らかにしようとしていた。現状においては校内研修における同僚との省察がその機能を担っているが、教科の専門性に関する省察については中学校の校内研修では限界があった。

そこで本研究では、地理教育学・地理学（教科学）と教師教育学（教育環境学）の架橋や理論と実践の往還といった、教科開発学の研究枠組みを基軸として検討を進めていくことで新たな研究の地平を開拓しようと考えた。

本研究では次のような3つの検討課題を設定し、教科学及び教育環境学的にアプローチの視点や方法について検討を行い、それぞれ調査を実施した。

(1) 世界地誌学習に関する専門性を有する外部支援者との協働的な省察による教師の授業実践力の向上を明らかにする。

研究参加者である教師には、授業実践の中核となる課題意識があり、第1章で検討した地理的見方・考え方の援用等といった、世界地誌学習の授業実践力の基本的枠組みを単に伝達するのみでは、授業実践力の向上を促すことは困難であった。そこで教師の状況に即して翻案し協働省察を重ねたことにより、第2章で検討した省察を中核とする授業実践力向上の構成要素である、①実践的知識の形成や変容、②授業実践の変容、③教師自身の変容の自覚化について可視化することができた。単元を越えた複数の授業時間を対象に、教科の視点の援用した外部支援者との協働省察によりこれらの変容を可視化したことは、本研究の新規性として指摘できる。

(2) 世界地誌学習に関する授業実践の実態、実践的知識について質的に明らかにする。

経験豊かで授業実践力が高いと判断される教師の語りをもとに、教師の感覚による断片の提示ではなく、質的帰納的研究法を導入し、データに基づいて分析手順を踏まえ、世界地誌学習における授業実践に関する教師の経験や実践的知識に関する理論仮説を生成した。5つのカテゴリーと33の概念、及びプロセスの結果図により構造化した。授業実践のプロセスについては文脈性やジレンマが存在し、授業実践の模索を続ける教師の姿が明らかとなった。実践現場の最前線にいる教師が何に悩み、何を課題として感じているかについて把握しなければ、現場教師の内実に迫りうる協働省察を行うことはできず、実践現場は混乱し続けるであろう。こうした点からも本研究で得られた知見は、新規性を有するとともに実際の授業実践に貢献できる可能性を持っているといえよう。

(3) 世界地誌学習に関する実践的知識、研修ニーズ、省察と授業実践の関係性について量的に明らかにする。

S県の社会科教師を対象に質問紙調査を行った。世界地誌学習の授業実践力を「理念把握」、「生徒-地域像構成」、「主題-生徒基軸単元開発」、「総合調整」の枠組みで捉え、とくに「主題-生徒基軸単元開発」を中核として理念と授業実践の現実的矛盾の中で各枠組みが相互に関連性を有する実践的知識の構造的な特性が明らかになった。これは、第4章で行った質的分析結果を裏付けるものでもあった。また研修ニーズについては、まずは主題学習の理念を具体的に理解したいニーズが浮かび上がった。また求める相談・助言者としては、実践的研究を行う中学校教員が突出して高かった。さらに授業実践力向上の規定要因では、日常省察機会の影響が大きく全ての指標に有意な正の影響を与えていた。ただし、指標によっては研修など日常省察機会以上に影響を与えている項目もあり、授業実践力向上の方途を複合的に検討する必要性が示唆された。こうした知見は地理教育学・教師教育学双方にとり新規性のあるものとなった。

以上の考察を踏まえ、結章では、省察を中核とした教師支援の具体的方途について検討した。多忙な学校現場ではあるが、まずは教科開発学の研究者や博士課程修了者が外部支援の機能を果たすことや既存の研修体系に意図的に埋め込むことが考えられよう。加えて持続可能なものとなるよう実践者支援だけでなく指導者養成を担っていくことが必要であろう。本研究の特質は、教科開発学の研究枠組みにもとづき、研究者個人の新たな教科開発に留まらず、他の教師への支援や普及を視野に入れているところにある。筆者が学校現場にいる強みを生かし、引続き世界地誌学習の教科開発について検討するとともに、教育委員会や教員育成協議会への提言や自身の周辺の実現可能なところから教師支援の枠組みの構築を展開したいと考える。

# 博士論文執筆体験談

(長倉 守 学籍：静岡大学)

「中学校社会科世界地誌学習の授業実践力向上に関する教科開発学的研究」―これは私の学位論文のタイトルである。上述のとおり、タイトルには、大胆にも、いや恐れ多くも、語尾に「教科開発学的研究」と銘打った。この「教科開発学」は、言及するまでもなく本専攻の名称であり、本専攻が構築しようとする学問の名称である。その名称をタイトルに冠すことについては、崇高な理念を前に、かなりの躊躇や自身へのプレッシャーがあった。それゆえ、論文執筆にあたっては、タイトル負けにならぬようにといった気概を持ちつつも、何度も何度も打ち砕かれそうにもなった。しかしながら、そのたびに立ち返ったのは、教科と教職の統合、理論と実践の往還といった本専攻の理念である。理念と自身の主張とを照合し、ブレがないか微力ながら検討を続けた。こうした検討を重ねるにつれ、むしろ理念が研究推進の指針として機能し、論文執筆の原動力となっていった。こうして、中学校地理を題材として、研修や省察といった教師の学びの観点を加え、教科専門・教科教育・教職専門という3つの学問領域を横断的かつ統合的な考察を目指し、当然ながらまだまだ課題は尽きないが、一つの知見を提示することができたように思う。

教科開発学の良さは、各専門の枠を越えて、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行する点にある。とりわけ、学校現場に身を置く私は、教科開発学の枠組みの有効性を感じている。それは、学校現場における様々な課題が、各専門の枠組み内に収まらず、いわばそれらを越えて統合的に生じているからである。こうした見方の基底には、自身の20年程に及ぶ学校現場への経験的な関わりがある。これに博士研究を通して学術的な関わりが加わった。たしかに各専門は、教育実践に接近する確かな基礎を与えてくれる。しかし一方では、学際的で総合的な知見を具体的な問題の解決において統合し、実践的な理論を形成していくことが期待されている。ますます高度で優れた実践的指導力が求められる中、教科開発学に期待される役割は大きいと考える。こうしたことから、タイトルにも構想段階から教科開発学を盛り込み、学位論文の執筆に挑んだ。

とはいえ、既存の学問を存立基盤とする学会への投稿論文等、単著論文をつなぎ合わせていく作業では、当初の想定とのズレや矛盾が生じ、それをどう辻褃を合わせて総括を図っていくかについて苦心した。具体的には、教科学的（地理学・地理教育学）及び教育環境学的（教師教育学）な理論的検討、それらを統合的に捉えたアクションリサーチ、質的調査、量的調査といった実践的検討に挑むなかで、博論全体の構成や各章のつながりには、苦しい検討が続くこととなった。それでも折り合いをつけながら接合させ、完成に至ることができたのは、主指導教官である新保淳先生をはじめ、諸先生方のお導きによるところにほかならない。以下に先生方等からいただいたご指導等の概要を示しつつ、深く謝意を表したい。

とくに新保先生におかれては、広い視野で全体をコーディネートしていただき、研究に学際的な奥行きを与えてくださった。教師教育学だけでなく社会科をテーマとする私を、5年前の入試では、本専攻の試金石とも位置付け、関係する教育環境学、人文系教科学、創造系教科学の先生方を繋いで面接を行った上で、受け入れてくださった。教科開発学の幅広さと奥深さを知るとともに、新保先生の研究的かつ人間的な度量の大きさを感じた瞬間であった。その後の指導においても、なかなか成果の上まらない私に、大局的な視点と微視的な視点を織り交ぜつつ温かくご指導いただくとともに、指導教員の先生方とチームの構築を図り、教科開発学の知見の創出に導いてくださった。あらためて深く感謝申し上げます。

また、指導教官の先生方には大変お世話になった。西宮秀紀先生には、最終的には学位論文の審査委員長も担っていただき、大所高所から総合的かつ根源的にご指導をいただいた。村越真先生には、質的研究における分析手法及び解釈について、ローデータと向き合うところから段階的に丁寧にご指導をいただいた。伊藤貴啓先生には、地理学の基本的概念や構造を基盤に、地域の構造的把握と授業開発への転化について、具体的なフィールドを通してご指導いただいた。村山功先生には、量的研究における分析手法及び解釈や、3つの調査の構造的かつ有機的な連関について、学校現場における教科指導や研修の実態を踏まえてご指導いただいた。さらに、共同教科開発学専攻の先生方には、講義やセミナーを通して示唆に富む多くのご指導をいただいた。本専攻の創設にあたりご尽力くださった先生方も含めて、諸先生方に深く感謝申し上げます。

加えて、論文執筆にあたっては、多くの方々にも大変お世話になった。早稲田大学の池俊介先生と静岡大学の長谷川哲也先生には、多くの示唆や励ましをいただいた。池先生には、地理教育学の立場から、世界地誌学習の経緯や現状を踏まえつつ、地誌学の基本的概念を背景に、学会等において研究の方向性についてご指導をいただいた。長谷川先生には、量的調査における質問紙作成や具体的手順にはじまり、統計学的手法に疎い私に分析ソフトの選定や具体的指南、データの解釈や価値付けに至るまで、教師教育学の視点を踏まえて丁寧にご指導をいただいた。また、職場の皆様からも、社会人院生に対し多くの励ましをいただいた。2012年の入学時、当時勤務していた静岡県教育委員会の安倍徹教育長、田中潤学校教育課長、奥水まゆみ小中学校教育室長（いずれも当時）は、進学希望の私の思いを快く尊重してくださった。2014年から現場交流教員として赴任した静岡大学では、教育学研究科長の菅野文彦先生、教育実践総合センター長の梅澤収先生をはじめ諸先生方、実践センターの近藤里美さん、学務係の佐野明宏さんをはじめ事務の皆様にも、常に論文執筆へのお気遣いを賜り、温かく見守っていただいた。皆様に深く感謝申し上げます。

そして、お名前を挙げることはできないが、数多くの学校現場の先生方には、多忙な中を調査にご協力いただき、貴重なご意見を頂戴した。学校現場に身を置くものとして研究成果を還元していきたい。また、博士課程の院生の皆さんとの交流では、数多くの知的な刺激をいただき、論文執筆の励みとなった。中でも河合美保さんには、統計学的な分析にあたり、多くの丁寧なご助言をいただいた。深く感謝申し上げます。

最後に、博士課程への進学、土日の講義受講、昼夜を問わないレポートや博論執筆を許してくれた家族には、ただただ申し訳なく思うと同時に、最大級の謝意を表したい。

(課程博士・様式7)

# 学位論文要旨

専攻：共同教科開発学専攻

氏名：日高 翼

論文題目：米国ハイスクールにおける「生物学」の成立過程に関する研究  
—ヒトの身体の扱いに焦点を当てて—

## 論文要旨

本論文は、ヒトの身体の扱いを手がかりとして、米国のハイスクール教科「生物学」の成立過程を究明するものである。そこで、研究目的として以下の2点を設定した。第一に、米国ハイスクールにおける「生物学」成立に至るプロセスの全容を、ヒトの身体に関する学習の扱いの視点から解明する。第二に、「生物学」成立プロセスに関与した要因を、ヒトの身体に関する学習の扱いの視点から解明する。以上の目的の達成のため、次の研究方法を用いた。第一の目的に対応し、まず、19世紀から20世紀初葉にかけての米国の学校制度、「生物学」へと繋がる前駆的教科の設置率・履修率等を各種の調査報告の中から抽出し、各教科のハイスクールへの設置状況を明らかにした。次に、「生物学」及びその前駆的教科に関する各時代の代表的な教材の構成やヒトの身体に関する扱いを分析し、それらの特色を明らかにした。さらに、上記2つの結果をもとに、ヒトの身体の扱いという視点から「生物学」成立に至るプロセスを提示した。第二の目的に対応し、先に示した方法で得られたプロセスを、当時の人々の生活、科学の学術的発達、教育思潮等との関わりの中で、その諸要因を考察した。

## 論文の概要

### 1) 「生物学」成立に至るプロセスの解明

第1章ではヒトの身体を含む初の教科「自然誌」の設置状況、学習の特色とその変化を検討した。その結果、1824年にハイスクールに導入された「自然誌」は「植物学」や「動物学」が発展するとすぐに教育課程から消滅したと考えられてきたが、実際には19世紀を通してハイスクールに設置され続けていたこと、ごく初期の「自然誌」では特にヒトが重視され、ヒトを含む動物の生理学的内容も「自然誌」の学習内容に含まれていたこと、時代とともに動物界の扱う割合が高まっていったこと等が明らかになった。つまり、「自然誌」はヒトの身体を扱う初のハイスクール教科であり、従来の通説としての「自然誌」に対する教科認識とは大きく異なる特徴を有していたことが明らかとなった。

第2章ではヒトの身体を扱う初の教科「生理学」の設置状況、学習の特色とその変化を検討した。その結果、19世紀を通し、教科書で扱われる対象が動物界全体からヒトのみへ、実生活との関連の扱いの変化、タバコやアルコールの害に関する扱いの変化、宗教的・道徳的側面の衰退等が確認された。ここで注目すべきは「自然誌」におけるヒトの身体に関する学習内容と「生理学」に包含されるその分野とが類似していた点、及び「生

理学」の設置率が過半数を占めるようになった19世紀中葉以降の「自然誌」はヒトの身体内部よりも外形的特徴の扱いへとシフトしていった点である。ここから「生理学」が「自然誌」から派生した一教科としての可能性が浮上してきた。

第3章ではヒトの身体に関連する学習が含まれていた「植物学」と「動物学」の設置状況、学習の特色とその変化を検討した。その結果、「植物学」では直接人間生理学を扱うのではなく、特定の植物の有する薬効や毒性をとりあげ的过程中でヒトの身体にどのような影響があるのかが記述されていた。そして、時代の経過とともに実験的手法が強調されるようになるにつれ、ヒトの身体と関連する学習が極めて小さなものになっていったことが明らかになった。一方、初期の「動物学」ではヒトの身体に関して他の動物と比較しながら扱われていた。また、特定の動物の有する毒がヒトにどのような影響を与えるのかといった側面からヒトの身体が扱われる傾向にあった。「植物学」と同様に、実験的手法が強調され始めると、それらの扱いは縮小していった。このようにヒトの身体に関連する扱いに関していえば「植物学」と「動物学」の両方とも同じような特色を有していた。しかし「動物学」では実験的手法に依らない分類・記載的な教材も根強い人気があり、そのような教材中では外形的特徴によって人種を分類する記述が多く、時代の変化とともに一方向の変化が確認された「植物学」とは異なり、「動物学」では異なるアプローチの教材が併存し、標準化されない混沌とした状態にあったことが明らかになった。

第4章ではヒトの身体に関連する諸教科が統合されてきたと考えられる「生物学」の設置状況、学習の特色とその変化を検討した。その結果、入手できた19世紀末葉から20世紀初葉にかけてのハイスクール「生物学」教材26冊を、ヒトの身体の扱い方によって分類すると5種類に類型化でき、現在の米国「生物学」の原型ともいえる構成要素（従来の「植物学」「動物学」「生理学」を全て含む）が確立するまでのプロセスが導き出された。本章の主要な論点として、第一に、従来、教科成立は20世紀初葉とされてきたが、実際には1880年代から「生物学」の授業も専用の教材も既に存在した点、第二に、「生物学」は「植物学」と「動物学」の2教科が収斂してできたとする見方が通説とされてきたが、実際には従来の「生理学」を包含する教科であった点等が挙げられる。

## 2) 「生物学」成立に至る要因の解明

本研究で明らかにされた各教科の変化のプロセスを元に、第5章では「生物学」の前駆的教科のカリキュラム変化の要因がどこにあったのかを考察した。各々の変化の詳細を吟味した結果、解釈された種々の要因は大きく5つにカテゴライズされた。

第5章で帰納的に得られた変化の要因をもとに、第6章では「生物学」の成立要因に対して演繹的に検証を行った。その結果、「生物学」の前駆的教科のカリキュラム変化の要因は、「生物学」の成立要因にも適用可能であったことから、米国ハイスクールのヒトの身体に関わるカリキュラムに関する普遍的な変遷要因が導き出されたといえる。

以上の結論を踏まえた上で、終章では本論文を通じて得られた米国ハイスクールにおける「生物学」の成立過程の全容を提示するとともに、今後に残された課題について論じた。



# 博士論文執筆体験談

(日高 翼 学籍：静岡大学)

## 1. 3年間で振り返って

大阪府の公立高校教員の私は、内地留学（とはいっても大阪は無給。D1, D2 は完全に休職し静岡で純粋に院生, D3 は現場に戻って二足の草鞋生活）を活用し、本専攻に入った。雑務に追われる学校現場から離れ、研究のことだけを考えられる時間と場が得られたことは本当に幸せであった。

ただ、当然障害もあった。給料ゼロでも肩書は公務員であるためにアルバイトができず、学術研究員の仕事でさえ府教委には認められなかった。私の研究はアメリカを対象とした歴史研究であり、史料収集のために出費が嵩み、経済的に苦しかった。また、研究が進めば進むほど新たな悩みにぶち当たる。こっち（障害）の話は書き出したら、本冊子の印刷代に迷惑をかけそうなのでやめておこう。

研究の遂行にあたっては、教科開発学セミナーの存在が大きかったように思う。「これでいけるだろう」というラインまで持って行って臨むのだが、予測不能な視点から様々なご批判・ご指導をいただき、肩を落として帰る。そして翌日から対策を練る・・・の繰り返しであった。が、これが研究修正の道筋を見出すきっかけとなった。

## 2. 感謝の思い

私は口下手なので、この場を借りて先生方へ思いを伝えたい。

主指導教官である丹沢先生からは、研究の方向性や手法のみならず、研究に対する姿勢に至るまで、根気強く温かく教えていただいた。先生の存在はいつも大きな心の支えであり、先生の懇切な指導なくして学位論文の完成はあり得なかった。衷情を託して深く感謝申し上げます。

審査委員長の小南先生には特に生態学や自然誌に関して学術的見地からご教示を賜るばかりではなく、折に触れて激励していただいた。新保先生には博士課程入学当初より授業内外問わずヒトの身体に関する教育の在り方についての的確で温かいご指導を賜った。稲毛先生には生物学とは異なる化学の側面から、特に高等教育の与えた影響についてご示唆を賜った。野地先生には各種報告書や議事録等へのアプローチを中心に、西宮先生には古い時代の教材に対する着目点を中心に、歴史的研究としての質を高めるための貴重なご教示とご示唆を賜った。古田先生には、生理学や衛生学の歴史、並びに現代保健教育に関する諸問題等、医学専門の立場から貴重なご意見をいただいた。

その他、陰に陽に応援していただいた多くの先生方に改めて深謝の意を表したい。

## VI. 教員の教育・研究活動

# 石川 恭



所属 愛知教育大学教育学部保健体育講座  
職位・学位 教授 博士（教育学）  
博士課程分野 教育環境学  
担当科目 教科開発学原論、遊び文化環境論、教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ  
研究テーマ 遊び文化論、教育社会論、余暇教育論

## 1. これまでの教育研究について

愛知教育大学に着任して以来、オランダ社会の近代化とヨハン・ホイジンガの遊び文化論の関係について研究してきました。特に、オランダ社会の近代化が、どのように人々の社会生活に影響を与え、変化をもたらしたかについて具体的に明らかにしてきました。研究の中で一貫している視点は、社会生活における遊びの要素です。近代化が進むにつれて、社会生活における遊びの要素や内容はどのように変化したのか、それがホイジンガの遊び文化論形成にどのような影響を与えたのかを追求してきました。

教育面では、生涯スポーツ論、体育社会学などの授業を通して、人生 80 年時代の自由時間の過ごし方について、遊びと文化、余暇と生きがいといった観点から講義・演習を行ってきました。

## 2. 博士課程における教育研究について

博士課程においては、教育環境学と教科学を統合した教科開発学の視点から研究を行っています。具体的には、遊びをキーワードに、遊びと文化の融合や、現代社会における子どもの問題を、遊びによって解決する可能性を探ること、教科への伝承遊びの導入とその効果についてなど、理論的に構築し、その後、調査などを行い立証していく予定です。

## 3. 担当講義について

### 【教科開発学原論】

教育環境学と教科学を統合した学問として構築する背景と目的について理解を深めます。教育環境学は、学校環境だけでなく、地域・社会・文化を含んだ幅広い視点からの教育環境の発展を目指すものです。本講義では、子どもの遊びという視点から社会化との関わりについて説明しています。その上で、教科学への応用がどのような観点で可能かについて議論を行います。また、遊びと文化を機軸にして、特に、創造系と人文社会系の教科の現状と課題を捉えなおし、新たな教科観の開発・創造への可能性について検討します。

### 【遊び文化環境論】

現代社会における子どもの遊びは、昔と比べてかなり変化しています。この状況は、遊びそのものの変化に留まらず、様々な影響を子どもに与えています。講義では、現代に生きる子どもの問題を遊びとの関わりから考察します。また、遊びによって身につく社会を生き抜く力が、教育とどのような関わりをもつかについて、議論を交わします。その上で、遊びがもつ可能性について、グローバルな視点から文化の創造との関わりを考えます。

## 4. 主要な研究業績 (2011.4 ～)

- 1) 教科学を創る, 第 2 集, 愛知教育大学出版会, 2016, 分担執筆。
- 2) 教科学を創る, 第 1 集, 愛知教育大学出版会, 2014, 分担執筆。
- 3) 遊びと文化の融合, 愛知教育大学研究報告第 62 輯, 愛知教育大学, 2013. 3。
- 4) 子どもの問題に対する遊びの効果を取り入れた表現運動, 教科開発学論集第 1 号, 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科, 2013. 3。
- 5) 小学校体育科への伝承遊び導入について, 教育創造開発機構紀要第 3 号, 愛知教育大学教育創造開発センター, 2013. 3。

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) スポーツ指導者養成講習会「スポーツ社会学」安城市 (2015. 8)
- 2) 愛知教育大学公開講座講師「生きがいと余暇の活用」豊明市 (2015. 12)
- 3) スポーツ指導員養成講座「スポーツと生きがい」小牧市 (2017. 2)

# 倉本 哲男



所属 愛知教育大学 教職大学院  
職位・学位 教授・博士（教育学）  
博士課程分野 教育環境学  
博士課程担当科目 教育経営臨床論研究・教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ  
研究テーマ 教師教育学(Action Research/EdD)  
アメリカ教育学(Curriculum Management/Service-Learning)  
教育方法・経営学(Knowledge Management/Lesson Study)

## 1. これまでの教育・研究について

これまでの教育・研究活動は、博士論文の刊行書に集約されている。

「アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究 - Service-Learning の視点から - pp.1-345, 2008年」。

上掲書は、アメリカのカリキュラムマネジメント論を研究対象、及び Service-Learning カリキュラム論を分析視点に設定し、その一断面におけるカリキュラムの統合性(Integration)と学校組織の協働性(Collaboration)を論じたことに、研究上の独自性があった。

## 2. 博士課程における教育・研究について

これまでは、アメリカ教育学の知見を「輸入する」研究スタイルであった。そこで現在（ポストD論）は、海外から評価される我が国の教育実践を念頭に置き、我が国の学校マネジメント、及び教師実践を「輸出する」研究スタイルを重視している。よって博士課程では、国際学会活動を念頭に置き、教育実践研究・教師教育学を発展させていきたい。そこで、“Action Research” 「教師による教師のための実践的研究」、及び“Knowledge Management/Lesson Study”と“Curriculum Management”「校内研修・授業づくりを通じた学校づくり」等に関する理論・実践を研究継続したい。

現段階では、教育における国際貢献の視点から英文出版（参照：主要業績 2014）のかたちで業績化した。

## 3. 担当講義について

### ① 実践軸：

帰納的指導と演繹的指導があるが、帰納的指導とは、実践者のこれまでの振り返りに同伴し、その意味付けを理論的に確立する指導である。一方、演繹的指導とは、一定の理論や幅広い情報を提供し、実践の方針の確立を援助することである。

### ② 学術軸：

「理論研究」と質的・量的な「実証的研究」に対応したい。Action Research/EdDにおいて教育実践が第一義的であるのは当然であるが、同時に高度な学術性・理論性を保証することは重要である。

### ③ 国際軸：

我が国の教育実践は、テーマによっては国際的に高い評価を受けている。我が国の教育実践者としての誇りを高め、可能であれば国際学会発表などを経験し、教育の国際化（輸出的活動）においても視野を広げさせたい。

## 4. 主要な研究業績

- 1) Tetsuo Kuramoto & Associates, Lesson Study and Curriculum Management in Japan, -Focusing on Action Research- Fukuro Publisher, pp.1-221,(2014).
- 2) KURAMOTO Tetsuo, TANDO Hirofumi, Ed. D and Master Programs for In-Service Teachers-Focusing on Action Research Methodology- @ THE 11TH INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON 2016-CCNU TEACHER EDUCATION IN EAST ASIA, Official Conference Proceedings,pp.150-165. (China 2016).
- 3) 【基調講演】 International Post Graduate Research Forum @Hong Kong university of Education(2017).

## 5. 主要な社会活動業績

1. 2016,愛知県・名古屋市教育センター連携 project（ミドル/管理職マネジメント研修・教員研修部門長）
2. 2016 豊橋市教育委員会・二期制/検証委員会（委員長）
3. 2016,東三河5市連携 project（ミドル/管理職マネジメント研修講座・講師）
4. 2016,豊田市教育センター（教務主任研修・小中一貫教育・講師）
6. 2016,大分県教育センター（高校・新任教務主任研修・主任講師）
7. 2016-2017, 文部科学省・大学設置/学校法人審議会大学設置分科会専門委員（設置審・教職大学院部門）

# 石田 靖彦



所属 愛知教育大学教育学部学校教育講座  
職位・学位 准教授 博士（心理学）  
博士課程分野 教育環境学分野  
担当科目 教育評価実証方法論，学校適応論研究，教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ  
研究テーマ 児童生徒の学校への適応過程，学級内の人間関係が児童生徒に及ぼす影響

## 1. これまでの教育研究について

中学校新入生や大学新入生を対象として，児童生徒が新たな環境である学校に適応していく過程，及びそれに影響する個人差について研究してきました。また学級という環境は，児童生徒にとって学習する空間というだけでなく，1年を同じ児童生徒と生活をともにする生活空間でもあります。このような学級内の人間関係が，児童生徒の規範意識や授業態度，学習意欲などに及ぼす影響についても研究しています。

## 2. 博士課程における教育研究について

本博士課程では教育評価実証方法論，学校適応論研究ほかを担当しています。専門分野は，教育・社会心理学ですので，特定の教科に直接があるわけではありませんが，学生の皆さんの研究を聞かせていただきながら，教科開発学にどのような貢献ができるかを探っていきたいと思っています。

## 3. 担当講義について

### 【教育評価実証方法論（分担）】

この授業では，心理学におけるデータの収集法，相関的研究と実験的研究法，心理測定の必須としての尺度の信頼性と妥当性，因子分析などについて概説します。

### 【学校適応論研究】

学校への適応について，特に児童生徒の動機づけという観点から概観します。具体的には，「やる気を引き出す教師—学習動機づけの心理学（プロフィ著，中谷訳，金子書房）」を講読し，児童生徒の動機づけに関する理論や関連する要因，教育への応用について理解を深めたいと思います。

## 4. 主要な研究業績（2014.4 ～）

- 1) 級友との関係が協同的・個別的学習動機づけに及ぼす影響 — 小学生を対象とした検討 — 愛知教育大学研究報告（教育科学編），66，85-90. 2017年
- 2) 級友との関係が協同的・個別的学習動機づけに及ぼす影響 — 親和的な関係と競争的な関係に着目して — 愛知教育大学研究報告（教育科学編），65，109-116. 2016年
- 3) 中学校入学後の友人関係が学校適応感に及ぼす影響—関係の親密さと友人の特徴の効果に関する縦断的研究— 愛知教育大学研究報告（教育科学編），64，67-73. 2015年
- 4) 友人との関係の親密さと友人の特徴が生徒の学習動機づけに及ぼす影響 愛知教育大学創造開発機構紀要，愛知教育大学創造開発機構，5，133-140. 2015年

## 5. 主要な社会活動業績（2014.4 ～）

- 1) 日本学校心理士会愛知支部支部長・地区幹事（2011.9-現在）
- 2) 日本学校心理学会第18回大会準備委員会委員（2016.8）
- 3) 教員免許状更新講習講師「教育の最新事情②（必修）」（2016.8）
- 4) 教員免許状更新講習講師「教育の最新事情IV（必修）」（2015.8）
- 5) 教育心理学研究編集委員（2013.3-2015.12）

# 西 宮 秀 紀



所属 愛知教育大学教育学部社会科教育講座  
職位・学位 教授 博士（文学）  
博士課程分野 人文社会系教科学  
担当科目 文化資源活用論、歴史教育内容論研究、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ  
研究テーマ 古代史、古代地域史、古代宗教史・教科書構成論

## 1. これまでの教育研究について

社会科の日本史担当教員として日本古代史を研究し、それを教育に還元する試みをしています。研究は古代国家論の中の神祇祭祀制度の解明を目指し、官僚制や使者、そして神祇祭祀に献じられるモノとしての幣帛や幣物の研究を行ってきました。その成果として『律令国家と神祇祭祀制度の研究』（塙書房、2004年）、奈良時代の概説書として『日本古代の歴史3 奈良の都と天平文化』（吉川弘文館、2013年）などを刊行するとともに、愛知県などの自治体史編さんや教科書編さんに携わり、教育や教科書にも反映させることを試みています。

## 2. 博士課程における教育研究について

本博士課程は愛知教育大学教育学部と静岡大学教育学部の共同大学院ということで、東海地域の古代史に注目して、その歴史を解明するとともに、それらをどのように教育現場に還元するのかを研究しています。とりわけ、教科書に記されている基礎的な事柄が、どのような史料・資料の解釈から成り立っているのか、具体的に一次史料・資料の読解を共に進めるとともに、教科書の問題点についても研究しています。

## 3. 担当講義について

【文化資源活用論】 東海地方の文化資源を、どのように活用するか、その研究技法などに留意しながら授業をおこなっています。文化資源とは、主に遺跡・遺物や文字資料・寺社・文化財のことです。

【歴史教育内容論】 日本史、とりわけ東海地域の歴史文化に関する歴史的物事や事象の諸問題に関して、史料・資料を具体的に例示しながら、それらがどのように研究され、どのような学界での共通認識にいたっているのか検討します。

## 4. 主要な研究業績（2016年度）

（共著）『新修豊田市史 資料編 古代中世』（豊田市）

「古代尾張国と参河国—文献史料と木簡にみえる物品・特産物からみた特色」『歴史研究（愛知教育大学）』63号

## 5. 主要な社会活動業績（2016年度）

愛知県史専門委員（2016年度）・新修豊田市史古代・中世部会長（2016年度）・知立市史専門委員会 委員長（2016年度）・斎宮歴史博物館専門委員（2016年度）・稲沢市尾張国分寺跡史跡保存整備委員（2016年度）

# 稲葉 みどり



所属 愛知教育大学教育学部日本語教育講座  
職位・学位 教授 博士（学術）  
博士課程分野 人文社会系教科学  
担当科目 教科開発学実践論、言語教育内容論研究  
教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ  
研究テーマ 言語教育に関する教科開発、外国語教育、言語習得、教員養成

## 1. これまでの教育研究について

研究テーマは第一言語習得、第二言語習得、外国語教育（日本語教育、英語教育）、異文化理解教育等です。第一言語、第二言語の習得過程で起こる様々な現象について研究から得られた知見を外国語教育に活かそうと考えています。最近が多文化理解教育、海外研修プログラムの開発等に関する研究も行っています。教育は、学部では日本語教育学に関連した授業、卒論等を担当しています。修士課程は英語教育に関する授業や修士論文の指導をしています。学術協定校との共同研究、学術交流、学生の海外派遣、招聘研究者の受け入れ等に携わっています。

## 2. 博士課程における教育研究について

ことばを柱とした研究や教育を創造していきたいと考えています。例えば、高等教育機関における日本語コミュニケーション能力の育成、小中高等学校における効果的な英語教育の方法、グローバル人材育成のためのカリキュラム開発、省察を通じた教師の成長等を中心に教育研究に関わっていきたくと考えています。また、保育、特別支援教育、インクルーシブ教育についても関心を持っています

## 3. 担当講義について

### 【教科開発学実践論】

新しい教育を創造開発するには、これまでの教育実践を省察し、問題点や課題を発見し、それと同時に実践を理論化して共有できるようにする必要があります。さらにその理論を指導に生かすための能力も求められます。授業では、高等教育機関での教育実践も射程に入れて、教科開発学における実践上の課題の把握、大学教員としての教育実践力、教員FD等、実践的諸課題を追究します。受講者は各自のこれまでの研究を、教科開発学の視点から構成しなおして発表し、具体的に議論を進めます。

### 【言語教育内容論研究】

「ことば」はどのような教科を学ぶにも基礎となります。教科を超えて、ことばを理解し、運用する能力を養成できるような教育の創造開発をめざします。さらに、世界に向けて発信力のある言語運用ができる能力や資質の養成を学校教育の中でどのように行うかを研究します。

## 4. 主要な研究業績

- 1) Inaba, M. (2016). Development of student interns: results of a one-month study of Japanese-language Education Training at Universitas Negeri Surabaya. In Mohammad Rokib & Masilva Raynox M. (Eds.), *Prosiding Seminar Nasional Paramasstra 4*, (ISBN ISBN 978-602-72614-4-0) (pp. 652-664). Indonesia, Universitas Negeri Surabaya.
- 2) 稲葉みどり(2016). 「アクティブラーニングを取り入れた海外短期研修の省察」『教養と教育』16, 13-21. 愛知教育大学共通科目専門委員会
- 3) Kuo, F. L.&Inaba, M. (2017). Participants' Reflections on the Impact of a Short-term Graduate Student Exchange Program for Teaching and Learning English as a Foreign Language. 『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』2, (印刷中), (ISSN 2424-0605) 愛知教育大学

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 日本語教育海外インターンシップ派遣、海外体験留学学生派遣等
- 2) 平成28年度高校訪問模擬授業等
- 3) 愛知教育大学附属名古屋中学校帰国生徒教育共同研究・指導助言

# 野地 恒有

所属 愛知教育大学教育学部地域社会システム講座  
職位・学位 教授 博士（文学）  
博士課程分野 人文社会系教科学  
博士課程担当科目 文化資源活用論、民俗学教材論研究など  
研究テーマ 日本民俗文化論、歴史民俗博物館論



## 1. これまでの教育・研究について

日本の文化や歴史を民俗学という分野から研究しています。主なテーマは日本の海洋文化論・都市文化論です。具体的には、近代以降に開拓・形成された集落（移住開拓島）の生活体系に関する研究や、金魚、菊、朝顔など都市で形成された観賞用動植物の飼育栽培文化に関する研究を進めています。

## 2. 博士課程における教育・研究について

教科開発学とは、基礎科学の成果を基軸としてその成果を社会的に還元させるための開発を図る応用科学の一つであり、基礎研究の成果を学校教育へ応用化するための開発を研究対象としてその体系化や理論化をめざすものである、と私は考えています。そして、基礎研究として民俗学の成果をふまえて、学校教育（とくに社会科歴史的分野）の場面に応用化を図るために開発する教材あるいは教材論の領域を「同時代生活誌」という形で提示することをめざしています。同時代生活誌は、現在の地域社会に内在する歴史や伝統を描き出すことにより地域の生活や生活に根ざした文化をとらえ、地域社会の未来を構想する内容構成になるとともに、基礎科学の民俗学研究にもインパクトを与えうるものと考えています（「民俗学を基軸として構想する教科学」『教科学を創る』1、愛知教育大学出版会[2013]参照）。

授業では、民俗学の調査法をふまえた地域の生活に根ざした伝統文化を題材として、教科開発学の構築について考えるとともに、受講者が自立的な研究の進め方や博士論文の書き方について理解を深め、身につけられることを目標としています。

## 3. 担当講義について

### 【文化資源活用論】

文化資源としての民俗文化について、文化財行政、教育資源、地域資源（地域活性化や観光の資源など）の観点から講述します。そして、文化資源としての民俗文化の活用をとおして基礎研究（民俗学）の応用・社会的還元について検討します。あわせて、論文の書き方についても講述します。

### 【民俗学教材論研究】

地域社会の人々の生活の中から問題を見つけ、その人々に関わることにより資料を引き出して考えるという民俗学の立場から民俗調査（民俗誌や博物館展示）をふまえた教材開発論を講述して、「同時代生活誌」という教材の開発・創造を試みます。同時代生活誌の作成をとおして、民俗調査・研究により獲得された高度な一次資料をもとに教材を開発・創造することの重要性の理解を深めることを目標としています。あわせて、自立的な研究法や論文の書き方についても講述します。

## 4. 主要な研究業績（2015.4 ～）

- 1) 「まれびと＝海縁ネットワーク論序―折口信夫『古代研究 民俗学篇』を題材として―」『歴史研究』61・62、愛知教育大学歴史学会（2016.3）
- 2) 「小学校社会科と民俗学教材論―高浜市吉浜地区における「同時代生活誌」の試みから―」『教科開発学を創る』1、愛知教育大学出版会（2017.3）
- 3) 『移住開拓島の民俗学 新訂版』愛知教育大学野地研究室（2017.3）

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 愛知教育大学地域連携公開講座や市町村の市民大学講座などの講師：「地域の歴史・文化について『民俗学』してみよう」・「松本清張から見た民俗学―「或る『小倉日記』伝」を題材として―」
- 2) 岡崎市美術博物館博物館資料収集委員会委員（2006～）、名古屋市博物館資料委員会委員（2013～）、鳥取県立博物館協議会委員（2014～）



# 伊藤 貴 啓



所属 愛知教育大学教育学部地域社会システム講座  
職位・学位 教授 博士（理学）  
博士課程分野 人文社会科学系教科学  
担当科目 地理学教材研究論，文化資源活用論，教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ  
研究テーマ 農業地域の自立的発展とその条件，ヨーロッパ国境地域の空間変動，  
教員としての実践的指導力育成と地域教材開発（社会科地域学習および防災教育）  
教員養成における教科専門と教科教育の架橋に関する研究

## 1. これまでの教育研究について

地理学担当教員として，農業地理学およびEUの地域統合下の国境地域や農村地域を対象に研究してきました。前者ではIPM（総合的病害虫管理）を指標に，農業技術の革新とその普及という観点から農業地域の自立的発展を考えています。後者では主にオランダ国境地帯を対象に越境地域連携の展開と構造のほか，農村地域の持続的発展の方途を探る研究をオランダやルーマニアを対象に進めています。これらでは地域事象を構造的に把握して，その生起から時間的プロセスのなかで諸要因を探る研究手法を用いています。さらに，博士課程の教育研究にも関わりますが，このような教科専門としての地理学をベースに，教員養成段階における教員としての実践的指導力育成の方途を主に社会科と防災教育の分野で探っています。

## 2. 博士課程における教育研究について

本博士課程では地理学教材研究論ほかを担当しています。研究面では，自らの専門である地理学と社会科教育をフィールドに教科専門と教科教育の架橋に関わる方途を探りながら，教科専門のおもしろさを伝えつつ，いかに教員としての実践的指導力を高められるのかを先達に学びながら，考えるこの頃です。2016年度から，教員養成段階における教科専門と教科教育の架橋に関わる実践史研究を始めたところです。

## 3. 担当講義について

### 【文化資源活用論】

文化資源としての地域資源について，そのとらえ方と地域形成・振興との関わりを愛知県におけるフードツーリズム，ルーラルツーリズムに事例を求めて，自然資源，景観，観光，人材育成などの観点から受講者とともに考え，学んでいます。

### 【地理学教材研究論】

社会科は児童・生徒にとってみれば，身近な生活圏の社会的事象の理解から社会認識をはかる科目と言えます。そこで，本講義では地理学における野外調査の技法を座学とフィールドでの観察などから理解することによって，①「地域」を観る目を養い，②社会科の内容である地域社会の事象をフィールドで理解し，その仕組みを解き明かす能力とともに，③それらを構造的に把握して新たな教材を開発する資質能力の育成を目的としています。

## 4. 主要な研究業績（2015.4～）

- 1) 教員養成における教科専門と教科教育架橋の実践史研究—地理学者，松井貞雄はどのような社会科教員の養成を目指したのか？—。愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻編『教科開発学を創る 第1集』愛知教育大学出版会，2017年3月
- 2) オランダ国境地帯研究ノート—越境する人びとと空間動態の変化を視点に—。地理学報告 118，2016年12月
- 3) 教員養成系大学における防災教育を行う教員としての資質能力育成に関する基礎的研究—大学院生による地域防災副読本『愛知防災物語』作成の試みから—（共著）。日本教育大学協会研究年報第34集，2016年3月
- 4) 教員養成系大学社会科専攻生によるESD地域副読本作成と社会科教科学。愛知教育大学教科学研究会編『教科開発学を創る 第2集』愛知教育大学出版会，2016年3月
- 5) 教材開発 伊藤貴啓・萩原孝・近藤裕幸・真島聖子監修『改訂版 愛知防災物語』（98p），2017年3月

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 平成28年度 愛知県防災教育マニュアル作成委員会（委員長）
- 2) 豊田市史（現代部会）編さん執筆委員
- 3) 平成28年度教員免許状更新講習（総合的な学習の時間における国際理解教育）講師（共同開講）

# 中野 真志



所属 愛知教育大学生生活科教育講座  
職位・学位 教授・博士（文学）  
博士課程分野 人文社会系教科  
担当科目 教科開発学実践論、生活科教育内容論研究、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ  
研究テーマ ジョン・デューイの教育論、生活科及び総合的な学習の理論と実践

## 1. これまでの教育研究について

研究者として、当初、アメリカのカリキュラム理論及び社会科教育について研究していましたが、日本において生活科が誕生して以降、その研究対象を生活科、後に総合的な学習に広げ、カリキュラム理論だけでなく教育方法学及び授業論の観点からも生活科、総合的な学習及び社会科の理論と実践について研究してきました。また、これらの研究とともに、ジョン・デューイの教育論、デューイ実験学校のカリキュラム理論と授業実践も研究しています。

## 2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの研究成果に基づき、教科の内容構成のもととなる親学問が存在しない生活科及び総合的な学習を教えるのに必要な資質・能力とは何か、生活科と総合的な学習における体験と活動をどのように単元構想に位置づけ、それらを知識、技能の習得と活用及び態度の育成にどのように関連づけるのか、生活科と総合的な学習における素材とは何かについてカリキュラム理論、教育方法学および授業論の観点から考察すること、その考察を通して教科とは何かについてともに考えたいと思います。

## 3. 担当講義について

### 【生活科教育内容論研究】

生活科新設までの経緯、誕生した背景と要因について考察し、親学問をもたない生活科という教科の本質と独自性についての理解を深めます。そのために、まず、生活科の目標と内容、年間指導計画、単元構成の基本的な考え方について検討します。次に、生活科と総合的な学習の源流の一つであるデューイ実験学校のカリキュラム理論と教育実践について考察し、現在の生活科のカリキュラム及び授業実践を批判的に分析し、考察する能力の習得を目指します。

## 4. 主要な研究業績（2014.3～）

- 1) 「J. デューイ (John Dewey) のカリキュラム理論と教科観—デューイ実験学校のカリキュラム理論と相補的な歴史と地理を中心に—」『愛知教育大学研究報告』第66輯（教育科学編）2017年3月、pp. 1～8
- 2) 「生活科における深い学び」『初等教育資料』12月号、東洋館出版、2016年12月、pp. 60～63
- 3) 「デューイ実験学校における探究的・協同的学習」『愛知教育大学研究報告』第65輯（教育科学編）2016年3月、pp. 1～8
- 4) 『デューイ実験学校における統合的カリキュラム開発の研究』風間書房、2016年2月
- 5) 「生活科の特質と教材（学習対象）のとらえ方—学習対象の特性を踏まえた授業展開の工夫—」『学校教育』2016年1月号（広島大学附属小学校 学校教育研究会）、22～19頁
- 6) 『改訂版 探究的・協同的な学びをつくる—生活科・総合的学習の理論と実践—』三恵社（加藤智との共編著）、2015年10月
- 7) 「『総合的な学習の時間』の現代的諸課題への対応」『せいかつ&そうごう』第21号（藤本勇二、永田忠道との共著）2014年3月、pp. 44～53
- 8) 「ジョン・デューイ (John Dewey) の教師教育構想—『教育の理論と実践の関係』(The Relation of Theory to Practice in Education)」『愛知教育大学研究報告』第63輯（教育科学編）2014年3月 pp. 21-28

## 5. 主要な社会活動業績（2017年3月）

- 1) 日本生活科・総合的学習教育学会 常任理事（2002年度～現在）
- 2) 国立教育政策研究所「スタートカリキュラム実践事例集の作成に関する協力者会議」委員（2015年5月～2016年3月）
- 3) 愛知県教育センター10年経験者研修（教科指導研修）小学校生活科 講師（2004年度～現在）

# 中 田 敏 夫



所属 愛知教育大学理事・副学長  
職位・学位 教授 文学修士  
博士課程分野 人文社会系教科学  
担当科目 多言語多文化教材論研究  
研究テーマ 多言語多文化社会の言語教育論、社会言語学

## 1. これまでの教育研究について

私の研究は大きく3点に分かれる。1つは学部・大学院時代に調査研究をした日本国内の方言研究である。ここでは構造主義的な記述研究を学び、現在は学校方言と言われるものの研究を進め、明治時代導入された学校教育制度との関係で考察を進めている。2つ目は植民地時代における台湾の国語教育研究である。ここでは主に台湾で行われた初期の言語政策を分析している。3つ目は、外国人児童生徒のための国語教材開発である。これはリライト教材の作成を中心に外国人児童生徒が国語習得上のような点で困難な点があるのかを見極めながら教材化を図っている。これら3点は別個な立場から研究を進めてきたが、言語を狭く言語内の問題として捉えるのではなく、社会や文化、言語政策などとの関係で捉えるという点で共通し、教育の問題と重なってくる研究課題となっている。

## 2. 博士課程における教育研究について

愛知県並びに静岡県は外国人児童生徒が全国でも多く居住する地域であり、小学校の半数の児童が外国人というような小学校も存在する。ここでの教科を含めた指導は教員にとって大きな課題である。外国人児童生徒は日本語がただ単にうまくなり日本に同化すればよいのか、将来教員となる学生はどのようなアイデンティティの問題などを考える必要があり、今後進みゆく多言語多文化社会における教員の役割・責任を共に考えたい。特に「異化」という考えを用いた実践を加えていくことで、対象の本質に迫りたいと考えている。

## 3. 担当講義について

### 【多言語多文化教材論研究】

以下の授業内容で実施した。

- 1) 多文化共生社会を迎えた学校が持つ言語教育の課題と、新たな言語教育の可能性を説く。
- 2) 言語の持つ体系性・構造的な特徴を再確認すると共に、言語を社会／文化／歴史／制度などとの関わりの中で捉え、母語・国家小河国語の関係を考える。
- 3) 言語習得（一次的なことば・二次的なことば）、言語創造（論理的な文・感性的な文）の課題を確認し、これからの言語教育のあり方を総合的に議論する。
- 4) 具体的な言語教材（語彙・オノマトペ）を実践的に取り上げ、教材化まで射程に入れていく。

## 4. 主要な研究業績

- 1) 2013年「折井英治の児童向け科学普及教育」愛知教育大学教育創造開発機構紀要第3号（共著）
- 2) 2014年「愛知県一宮市における「屋運」の分布」愛知教育大学研究報告人文科学 第63集
- 3) 2015年『台湾口述歴史研究 第9集』台湾オーラルヒストリー研究会編
- 4) 2015年「外国にルーツのある子どもと学び拓げることばの世界」日本語学 2015年10月号（明治書院）

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 平成26年度愛知教育大学公開講座講師「明治を知ろう」（2015. 6）

# 丹 藤 博 文



所属 愛知教育大学教育学部国語教育講座  
職位・学位 教育学修士  
博士課程分野 人文社会系教科学  
博士課程担当科目 教科開発学原論・文化資源活用論・国語科教育教材論研究  
研究テーマ 国語科教育・文学教育・言語論・物語研究（語り分析）

## 1. これまでの教育・研究について

ソシュールやウィトゲンシュタイン以降の言語論、記号論や構造主義による文学理論をベースとして、あるいは戦後文学教育の理論と歴史をふまえつつ、国語教科書に掲載される文学教材の読みについて研究しています。近年は、物語論（ナラトロジー）・フランスの国語教科書を研究することで、語りを日本の文学教育に導入すべく指導過程を提案し、実践的な有効性を検討しています。

## 2. 博士課程における教育・研究について

高度情報化社会といわれ、子どもたちにもスマホが普及する中で、子どものリテラシーをどう育てていくか、文学的なテキストの果たすべき役割とは何かといったことを明らかにしていきたいと考えています。学校においても、電子黒板や端末が導入されようとしています。メディア社会における文学の教育的な意味と役割を追究することが課題です。

## 3. 担当講義について

### 【教科開発学原論】

言語論的転回以降、世界は言語化されているという認識によって、さまざまな学問・研究が展開しています。しかし、教科教育においては、学習指導要領から教科書まで、言語論的転回以前の用具主義的言語観のままです。具体的な教材を対象としつつ、教科開発学のベースとしての言語観について考えて行きたいと思います。

### 【文化資源活用論】

国定教科書以来の国語教科書の変遷と歴史的役割ふまえたうえで、現行の小学校・中学校国語教科書を比較検討することで、教科書というメディアの課題と可能性を探っていきます。

### 【国語科教育教材論研究】

言語論的転回・文学理論について概説したうえで、小学校・中学校・高等学校の国語教科書に掲載される文学テキストについて、文学研究および文学教育における先行研究を参照しつつ、教材としての読みや価値を探求していきます。

## 4. 主要な研究業績（2014.4 ～）

### 1) 著書

〈単著〉『文学教育の転回』（教育出版、2014）

〈共著〉『教科教育学シリーズ01 国語科教育』（一藝社 2015）、『国語科重要用語事典』（明治図書 2015）

### 2) 論文

『大造爺さんと雁』が語ること『日本文学』(No. 735 日本文学協会 2014)、「〈語り〉がひらく読みの地平」

『月刊国語教育研究』(No. 514 日本国語教育学会 2015)、「教室で読むための語り分析」『国語国文学報』(第

73集 愛知教育大学国語国文学研究室 2015)、「連載・語り講座① なぜ〈語り〉なのか」『道標』(Vol. 33

教育出版 2016)、「『情報化／消費化社会』における文学と教育」『国語の授業』(No. 257 児童言語研究会

2016)、『平成26～28年度 科学研究費補助金・基盤研究(C) 研究成果報告書 国語科の授業における〈語り〉

分析の有効性に関する実証的研究 課題番号26381195』(2017)

## 5. 主要な社会活動業績

### 1) 全国大学国語教育学会理事、日本文学協会委員、日本読書学会理事

国語教科書編集委員（『ひろがる言葉 小学国語1年～6年』教育出版、『伝え合う言葉 中学国語1年～3年』教育出版）

### 2) 全国高等学校国語教育連合会第46回愛知大会指導助言、日本国語教育学会第40回西日本集会指導助言、東京学芸大学国語教育学会平成27年度研究大会指導講評、青森県南地方国語教育研究会講演、教研集会愛知大会指導助言、岡崎市教育研究大会指導助言、名古屋市・岡崎市他現職研修講師、名古屋国語教育研究会講演、岡崎市授業力アップセミナー講師、西尾市教育研究会講演、瀬戸国語研究会講演、日進国語科サークル講演、安城市新美南吉絵本大賞審査委員、愛知教育大学附属名古屋中学校教育研究発表大会指導助言、西三河高等学校国語教育研究会講演

# 岩 山 勉



所属 愛知教育大学教育学部理科教育講座  
職位・学位 教授・博士（理学）  
博士課程分野 自然系教科学  
担当科目 科学技術活用論、物理教材論研究、教科開発学セミナー  
研究テーマ 理科におけるものづくり教育、物理教材開発、半導体物理学

## 1. これまでの教育研究について

量子ビーム（イオン・レーザービーム等）を用いた半導体ナノ結晶の作製とその物性評価を中心とした研究を行っている。半導体物質を微細化することにより、固体の物性と著しく異なる半導体ナノ結晶特有な物性の発現が期待される。これは、量子サイズ効果や表面効果などによるものである。現在は、イオンビーム（イオン注入法）、レーザービーム（レーザーアブレーション法）、エキシマUVランプ、近赤外線ランプ、電子線等を用いることにより、微細構造の制御された半導体ナノ結晶、機能性薄膜を作製し、その物性の評価、さらには、その光電子機能デバイスとしての応用の可能性探索を行っている。

## 2. 博士課程における教育研究について

子どもたちの「理科離れ」が様々な場で叫ばれており、対応が急務となっている。これは、教育現場で「なぜ理科を学ぶ必要があるのか」という素朴な疑問に明確に答えていないことに原因の一端があるものと思われる。現実的には、科学技術の発展とともにブラックボックス化され、専門家以外はその原理を知らず、単にユーザとしてその恩恵を受けるのみの場合が多い。本課程では、これまでの自身の研究を基盤として、先端科学技術の原理をいかに簡素化・モデル化し、教育現場に定着させていけるのかという課題に取り組みたいと考えている。さらに、先端科学技術を活用した教材開発にも取り組みたい。

## 3. 担当講義について

### 【科学技術活用論】

初等・中等教育における理科の具体的な内容について、最新の科学研究の成果をふまえ、教科内容における広範な専門的知識の重要性の認識とその理解を深める授業を行う。博士課程における、共通的な科目であり、非専門の方も多く履修することを考慮し、基礎から、専門的知識、先端科学技術を導入し、それを活かしながら、新たな理科（物理）教材を開発する意義や方法、その面白さについて学ぶ。

### 【物理教材論研究】

身の回りの物理現象や先端科学技術を概説しつつ、教材開発力を養い、その授業での活用法を検討する。特に、学習への動機付けや日常生活との関わりから、理科を学ぶ意義や目的、楽しさを伝える工夫として従来型の理科教材ではなく、先端科学技術を利用した「日常生活」と「理科学習」をつなげる新規の教材開発研究を行い、その有用性を検討する。

## 4. 主要な研究業績（2014.4 ～）

- 1) 「愛知教育大学における科学・ものづくり教育推進のための取り組み」  
愛知教育大学教育創造開発機構紀要、Vol 4, p.165-172 (2014).
- 2) 「理科研究（物理分野）」  
愛知教育大学出版会 編・著 (2014).
- 3) Luminescent Si nanocrystals synthesized by Si ion implantation and reactive pulsed laser deposition: the effects of RTA, excimer-UV and e-beam irradiation., International Journal of Chemical, Molecular, Nuclear, Materials and Metallurgical Engineering Vol:9, p.749-753 (2015).

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 刈谷市理数大好き推進協議会理事（刈谷市教育委員会）
- 2) 刈谷市立住吉小学校学校評議員
- 3) 愛知教育大学公開講座講師「先端科学技術と日常生活の関わり」
- 4) 教員免許状講習講師「小学校理科（電流の働き、電気の利用単元）」

# 稲毛 正彦



所属 愛知教育大学教育学部理科教育講座  
職位・学位 教授・理学博士  
博士課程分野 自然系教科学  
担当科目 科学技術活用論、理科教育内容論 教科開発学セミナー  
研究テーマ 環境科学分野での教科開発、無機化学

## 1. これまでの教育研究について

学部および大学院において無機化学担当教員として教育研究に携わっています。主な研究テーマは金属イオンの関与する電子移動反応、光化学反応や配位子置換反応などの溶液内反応に関する研究です。金属ポルフィリン錯体などの特異な反応性を示す金属錯体を取り上げ、その動的挙動を各種の分光法を利用して明らかにするとともに、反応機構に関する知見に基づいて特異な反応性の原因を探っています。このような研究においては化学反応の途中で生成する短寿命中間体を直接検出し、その構造や反応性に関する諸性質を理解することが反応機構の解明に大きく寄与します。そのような方針の下で、光化学の研究手法を駆使して、レーザー光励起に伴って生じる不安定化学種の電子構造や反応性の解明をめざして研究を行っています。また、このような反応を利用した人工光合成の研究にも取り組んでいます。

## 2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、近年注目されている地球環境問題を念頭におき、これまで行ってきた無機化学の研究を基盤として環境科学を学校教育にいかにかに定着させるかという課題に取り組みたいと考えています。地球環境と人類社会の持続可能性への展望の提示が現在の学术界に課せられた大きな課題であり、サステナビリティ学の学校教育への展開という観点から博士課程での教育研究に関わっていきたいと考えています。

## 3. 担当講義について

### 【科学技術活用論】

現代文明は最先端の科学的知見に基づいて作り上げられたさまざまな技術に依拠しています。学校教育においてはこのような科学技術を適切に伝授し、その適正な活用に関する理解の増進を図る必要があります。このような観点で、化学の分野における科学技術の活用について解説を行います。

### 【理科教育内容論研究】

近年の世界的な経済発展のために地球環境が悪化の一途を辿っています。学校現場では、次世代を担う人材の養成のために、このような地球環境問題への関心を喚起するとともに、問題を正確に理解し、持続可能な社会の構築のための処方箋を考える必要があります。本授業では環境科学の理解を基盤として、環境科学に関連したカリキュラムの開発の観点から、二酸化炭素の化学や低炭素社会実現を目指した代替エネルギー開発など、持続可能な社会の構築のための戦略の学校教育への展開を検討します。

## 4. 主要な研究業績 (2015年4月以降)

- 1) Flipping of Coordinated Triazine Moiety in Cu(I)-L<sub>2</sub> and Small Electronic Factor,  $\kappa_{el}$ , for Direct Outer-Sphere Cross Reactions: Syntheses, Crystal Structures and Redox Behavior of Copper(II)/(I)-L<sub>2</sub> Complexes (L = 3-(2-pyridyl)-5,6-diphenyl-1,2,4-triazine), A. Yamada *et al.*, *Dalton Trans.* **2015**, *44*, 13979-13990.
- 2) Reaction mechanism of diphenylborinic acid with D-fructose in aqueous solution, Y. Sobue *et al.*, *J. Mol. Liq.* **2016**, *217*, 29-34.
- 3) Detailed Mechanism of the Reaction of Phenylboronic Acid Derivatives with D-Fructose in Aqueous Solution: A Comprehensive Kinetic Study, Y. Suzuki *et al.*, *Chemistry Select* **2016**, *1*, 5141-5151.

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 愛知教育大学公開講座講師「環境科学と日常生活の関わり」(2016.12)
- 2) 刈谷市環境審議会委員

# 飯 島 康 之

所属 愛知教育大学教育学部数学教育講座  
職位・学位 教授 教育学修士  
博士課程分野 自然系教科学  
担当科目 数学教材論研究  
研究テーマ 動的幾何ソフトを中核とした教育用ソフト開発・コンテンツ  
開発・授業研究, 数学教育



## 1. これまでの教育研究について

数学教育学に関する教育・研究を行っています。中核は、Geometric Constructor(GC)という動的幾何ソフト(作図ツール)です。DOS版(1989-), Windows版(1996-), Java版(2000-), html5版(2010-)を開発しました。附属学校の他さまざまな学校と連携して授業研究を行い、動的幾何ソフトが数学教育に及ぼす影響を、教材研究、カリキュラム研究、授業研究など幅広く、理論的かつ実践的に研究しています。

## 2. 博士課程における教育研究について

2010年から開発に着手したGC/html5は、いろいろな意味での先進性を研究する中核になっています。html5+JavaScriptで開発することによって、次世代の教育用ソフトのあり方を具現化しています。複数の点を同時に動かせることなど、操作性と数学的活動との対応づけもできます。4人1組での学習の場で利用することによって言語表現の活性化が期待されます。また附属学校・公立学校の実際の授業で検証し、理論的かつ実践的に明らかにすることに取り組んでいます。

## 3. 担当講義について

### 【数学教材論研究】

数学教育において、数学的問題解決に対して汎用のソフトを開発・利用することで、その改革を目指すさまざまな研究に注目します。ソフト開発、コンテンツ・教材開発、授業研究、認識論的研究などのさまざまな領域において、それらの研究がどのように行われているのかを文献で明らかにするとともに、GCに関する実際のコンテンツ・教材開発や授業研究に接し、理論的かつ実践的に研究します。今年からはSTEM教育の中での数学のあり方も模索してみたいと思っています。

## 4. 主要な研究業績(2014.4 - )

Y. Iijima, Ch. 64 Teaching and Learning Mathematics and communication technology in Japan - the case of Geometric Constructor, Bharath Sriraman et al (eds), The First Sourcebook on Asian Research in Mathematics Education : China, Korea, Singapore, Japan, Malaysia, India (International Sourcebooks in Mathematics Education), 1437 - 1553, 2015

飯島康之, 図形の次元, 写像としての作図における退化次数からみたマルチタッチ作図ツールの特徴 -二つの作図に関する分析を中心に -, 日本科学教育学会研究会研究報告, vol.29, No.9, 93-98, 2015

飯島康之, 作図ツール GC/html5 の開発—HTML5+JavaScriptによる教育用ソフト開発の可能性—, 科学教育研究 vol.39, pp.161-175, 2015

飯島康之, 作図ツールを用いた数学的探究における「暫定的な解決と問題の再設定」-インタラクティブな利用からの「思考力・判断力・表現力」に向けて-, 数学教育論究臨時増刊, 日本数学教育学会, vol.97, 2015, 9-16

飯島康之, 作図ツール GC/html5 を用いた数学的探究における精度・誤差について - インタラクティブな探究に向けて -, 教科開発学論集 4, 111-121, 2016

# 古田 真 司



所属 愛知教育大学教育学部養護教育講座  
職位・学位 教授 博士（医学）  
博士課程分野 創造系教科学  
担当科目 教育評価実証方法論、保健教育内容論研究、  
教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ  
研究テーマ 学校保健、養護教育、保健教育、健康情報リテラシー

## 1. これまでの教育研究について

これまで公衆衛生学、特に学校保健の分野を中心に研究を行ってきました。この分野におけるテーマは、「不定愁訴を持つ児童・生徒に対する教育保健学的研究」です。不定愁訴とは、器質的異常がないのに症状（頭痛やだるさ、腹痛など）が出現することで、学校の保健室に内科的な訴えで来室する児童・生徒の多くがこれに当てはまります。医学的な異常がなくても症状があるのは事実で、そのことを教員（あるいは養護教諭）や子ども自身が理解する手段として、生理学的指標を用いて、学校での対応方法を検討しています。

## 2. 博士課程における教育研究について

学校では日常的に、一般教員や養護教諭によって、児童・生徒の健康を守り健康を育んでいくための授業や指導（保健教育や保健指導）が行われていますが、残念ながら、その内容についてはきちんと吟味されていません。医学や保健の分野では、次々と新しい考え方や発見が発表されています。しかし、これらをそのまま鵜呑みにして安易に行動することはとても危険です。保健分野の様々な情報から、何が正しいかあるいは有用かを見分けて、自らの健康行動に結びつける能力を、私は「健康情報リテラシー」と呼んでいますが、学校現場で、子どもたちにこのような能力を身につけさせる方法を研究しています。

## 3. 担当講義について

### 【教育評価実証方法論】

学校教育における児童・生徒へのさまざまな指導や教育方法について、その妥当性や効果を科学的に検証することは、教科開発の視点からも非常に大切です。ここでは、学校で行われる保健指導や保健教育に対する評価法をとりあげて、その概要を解説します。

### 【保健教育内容論研究】

保健教育には、限られた時間数の中で、子どもたちに生涯にわたって自らの健康を守る能力を身につけさせるという目標があります。そのため、まず保健教育が何をめざすべきかの議論を中心に、文献的な検討を行います。これを踏まえて、それぞれの学校にふさわしい保健教育案を作成する方法について検討していきます。

## 4. 主要な研究業績（2012.4 ～）

- 1) 保健指導で教員に求められる健康情報リテラシー, 東海学校保健研究 36(1).19-28, 2012年9月
- 2) 女子大学生における IBS（過敏性腸症候群）傾向と月経周期に伴う自律神経機能の変化との関連, 愛知教育大学研究報告 62(教).49-56, 2013年3月
- 3) 保健教育における健康情報リテラシーの重要性に関する検討, 教科開発学論集 第1号. 1-12, 2013年6月
- 4) 児童・生徒の合理的な「判断力」育成をめざして構想する保健教育の教科学, 教科学を創る 第1集(愛知教育大学出版会) 125-141, 2013年9月
- 5) 中学生の健康情報リテラシーに関する基礎的検討, 愛知教育大学研究報告 63(教). 65-73, 2014年3月
- 6) 学校全体で取り組む体育・健康に関する指導の長期的影響に関する検証－「はだし教育」を受けた児童の約20年後の調査から－, 教科開発学論集 第2号. 161-169, 2014年3月
- 7) 発達が気掛かりな生徒への支援についての検討－発育グラフを活用した個別支援の実例－, 東海学校保健研究 38(1).89-99 2014年9月
- 8) 文献研究の方法－教育現場における研究のために－, 学校保健研究 57(1). 41-45, 2015年4月
- 9) 中学生の保健分野における批判的思考力に関する基礎的検討, 東海学校保健研究 39(1). 45-57, 2015年9月
- 10) 自己理解を促す保健指導が児童のレジリエンスに与える影響の検討, 愛知教育大学研究報告 65(教).53-59, 2016年3月

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 知立市・市民公開講座「役に立つ医学・健康情報の集め方」
- 2) 附属名古屋中学校教育研究発表会・学校保健情報交換会・指導助言者



# 筒井 清次郎



所属 愛知教育大学教育学部保健体育講座

職位・学位 教授・博士（理学）

博士課程分野 創造系教科学

担当科目 体育教育内容論、教育評価実証方法論、教科開発学セミナーⅠⅡⅢ

研究テーマ 運動技能の習熟過程、運動における動機づけ、幼児の運動能力、誕生季バイアス、リスク感受性と運動方略

## 1. これまでの教育研究について

体育心理学、陸上競技の担当教員として、1) 運動学習における効果的なスケジュールやストラテジー、2) スポーツキャリアを規定する運動有能感、3) 幼児の運動能力を発達させる環境と自己決定感の育成、4) 誕生季バイアスがスポーツキャリアに及ぼす影響、5) 教員志望者の陸上運動の動きに関する認識のズレ、6) 走能力を改善する用具の開発に関する研究を行ってきました。

## 2. 博士課程における教育研究について

運動学習、動機づけ、トレーニングの適時性、幼児運動能力、運動認識、陸上競技の教材開発に関する知見を、体育（特に、授業計画）の教科開発に活かしていくという課題に取り組んでいます。

## 3. 担当授業について

【体育教育内容論】運動技能学習、運動における動機づけ、発育を考慮した体力トレーニング、幼児運動能力

【教育評価実証方法論】 精確な測定、動きの変容の評価、評価の意味するもの

## 4. 主要な研究業績（2013.12～）

- 1) プライオメトリックトレーニングによる長距離走パフォーマンスと鉛直スティフネスの変化  
スポーツ健康科学研究 35:17-26 2013.12（東海体育学会奨励賞受賞）
- 2) 運動学習におけるフィードバック頻度と注意の方向づけに関する経験差 教科開発学論集 2:129-13 2014.3
- 3) 運動上達のメンタリティー、21世紀スポーツ大事典、大修館書店 2015.1
- 4) 運動学習における学習者によるKRの選択的利用の効果 教科開発学論集 3:125-129,2015.3
- 5) 空手のカウンター状況における予測動作の熟練差の検討, スポーツ心理学研究, 42(1):15-22, 2015.3
- 6) Constrained paths based on the Farey sequence in learning to juggle, Human Movement Science, 44:102-110, 2015.8
- 7) 保育者によって観察された基礎的運動パターンと幼児の運動能力との関係, 発育発達研究, 68:1-9, 2015.8  
(発育発達学会優秀研究賞)
- 8) 両手協応動作における同時フィードバックと最終フィードバック効果の比較, スポーツ健康科学研究, 37:29-34, 2016. 1
- 9) ランニングクラブ会員の練習参加動機の変容と価値観, ランニング学研究, ランニング学会, 27(2):65-74, 2016.2
- 10) 400m走後半の支持期における下肢関節のキネティック的特徴, 陸上競技研究, 日本学生陸上競技連合, 104(1):26-35, 2016.3
- 11) Ratio of social characteristics affects motor joint action performance, Journal of Sport & Exercise Psychology, 38(supplement):S90, 2016.6

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 2013-2016 日本スポーツ心理学研究編集委員長
- 2) 2010-2016 日本スポーツ心理学会理事、日本スポーツ心理学研究編集委員
- 3) International Journal of Sport and Health Science、Perceptual and Motor Skills、体育学研究、スポーツ心理学研究、スポーツ教育学研究、陸上競技学会誌、東海保健体育科学などの査読
- 4) 2011. 学術振興会、特別研究員書面審査委員、2012. 学術振興会、特別研究員面接審査委員
- 5) 2013.2014 学術振興会 科学研究費スポーツ科学書面審査委員
- 6) 2016- 東海体育学会理事、副編集委員長
- 7) 2006- 東海学生陸上競技連盟評議員、総務委員長、強化委員
- 8) 2016- 愛知教育大学体育学会会長
- 10) 市スポーツ指導者養成講習会講師 刈谷市、名古屋市、安城市、常滑市、知立市、犬山市、春日市（福岡県）

# 山崎保寿

所属 静岡大学教育学部  
職位・学位 教授 博士（学術）  
博士課程分野 教育環境学  
担当科目 教育プログラム開発論、学校経営論研究、  
教科開発学セミナー  
研究テーマ 学校経営、高校教育、キャリア教育、教師の職能成長



## 1. これまでの教育研究の概要

筆者の研究分野は、学校経営、教育課程、カリキュラム開発などです。これらの研究分野において、教員研修と職能成長、教育課程経営、総合的な学習、キャリア教育などに関するテーマを中心に研究してきました。筆者の研究方法は、文献的・理論的方法に加えて、事例研究、調査研究、多変量解析などの実証的な方法を取り入れてきましたが、新しい研究方法や分析手法についても関心を持っています。最近力を注いでいる研究テーマとしては、教員養成の高度化に関する動向を背景として、教員研修と職能成長に関する研究を中心に進めています。

## 2. 博士課程における教育研究の方向

本博士課程においては、筆者の所属は教育環境学分野であることから、まず、教育環境学に関する理論的基礎を固める必要性を感じています。教育環境学という名称の学問・研究は、従来もある程度は見られましたが、本博士課程では、教科学と教育学とを架橋する研究的役割を担っているところに特徴があります。本博士課程の趣旨を踏まえた教育環境学を打ち立てる必要性があると考えています。

## 3. 担当講義の内容

### 【教育プログラム開発論】

筆者の分担では、教育課程関係の問題を切り口にして教育プログラム開発の問題を扱います。最近のカリキュラム研究の動向を踏まえ、教育環境学の立場から、教科開発の基礎となるカリキュラム経営および教育プログラム開発の考えを扱います。具体的題材として、キャリア教育等を中心として、カリキュラム開発に関わる内容および研究方法などを考究します。また、研究の推進と論文の作成に向けて、先行研究動向レビュー、研究全体の構成、研究手法の選定、分析方法の適切さ等に関する内容も扱います。

### 【学校経営論研究】

学校経営論研究では、次の角度から学校経営の諸問題およびその研究成果にアプローチします。①我が国の教育制度の特徴を把握し教育行政に関する動向を分析します。②教育行政の動向分析を踏まえ、学校経営に関する最近の動向を分析します。③学校経営の中核となる教育課程経営について、最近の研究成果をもとに考察します。④それらを統合しつつ、学校評価、教員養成、教員研修等の角度からさらなる考察を加え、受講者が学校経営に関する研究のデザイン力を高めるようにします。

## 4. 主要な研究業績（2016年度）

- 1) 山崎保寿「新たな時代の高校教育の内実—高校教育改革の動向と研究的展望—」日本学校教育学会編『これからの学校教育を担う教師を目指す—思考力・実践力アップのための基本的な考え方とキーワード—』学事出版、2016年9月、pp. 29-37
- 2) 山崎保寿「『しずおか型コミュニティ・スクール』の趣旨と展開」『季刊教師の広場』No. 189、2016年9月、pp. 8-11
- 3) 山崎保寿・福元英美「スーパーグローバルハイスクールの成果に関する実証的研究—教育方法としてのアクティブ・ラーニングの効果に焦点を当てて—」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』No. 26、2017年3月

## 5. 主要な社会活動業績（2016年度）

- 1) 静岡県立高等学校第三次長期計画検討委員会委員長、掛川市教育委員会評価委員長
- 2) 静岡県スーパーサイエンスハイスクール運営指導委員会委員長
- 3) 日本学校教育学会理事 等

# 村 越 真



所属 静岡大学大学院教育学領域

職位・学位 教授 博士(心理学)

博士課程分野 教育環境学

担当科目 学校危機管理論、教育フィールド調査論、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ

研究テーマ 学校の危機管理、リスク認知、自然主義的意思決定、空間認知、安全教育、

## 1. これまでの研究について

複雑な環境下での人間の認知全般を扱ってきたが、とりわけ空間認知やナビゲーション、地図理解などを主たるテーマとして研究してきた。その中で、地図の理解にも言語理解同様、既有知識に基づく精緻化が行われていることを見いだした(村越、1991、1995; Murakoshi、1990、1994)。また、不確実性が高く複雑な自然環境の中でのナビゲーションでは、その不確実性に対応する方略が環境の特質によらず採用されていることを明らかにした(Murakoshi、1997; 村越、2004)。

2000年以後は、自然環境や学校でのリスク認知とリスクマネジメントスキルを主たるテーマとし、子どもや教員・指導者がどのように危険を認知しているのか、そこにどのような安全確保上の課題があるのか(村越、2004、2006、2008)、どのような教育方法が危険を回避するスキルを育成する上で有効なのかを実践・実験の両面から検討し(2011、2015)た。また、自然体験・アウトドアスポーツにおける活動者の事故の実態、危険認知や対処能力についての研究も行い(村越、2010、2013; 村越ら、2014)、読図・ナビゲーションの認知過程の研究(Murakoshi、2016)と相俟って、成果を山岳遭難対策協議会、全国の登山団体への啓発活動などにも活用してきた。

## 2. 今後の研究の展開と博士課程における教育研究

最近の主要な研究成果としては、①村越真ら(2012)2010年の登山目的による山岳遭難の実態 野外教育研究、16,45-56と、②村越真ら(2014)高所登山は「死と隣り合わせ」か：高所登山家のリスクの捉えとリスク対処方略を明らかにする 『体育学研究』, 59(2),653-671がある。

①では、各都道府県警察本部より収集した山岳遭難の元データにより遭難の実態を明らかにすると同時に、遭難数に影響する要因を疫学的手法によって捉え、事故の要因やプロセスに迫っている。また、登山におけるヒヤリハット調査や登山道のKYT図版による登山者のリスクリテラシーの検討(村越、投稿中)も科研費により実施中である

②では、世界的な高所クライマー7人を対象にしたインタビュー調査によって、一見「死と隣り合わせ」に見える活動を行う登山家が、そのリスクをどう捉え、またどのような方略でリスク対応を行っているかを明らかにした。その結果は「山のリスクと向き合うために：登山のリスクマネジメントの理論と実践」(長岡健一と共著)にまとめた。

現在、高いリスク活動に従事する山岳ガイド、南極観測隊のフィールドアシスタントなどへの聞き取り調査を経て、南極という過酷なフィールドにおけるリスク特定能力の獲得と実態についての調査に発展中である。研究の成果は、リスク社会と呼ばれる現代におけるパーソナルなリスクマネジメントの理論構築とそれを踏まえた研修プログラムの開発につながることを期待される。「教育リスク」(内田、2015)が問題視される現在、教育の世界でのリスクマネジメント方略を確立することも視座に入れている。

# 村 山 功



所属 静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻  
職位・学位 教授 教育学修士  
博士課程分野 教育環境学  
担当科目 教育プログラム開発論、教授工学論研究  
研究テーマ 認知心理学、学習科学

## 1. これまでの教育研究について

これまで、現行学習指導要領と全国学力・学習状況調査に基づく授業改善について、研究や助言を行ってきました。それと並行して、次期学習指導要領に対応した授業づくりについても研究や教育を行ってきましたが、これからはこちらに重点を置くことになります。

また、教職大学院の指導生のアクション・リサーチや共同大学院の指導生の研究との関連で、教師の力量形成における実践的知識の位置づけについての理論的な検討を始めています。いずれ、教科開発学論集で報告するつもりです。

## 2. 博士課程における教育研究について

自分自身の研究テーマも大切ですが、主指導教員・副指導教員を担当している院生の研究テーマが多様なので、今後もしばらくは各院生の研究に丁寧に寄り添っていこうと考えています。

## 3. 担当講義について

### 【教育プログラム開発論】(分担)

博士論文のために教育実践研究を行う必要がある院生に、教育プログラムを開発する際の勘所やノウハウを伝える講義です。私が担当するのは、主として教育方法の側面です。実験群・統制群による比較研究が行いにくい教育実践の場での研究方法が中心になります。(1)教育プログラムの作成・実施・評価のための手法、(2)研究のためのデータ収集・分析のための手法を中心に扱います。

### 【教授工学論研究】

教育を再現可能な現象として捉え、工学的にアプローチする方法を紹介します。分野としては、インストラクショナル・デザイン(ID)に相当します。ただし、IDに関する教科書のほとんどは肝心のインストラクションの部分が不十分なため、この部分を学習科学の知見で補完しています。今後は、評価についても力点を置くつもりです。

## 4. 主要な研究業績(2014.4~)

- 1) 「科学的な問いの生成を支援する理科授業 ―原理・法則に基づく問いの理解に着目して―」, 坂本美紀・山口悦司・村山功・中新沙紀子・山本智一・村津啓太・神山真一・稲垣成哲, 教育心理学研究, Vol. 64, 105-117, 2016/03/30.
- 2) 「概念変化研究からみた教育課程編成の課題 ―理科教育の事例検討―」, 村山功, 静岡大学教育実践総合センター紀要, No. 23, 133-140, 2015/02/27.
- 3) 「科学的原理・法則に基づいた問いの生成を支援する理科授業のデザイン: 科学的原理・法則のメタ理解に着目して」, 中新沙紀子・山口悦司・村山功・坂本美紀・山本智一・神山真一・村津啓太・稲垣成哲, 科学教育研究, Vol. 38, No. 2, 75-83, 2014/06/10.
- 4) 「同僚教師との協働省察と授業実践の繰り返し若手教師の授業力量形成に果たす効果 ―小学校学年部研修に焦点をあてて―」, 小笠原忠幸・石上靖芳・村山功, 日本教師教育学会年報, 14, 13-22, 2014. 2014/04/30.

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 静岡県学力向上推進協議会長
- 2) 日本科学教育学会理事
- 3) 公益社団法人全国学校図書館協議会理事

# 黒川みどり



所属 静岡大学教育学部社会科教育講座  
職位・学位 教授 博士（文学）  
博士課程分野 人文社会系教科学  
担当科目 歴史教材論 教科開発学原論 教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ  
研究テーマ 日本近現代史、思想史、歴史教育、マイノリティ、アジア認識、

## 1. これまでの教育研究について

静岡大学では、日本近現代史、教科内容指導論、日本文化論、人権教育論などの授業を担当してきました。日本近現代史のなかでも、とくに思想史を専門としています。大正デモクラシー研究から出発し、民本主義から出発し無産政党的指導者となった大山郁夫の思想、第一次世界大戦後の国民統合政策、さらには部落問題をレイシズムの枠組みのなかで捉え返す試みや、近現代の差別の諸相を描きだす研究などを行ってきました。近年は、丸山眞男や竹内好を中心にすえて戦後思想史、知識人論に向きあう一方、歴史教育のあり方についても研究を進めています。

## 2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、人権論、思想史について検討を進めています。また、高校日本史の教科書執筆などをおして考えてきた、義務教育・後期中等教育から教員養成大学における歴史教育の問題などを考えていきたいと思えます。

## 3. 担当講義について

【歴史教材論】 歴史教育、社会科教育のありようを見据えながら、歴史の理解のために有用な歴史教材を提供できるように、歴史学の方法論についての理解を深め、歴史学の基礎的な力を身につけることをめざしていきます。当面は、受講者の関心をも鑑みながら、中学・高校の歴史教科書などの検討を行い、議論を深めていきたいと考えています。

## 4. 主要な研究業績（2011.4 ～）

- 1) 『描かれた被差別部落—映画の中の自画像と他者像』、岩波書店、2011年4月。
- 2) 赤澤史朗・北河賢三・黒川みどり編『戦後知識人と民衆観』、影書房、2014年5月。
- 3) 「教員養成の立場から歴史教育を問う」、『歴史評論』第774号、2014年10月。
- 4) 黒川みどり・藤野豊『差別の日本近現代史』、岩波書店、2015年3月。
- 5) 『創られた「人種」—部落差別と人種主義（レイシズム）』、有志舎、2016年3月。
- 6) 寺木伸明・黒川みどり『入門被差別部落の歴史』、解放出版社、2016年5月。
- 7) 「丸山眞男における「開かれた社会」—竹内好との対話をとおして」、『思想』2017年3月。
- 8) 教科書 高校日本史A 高校日本史B （実教出版）（共著）

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 東京大学日独共同大学院シンポジウム「市民社会とマイノリティ」 基調講演（2014.3.14）
- 2) ヒューマンライツ・フェスタ東京2015 講演「部落問題の〈今〉—近現代の歴史をたどりながら」  
東京都総務局人権部 東京国際フォーラム G402（2015.10.8）
- 3) 第8次日韓歴史教科書執筆者会議 「実教出版歴史教科書検定の争点」（2015.11.28）於；東北亜歴史財団 招待講演
- 4) 静岡県のエキスパートが語る『社会人のための人権講座』 2017年3月2日 静岡県人権・地域改善推進会

# 白 畑 知 彦



所属 静岡大学教育学研究科共同教科開発学専攻  
職位・学位 教授 博士(文学)  
博士課程分野 人文・社会学系教科学  
担当科目 教科開発学原論、教育プレゼンテーション論、  
外国語教育論研究、教科開発学セミナー I, II, III  
研究テーマ 言語理論・言語習得理論に基づく外国語教育学の研究

## 1. これまでの教育研究について

大学院生の頃より、ずっと第二言語習得の研究をしてきました。第二言語習得には次のような特色があります：(a)母語からの転移がある（そして、上級者になってもしつこく残るものと、そうでないものがある）、(b)教室で教科書を使用しながら学習する場合であっても、体系的に習得が進んでいく（一方で個人差も生じる）、(c)特に成人学習者の場合、習得が不完全な状態で停滞してしまう場合が多い。このような現象は、日本の教室で、教科書を使用しながら教師が教えるような学習状況下でも起こります。私にとってとても不思議で興味深い現象であり、理論的に説明したいと考えています。つまり、なぜそのような現象が起こるのか、ということも理屈で説明したい、ということです。また、第二言語としての日本語習得研究にも興味があります。その他、習得研究成果の外国語教育への応用、外国語としての英語教授法、外国語学習論、児童英語教育論、外国語学習評価論、英語教育課程論などの領域にも興味を持って研究してきました。

## 2. 博士課程における教育研究について

基本的にはこれまでの研究の方向性と変わりませんが、「外国語教育学における教科開発学とは？」というテーマを常に念頭に置きながら、学生を指導し、自らも研究をおこなっていききたいと考えています。

## 3. 担当講義について

### 【教育プレゼンテーション論】

本講義は澤渡先生と二人で担当している科目です。学会発表でのプレゼンテーション技術だけではなく、教室での授業の工夫、人前で話をする際の態度や心構え、準備の仕方など考察していきます。

### 【外国語教育論研究】

ある教え方が「良い」と主張する場合、その教え方の何が良いのか、本当に効果があるのか、単にユニークな教え方に過ぎず効果は望めないのか、きちんと調べないといいません。そのためにも言語習得理論をしっかりとして学習していきたいものです。

## 4. 主な研究業績

「明示的文法指導、明示的フィードバックが効果的な文法項目とそうでない文法項目一項目別に教え方を変えてみよう」『外国語教育メディア学会 関西支部研究紀要』 2017年3月

The acquisition of English aspects in achievement verbs by Japanese learners of English. 『静岡大学教育学部実践センター紀要』 Vol.26. Shirahata, T., Mochizuki, K., Suda, K., Yokota, H., & Kondo, T. 2017年3月

Difficulty order of fourteen different types of wh-questions in English by Japanese high school students. 『静岡大学教育学部紀要(教科教育学篇)』 Vol.48. Shirahata, T. & Ogawa, S. 2017年3月

The interaction of animacy with the *wh*-extraction by Japanese learners of English. *Proceedings of PacSLRF2016*. Shirahata, T., Suda, K., Kondo, T., Yokota, H. & Ogawa, M. (印刷中)

Knowledge of English prefixes among Japanese adult learners of English. *JACET Bulletin*. 2017年2月 Tamura, T., & Shirahata, T.

The Role of Animacy in the Acquisition of Ergative Verbs by Japanese Learners of English. *ARELE (Annual Review of English Language Education)*, 28. Otaki, A. & Shirahata, T. 2017年3月

# 坂口京子



所属 静岡大学教育学部国語教育講座  
職位・学位 教授・博士（教育学）  
博士課程分野 人文社会系教科学  
担当科目 国語教育論研究、教科開発学実践論  
研究テーマ 国語教育史、言語教育論、国語科授業研究、国語科教師教育

## 1. これまでの教育研究について

専門は国語教育史研究です。特に戦後新教育期における経験主義教育の摂取と実践的理解の過程に着目し、カリキュラムや授業構想について研究してきました。現在の国語・国語科教育に関する教材、指導法、カリキュラム開発に関する研究や、国語科教師教育研究にも取り組んでいます。ここ数年は、昭和20年代の柳田国男監修国語科・社会科教科書を言語力の観点から分析し、現代の先進的实践との共通性を検討してきました。

## 2. 博士課程における教育研究について

以上に述べた教育研究を継続し、現在あるいは今後の国語教育実践を相対化し得る視点を歴史研究から学びつつ、それを常に再構築していくことに取り組んでいます。また、教育の現実を真摯に捉えようとする際、自ずと見えてくる新しい研究領域と研究方法を追究していきたいと考えています。

## 3. 担当講義について

### 【国語教育論研究】

国語・国語科教育について、教育課程・教育内容・教育方法の3点とその関連をどう図っていくかを軸に考察していきます。わが国の戦後国語教育史を概観した上で、現在の実践例を取り上げてその価値を考察します。受講者の関心も鑑みながら、教育実践の複合性とそのデザインについて論じます。

### 【教科開発学実践論】

受講者各自がこれまでの研究および今後の研究構想を教科開発学の視点から捉えて発表し、それをもとに具体的な議論を進めます。教育の現実の捉え、研究領域と研究方法の妥当性、論構築の論理性について論議しつつ、教科開発学の内実と方法を追究します。

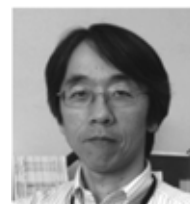
## 4. 主要な研究業績（2014～）

- 1) 『物語文教材研究のヒントー国語の授業作りで悩むあなたへー』編著、静岡学術出版、2017.2
- 2) 「言語力育成における『選択する・再出する行為』—柳田国男監修教科書と現代の先進的实践を架橋する観点から—」静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 NO.23、2015.3、pp.1-10
- 3) 「昭和20年代後期に学ぶ、平成20年代今後の展望—「国語教育史の第三次的研究」からの試行—」国語科教育第77号、全国大学国語教育学会、学芸図書、2015.3、pp.9-11
- 4) 「柳田国男監修『改訂新しい国語』（昭和28・29年）に関する考察：文学的文章指導の実際」静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇45号、2014.3、pp.29-38
- 5) 教科書 小学校国語、中学校国語（学校図書）共著

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 沼津教育振興会国語科小学校部主任者会「国語科におけるカリキュラム・マネジメント」（2017.2）
- 2) 全国大学国語教育学会第127回筑波大会、シンポジウム「国語教育史の第三次的研究」登壇（2015.11）
- 3) 志太教育研究集会講演「豊かな言葉で、確かに伝え合う国語科の授業づくり」（2015.8）
- 4) 日本言語技術教育学会静岡大会シンポジウム「言語技術の見える授業づくり」登壇（2014.3）

# 丹 沢 哲 郎



所属 理事・副学長（教育学部理科教育講座兼任）  
職位・学位 教授・博士（教育学）  
博士課程分野 自然系教科学  
担当科目 理科教育論研究 教育フィールド調査論 教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ  
研究テーマ アメリカ理科教育史、理科カリキュラム論、理科教師教育、理数才能教育

## 1. これまでの教育研究について

私がこれまで携わってきた研究の一つは、1960年代アメリカの科学カリキュラム改革運動時代に設立されたBSCS（Biological Sciences Curriculum Study）が開発してきた理科（生物）カリキュラム研究です。関連して、19世紀末以降のアメリカ理科（生物）教育史の研究も行ってきました。二つ目は、科学的探究と概念変容教授モデルを活用した中学校理科授業研究です。そして三つ目は、これら二つの研究成果を援用した理科教師教育研究です。現在は小中学生に対する理数才能教育プログラム開発も手がけています。

## 2. 博士課程における教育研究について

教科開発学という視点から進めている研究としては、まず遺伝子組換え技術の社会的応用に関する高校生の態度と、彼らの受けた教育との関連を明らかにすることがあげられます。教育環境学的な背景に基づいて、今後の理科（生物）という教科のあり方を検討しています。また、教員免許の高度化に対応して、初年次・二年次の理科教員の現職教育のあり方を、内容的・制度的に地方自治体の教育委員会や教育センターと連携して研究することと、理数才能教育プログラムの開発があげられます。

## 3. 担当講義について

### 【理科教育論研究】

教科内容・教科教育・教育環境の架橋のあり方について、理科カリキュラムを通して理解します。具体的には、理科の目的・目標論、学習内容構造、子どもの自然理解、教授論などについて論じます。

### 【教育フィールド調査論】

学校におけるフィールドワークを行う際に、統計的な資質が院生に求められます。そこで、統計学初心者を見視野に、基礎的な内容を私が、実用的な内容を村越が担当して、静岡大学にて実習を交えた授業を行います。

## 4. 主な研究業績（2012.4～）

- 1) 丹沢哲郎（2012）アメリカにおける科学教育改革の変遷：国家繁栄のために求められる科学の素養とは何か。応用物理 81(10)、pp.831-836
- 2) Izumi Ishiyama, Tetsuro Tanzawa, et. al. (2012) Public Attitudes to the Promotion of Genomic Crop Studies in Japan. Public Understanding of Science 21(4), pp.495-512
- 3) 丹沢哲郎（2013）STS（Science, Technology, and Society）の授業構成。大高泉編著『新しい学びを拓く 理科授業の理論と実践』第5章第4節、ミネルヴァ書房、pp.117-122
- 4) 丹沢哲郎他（2013）統合概念に基づく中学校理科カリキュラム開発と概念形成の評価。静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 21、pp.31-40
- 5) 加賀恵子（2016）中学生の食生活に関する環境配慮行動に影響を及ぼす要因。日本教科教育学会誌 39(1)、pp.21-34
- 6) 日高翼・丹沢哲郎（2016）19世紀アメリカのハイスクールにおける生理学の変遷過程の研究。生物教育 57(1)、pp.12

## 5. 主な社会的活動（現在）

日本エネルギー環境教育学会（理事）、日本生物教育学会（学会誌編集委員）、日本科学教育学会（国際交流委員会委員）、日本理科教育学会（評議員）、他各種審議会・委員等多数



# 小 南 陽 亮



所属 静岡大学教育学部  
職位・学位 教授 理学博士  
博士課程分野 自然系教科学  
担当科目 生物教育内容論研究、教科開発学実践論、教科開発学セミナー  
研究テーマ 身近な自然を活用した生物教材と教育内容の発展

## 1. これまでの教育研究について

生物多様性の劣化は、気候変動と同様に、深刻な地球環境問題として国際的に認識されています。日本においても、生物多様性条約に基づいて、政府は生物多様性国家戦略、自治体は生物多様性地域戦略を策定し、その保全に取り組んでいます。その中で、生物多様性の意味、生物多様性を保全する理由についての教育が不可欠となり、生物多様性にふれる行動、生物多様性を守る行動、生物多様性を伝える行動を体感することが重要となっています。そのためには、理科などの各教科における環境教育を充実させ、児童生徒が生物多様性を含む環境を深く理解した上で環境を守る主体的な行動がとれるようになることが必要です。このようなことを背景として、長年にわたって続けてきた森林生態や生物間相互作用に関する基礎科学的な研究を活かし、生物多様性について学ぶことができる新たな教材の開発と教育内容の発展に資することを目的とした研究を行っています。

## 2. 博士課程における教育研究について

生物多様性の内容を効果的に教育するための新たな教材や指導法を開発する研究のフィールドとして、生物多様性の学習に適した環境のひとつである里山を選びました。この研究では、学校教育において生物多様性を学習するための教材として里山の生物や環境がどのように利用可能であるかを解明し、里山を利用した生物多様性教育の教材を開発することを目指しています。これまでの研究では、次のようなことを明らかにしてきました。

1) 里山において簡易な樹木センサスが作業量や方法の点では学校教育で実施可能なものであり、得られたデータを生徒自身が解析することで、生物多様性とは何か、生物多様性はなぜ劣化しているのか、生物多様性はなぜ保全する必要があるのかを学習することができることを示しました。

2) 学校教育で観察の対象となってきた生物は植物と昆虫がほとんどでしたが、身近な環境に多様な種が生息しているという点では、鳥類も観察したい生物です。そこで、鳥類を確実に観察する方法として、秋冬季に校庭の樹木につく果実を採食する鳥類を観察することを検証し、中学校・高校の探究活動で観察できる可能性が高いことを示しました。また、その観察によって、生態系における相互作用網の一端を知ることができ、生物同士のむすびつきを学習するきっかけになりうることを提言しました。

## 3. 主要な研究業績と活動 (2016.4 ～)

1) 静岡北中学校インセンティブ・レクチャー「森林のダイナミクスを探求する 数十年～数百年の変化をいかに予測するか」(2016.9)

# 熊倉啓之



所属 静岡大学教育学部数学教育講座  
職位・学位 教授 理学修士  
博士課程分野 自然系教科学  
担当科目 数学教育論研究 教科開発学原論  
研究テーマ 教材開発論, 小・中・高接続カリキュラム論

## 1. これまでの教育研究について

静岡大学に着任して以来、算数・数学科教育法等担当教員として、数学教育に関する教材、指導法、カリキュラムの開発に関する研究を行っています。これまでに、数学を学ぶ意義を実感させる指導法、数学的思考力・表現力を育成するための教材開発、小・中・高の接続カリキュラムについて、研究を深めています。また、最近では、PISA 調査で好成績を挙げているフィンランドの数学教育にも関心を持ち、日本の数学教育との国際比較研究を行っています。

## 2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの教育研究で行ってきたことを基盤としながら、さらに、指導の対象である「数学」の本質や歴史を踏まえた上で、近年注目されている数学的リテラシーについて考察を加え、数学的リテラシーを育成するための指導の在り方についても追究していきたいと考えています。

## 3. 担当講義について

### 【数学教育論研究】

本授業では、算数・数学科の指導内容について、1) 小・中・高の算数・数学科のカリキュラム、2) 数学的な思考力・表現力の育成に焦点を当てた教材・指導法、3) 数学を学ぶ意義を実感させる教材・指導法、の3点を中心に分析・考察します。

## 4. 主要な研究業績 (2015. 3 ～)

- 1) 「文字式の計算順序に関する指導－「かけ算記号省略優先」規則に焦点を当てて－：静岡大学教育実践総合センター紀要, No. 25, 2016. 3, pp. 33-42
- 2) 発展的な考え方の育成を重視した中学校数学科における図形の指導：静岡大学教育実践総合センター紀要, No. 25, 平成 28 年 3 月, pp. 43-52
- 3) 大規模な母集団を対象とした標本調査の指導：静岡大学教育実践総合センター紀要, No. 25, 平成 28 年 3 月, pp. 53-62
- 4) 日本とフィンランドの算数・数学教育の比較と研究交流：日本数学教育学会誌, 第 98 巻第 3 号, 平成 28 年 3 月, pp. 12-19
- 5) 数学的活動に基づく数学的帰納法の指導の課題(2)－argumentation と証明の関連性を視点として－：日本数学教育学会第 4 回春期研究大会論文集, 平成 28 年 6 月, pp. 139-146
- 6) 体系的な理解を重視した幾何教育に関する考察－多角形の外角の性質を例にして－：日本数学教育学会第 49 回秋期研究大会発表収録, 平成 28 年 10 月, p. 229-232

## 5. 主要な社会活動業績 (2015. 4～)

- 1) 中央教育審議会専門委員 (初等中等教育分科会) (2015. 11～)
- 2) 学習指導要領の改善に係る検討に必要な専門的作業等協力者 (2016. 4～)
- 3) 日本数学教育学会第 65 回大学入試懇談会全体講演講師 (2016. 5)
- 4) 山形県高等学校数学指導力向上セミナー講師 (2015. 6～2016. 2 の 4 回)
- 5) 大学入試選抜者改革推進委託事業委員会専門委員会委員 (2016. 7～)
- 6) 鳥取県「鳥取発スクラム教育」授業研究会指導助言 (2016. 6, 2016. 10)
- 7) 滋賀県数学科主任指導力向上研修[高等学校]講師 (2015. 7)
- 8) 日本数学教育学会第 98 回全国算数・数学教育研究 (岐阜) 大会講習会講師 (2016. 8)
- 9) 第 71 回関東都県算数・数学教育研究静岡大会・実行委員長 (2016. 8)
- 10) 第 47 回愛知教育大学数学教育研究学会研究大会講演会講師 (2016. 12)

# 澤 渡 千 枝



所属 静岡大学教育学領域家政教育系列  
職位・学位 教授 工学博士・学術博士  
博士課程分野 自然系教科学  
担当科目 自然系教材開発論研究 教育プレゼンテーション論  
教科開発学セミナー I, II, III  
研究テーマ 教科間連携による科学教育法, 環境調和高分子素材

## 1. これまでの教育研究について

プラスチックや繊維高分子などの物質のより良い機能と安全性を求めて、独創性と研究成果の社会への貢献を目標に研究してきました。これまでは、ポリエチレンテレフタレート (PET) やポリエチレン (PE) が熱や外力によってどのような構造変化をするか調べ、分子鎖の束を並べたり、橋架けをししたりしてその性質を改良してきました。近年はこれらの知見や成果を、天然高分子やバイオポリマーの研究にも活かし、環境への負荷の軽減化や、持続可能な社会を目指した材料研究も行っています。たとえば、セルロース産生菌の培養とバクテリアセルロースの有効利用、バイオマスプラスチックの改質と利用、合成高分子の改質、これらの素材の複合化などです。

## 2. 博士課程における教育研究について

自然科学系分野を主体に、環境と科学・技術の共生、社会への貢献・還元を念頭において研究を進めています。一般に教科教育は、学校教育現場の教科区分に分かれています。実社会で接する諸事は、各教科の複合状態です。実体験と結びついた経験を通じた学習は実感を伴った理解や探究心に繋がることを踏まえて、本博士課程では、教科間の連携や、複数教科の関連を意識した教育法や教材開発の観点から研究を進めています。家政教育系列に所属していることから、生活を基盤に、社会・自然に視野を広げた研究教育内容です。

## 3. 担当講義について

### 【自然系教材開発論研究】

講義・演習・実験を通して自然系教科の教材開発に取り組むことで、科学への興味関心と生活の質の向上を視野に容れた教育プログラム開発・教材開発力を養うとともに、呈示力・表現力を備えた教員を育てることを目標とした授業です。現代の生活や産業に活かされている科学・技術を概観し、科学・技術の生活への還元、生活の質の向上と環境との共生に資する教科および教科間連携について考えます。さらに討論や実験によって、教材とその教法を検討していく、実践的な要素も含んでいます。

### 【教育プレゼンテーション論】

教育だけでなく研究発表においても、その内容を正確に伝える努力が必要です。「発表内容が質的に優れていること」と「その内容を適切に伝達できる能力」の両方が備わって初めて良い研究が完成したといえます。この授業では、学会での研究発表だけでなく、日常の授業実践をも含む広い意味での「良いプレゼンテーション」について、基礎から応用までを学びます。内外の優れたプレゼンテーションの実例、受講生同士のプレゼンテーション評価を通して、日本語・英語のプレゼン力を養います。白畑知彦先生との共同開講です。

## 4. 主要な研究業績 (2015年4月～)

- 1) 素材の性質を官能的に学べる実験教材の検討 -中学校衣服 (繊維の吸水性・速乾性) の授業実践をとおして-, 教科開発学論集 4, pp. 89-100 (2015)。
- 2) 4.1.3.b しわ特性, pp. 374-375, 牛腸ヒロミ 他編 被服学事典 朝倉書店 (2016.10)。
- 3) 学会発表 12 件 (うち教科/教材開発関連 3 件, 国際会議 2 件。)

## 5. その他

- 1) 特許出願 高分子材料とその製造方法, 特願 2015-148235 (2015.7.28)。

# 新 保 淳



所属 静岡大学大学院教育学領域保健体育系列  
職位・学位 教授 博士（教育学）  
博士課程分野 創造系教科学  
担当科目 体育教育論研究、教科開発学セミナー  
研究テーマ 身体教育論、授業研究論、体育哲学

## 1. これまでの教育研究について

静岡大学に着任以来、体育学担当教員として、中でも身体教育に関連する問題領域において、哲学的及び社会学的視点から研究を行ってきました。具体的には、我々の身体を取り巻く自然・社会環境の変化が、身体教育過程にある子どもの身体にとってどのような影響があり、またそれを受けて学校体育では、どのような理念のもとにどのような実践していくべきかについて、いくつかの視点提示を試みました。最近では、これまでに明らかにした知を教育実践、中でも教員養成・教師教育へと展開するための新たな方法論を探求しつつ、研究を行っています。

## 2. 博士課程における教育研究について

共同教科開発学専攻にかかわって、早7年が過ぎました。特に、本専攻におけるカリキュラム内容の作成を行ってきたという立場から「教科開発学とは？」を問うとともに、この博士課程の「独自性」の探究に取り組んできました。結論から言えば、“これが「教科開発学」だ”とは、未だ確信をもって言い切ることができません。ただ私一人の思い込み以上に、本専攻の構成員全体が集う、「教科開発学セミナー」Ⅰ～Ⅲにおける学生の発表内容とそれに対する教員からの質疑応答を通して、あるいは、博士論文の審査等を通して、「教科開発学」について、そしてまたこの博士課程の「独自性」について、さらに探求を深める必要があると思います。そのためにも、本専攻メンバーである教員と学生の風通しをさらに良くしていく必要があるでしょう。一方で私自身も、本専攻のイメージを固めたり壊したりしつつ、今後の博士課程のさらなる発展に向けて、教育研究ともに関わっていきたくと考えています。

## 3. 担当講義について

### 【体育教育論研究】

「体育科」における不易を求めることによって、これまでの「体育科」の問題点を明らかにするとともに、今後の方向性について講義および討論を行います。また、“21世紀における教育および保健体育像”についても、現状の問題点と現代的課題の克服を目指して、「持続可能な発展」等々をキーワードにしつつ議論を深めたいと考えています。方法論的には、スポーツ科学における「理論」とそれらの体育「実践」への応用における問題点について検討を行うことから、「理論」と「実践」とがどのような原理的課題を孕んでいるのかについて理解を深めたいと考えています。

## 4. 主要な研究業績（2015.4～）

- 1) 米国における Doctor of Education プログラムとの比較から見える共同教科開発学の特性、教科開発学論集、平成28年3月、第4号、(共著：新保 淳、高根信吾、長倉 守、白畑知彦)
- 2) 保健体育科におけるカリキュラム構成の将来的展望について（第四報）、静岡大学教育実践センター紀要、平成28年3月、第24号、(共著：山崎朱音、野津一浩、新保 淳)
- 3) 体育教員における授業実践力の熟達化に寄与する省察の可視化と研修システムの総括と今後の課題、常葉大学保育学部紀要、平成27年3月、第2号、(共著：高根信吾、新保 淳)
- 4) 持続発展教育を視点とした新たな教科体育の展望、静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）、平成29年3月、第48号（共著：新保 淳、大村高広、村田真一）
- 5) 持続可能な発展として捉えるスポーツ生活論の課題、静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）、平成29年3月、第48号、(共著：村田真一、高根信吾、新保 淳)

# 松 永 泰 弘



所属 静岡大学教育学部  
職位・学位 教授 博士（工学）  
博士課程分野 創造系教科学  
担当科目 技術教育内容論 教科開発学セミナーⅠ  
研究テーマ 科学技術 STEAM ものづくり教材開発

## 1. これまでの教育研究について

科学技術ものづくり教材の中でも、機械領域の教材開発を行う。おもな教材として、形状記憶合金エンジン、スターリングエンジン、受動歩行・準受動歩行模型、機械式振子・天賦時計、Automata・Puppetを柱とし、ひもを移動する模型、回転模型、レーザー加工による組み立て式模型などの教材を開発。動作原理を探究しながら、新しい道具に挑戦し、ものづくりに熱中する子どもたちの姿、家族や友達に動作原理を説明しながら製作したものを自慢する子どもたちの姿、ものづくりの継続により、困難に立ち向かう子どもたちの姿が出現するような不思議や驚きを伴う教材開発。教材開発には最新の科学技術の成果を取り入れ、幼小中学校、玩具製造企業、おもちゃ作家、玩具博物館・科学館と協力して行い、運動の理論解析、シミュレーション解析、実験により、製作物が動くための指標を提示。ものづくり教材の実践は、日本と海外の幼小中学校・高校・大学、研究機関と協力して実施。

## 2. 博士課程における教育研究について

Waves/Showers-of-Emotion Theory にもとづく動くおもちゃものづくり教材の開発を行い、開発した教材を用いた授業実践を通して、教材の特徴、子どもの変容を明らかにする。

Fröbel Gifts と対比させ動くおもちゃ Gifts の選定ともものづくり教材としての開発を行う。年齢に適した教材・道具の使用、喪失体験児童に及ぼす影響について検討する。

厚紙レーザー加工による組み立て式模型、組み立て式 Automata・Puppet 教材の開発を行う。

海外でのものづくり教育の在り方を探る。特に、日本にならって6・3・3制に移行したモンゴル、東海4県に労働者が多いブラジル、マリアモンテッソーリのイタリア（ローマ、レッジョ）を対象とする。

## 3. 担当講義について

### 【技術教育内容論】

最先端の科学技術が作り上げられてきた基礎となる技術、特に機械工学分野の技術に学びながら、ものづくり教材の特徴、教材として用いた授業実践の評価について議論する。ものづくり教材の特徴は、教材に含まれる技術、学習内容、授業案に含まれる子どもたちの探究、使用する道具、これまでの実践例などから明らかにする。

## 4. 主要な研究業績

- 1) 松永・土肥・ヤマモト：在日ブラジル人学校における動くおもちゃのものづくり授業支援、静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇、第48号（2017-3）
- 2) 松永・松永倫：小学校理科・図画工作における動くおもちゃものづくり授業実践、静岡大学教育実践総合センター紀要、第25号（2017-3）
- 3) 松永・古田：4足受動歩行模型教材を用いた授業提案と上肢下肢をもつ歩行模型の開発、第7回教科開発学研究会発表論文集、pp.23-30（2017-3）

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 科学技術高校、浜松工業高校、こどもクリエイティブタウン「ま・あ・る」評価委員
- 2) 三瀬谷小学校・三瀬谷保育園（2016.10～2017.2）、由比こども園（2016.7～2016.9）、ESCOLA ALEGRIA DE SABER（2016.6～2016.9）、大津市立平野小学校（2017.1）、掛川市立和田岡小学校（2017.3）授業支援、サイエンスプロジェクト in Fuji 出展（2016.11）、三島北高校出前授業（2016.7）
- 3) 第1回・第2回全国オートマタ作品コンテスト主催（2016.11）
- 4) 日本産業技術教育学会機械分科会 代表（2010.9～現在）

# 小川裕子

所属 静岡大学教育学部  
職位・学位 教授 博士（工学）  
博士課程分野 創造系教科学  
担当科目 教科開発学実践論、家政教育内容論研究  
教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲ  
研究テーマ 住生活学習を中心とした教科開発、家庭科教育



## 1. これまでの教育研究について

静岡大学教育学部において家庭科教育担当教員として、すでに30年近くになります。この間、前半は出身の専門分野である住居学の研究を継続して「高齢者向け住宅・居住施設の計画に関する基礎的研究」という博士論文をまとめつつ、家庭科教育の教育・研究を進めました。後半では、「高齢者居住」研究を発展させて福祉教育や家庭科教育の研究に繋げようと試みましたが、思うようには進みませんでした。しかし、この間に家庭科教育に関する卒業研究や修士論文に取り組む学生達の興味・関心に寄り添いつつ、また、周囲の家庭科教育研究者との共同研究を進めながら、自らの今後・定年までの教育・研究をどう進めるか考え、2で述べるように課題を設定しました。

## 2. 現在の教育・研究について

家庭科教育における住生活学習について追究したいと考えています。衣食住と並び称されているにも関わらず、（マイホームを建設したり購入する際を除くと）人々の日常的な住生活への関心は高くないのが今日の我が国の大方の姿です。他方で、住まいは私たちの生活の基盤であり、生活の豊かさを決定する大きな要因の一つですが、住生活学習の実践や研究は、家庭科教育の中でも大変遅れているのが現状です。今後、家庭科における食や衣の教材や授業実践の豊富な蓄積を踏まえつつも、さらに本研究科で学べる学習科学の知見についても積極的に取り入れながら、家庭科の住生活学習を中心とした教育・研究に取り組んでいきたいと考えています。

## 3. 担当講義について

### 【家政教育内容論研究】

科学・技術の発達に伴い、私達の生活はある意味で大変便利になりました。いつでもどこでも溢れる「もの」に囲まれ、特に時間や労力を費やすことなく日常生活を送ることができます。その反面で、家族など自分以外の「人」に頼ったり頼られたりする必要もなくなり、家族構成を見ると単身世帯が最も高い割合を占めるといった現実があります。また、家庭生活の中で次世代へ生活文化を伝承していく機会も減少した現在、学校教育の中で、生活する力、「生きる力」を育てることは重要な課題であると考えます。本授業ではそのための教科内容を中心とした家庭科カリキュラムについて検討していきたいと思えます。

## 4. 主要な研究業績（2016.1～）

- 1) 小川裕子「批判的思考力を育む住生活学習の提案」、日本家政学会誌、第67巻 第1号、2016年1月、pp.37-44
- 2) 新田米子、志水暎子、小川裕子、神川康子「親子間の居住距離が生活安心感・居住満足度に及ぼす影響：中部・北陸地方における親子の居住形態の動向（その1）」、岐阜聖徳学園短期大学部紀要、2016年2月、pp.59-72
- 3) 吉本敏子、小川裕子、星野洋美、室 雅子、安場規子、吉岡良江、吉原崇恵「生活場面で実践できる力の実態と課題—家族・家庭生活学習との関連—」、三重大学教育学部研究紀要 第67巻、教育学、2016年3月、pp.1-10

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 日本家庭科教育学会、理事、編集委員
- 2) 静岡県私学審議会委員、
- 3) NPO法人なのはな（幼児教育）理事
- 4) 平成28年度静岡県住宅政策懇話会委員

# 北山 敦康



所属 静岡大学教育学部音楽教育講座  
職位・学位 教授・芸術学修士  
博士課程分野 創造系教科  
担当科目 音楽教育論研究、表現・鑑賞論、教科開発学セミナー  
研究テーマ 授業デザイン、ソルミゼーション研究

## 1. これまでの教育研究について

もともとはサクソフォン音楽とその演奏の研究からスタートし、器楽学習におけるスキルの獲得を中心としたメソッド研究を行っていましたが、1997年にドン・G・キャンベル(1947-2012)の*Introduction to the Musical Brain*の翻訳出版(『音楽脳入門～脳と音楽教育～』、北山敦康訳、音楽之友社、1997)を契機に「感覚教育としての音楽科」の理論と実践の研究をするようになりました。とくに最近では、音楽科教育がたんに音楽のための教育ではなく、学びの基盤として機能する価値判断の思考プロセスを形成するための教科となることをめざして研究しています。

## 2. 博士課程における教育研究について

本専攻は、教員養成系大学・学部において教員の養成と教科開発学の構築を行うことのできる人材の養成をめざしています。これまで、学校音楽教育に携わる専門家の養成は演奏を中心とした教育に重きが置かれてきた感があります。とくに近年は、音楽科の授業時間数の削減と学校行事指向の音楽指導によって、さらにその傾向に拍車がかかっているように思います。本来、音楽科も他の教科と同じように教科の学習を通じて児童・生徒の統合的な学びを形成するものであると考えます。本専攻の音楽教育研究においては、学習の対象としての音楽の教科内容をふまえたうえで、その成果を教育環境学と架橋できる人材の育成に努めたいと思います。

## 3. 担当講義について

### 【音楽教育論研究】

上記のような教育研究者を育成するために、これまでの教育実践の成果をふまえたうえで、それらを教育環境学の視点で再評価し、音楽の学習が総合的な学びのなかでどのように機能しているかを検証します。そうした具体的な検証をすすめながら、これからの時代に適応した方法論をもって、子どもの価値形成に有効な成果を得られる音楽教育のメソッド開発をめざします。

### 【表現・鑑賞論】

本専攻の創造系はもちろん、それ以外の研究分野に籍を置いて教科開発学の研究をすすめる学生のために、音楽教育の視点から学びの方法とそのあり方についての議論を行います。この講義は、美術教育の担当教員と連携して、芸術教育としての立場を堅持しながら、教育環境学における幅広い領域との関連を重要視したいと思っています。

## 4. 主要な研究業績(2013.4～)

- 1) 『北山敦康サクソフォンリサイタル』(静岡音楽館A0I) 2013年3月3日
- 2) 『音楽は愉し!これを聴けばあなたも音楽通』サクソフォンと箏の二重奏(sax.北山敦康/koto.長谷川慎) 千秋次郎:『巷歌拾遺』、他2曲 2013年12月4日 静岡音楽館A0Iホール(静岡市)
- 3) 『サクソフォン奏者のための高音奏法(第2版)』(翻訳) Saxophone High Tones, Second Edition by Eugene Rousseau) Étoile Music - MMB 2015年3月
- 4) 『高等学校学習指導要領実施上の課題とその改善(音楽)』中等教育資料(学事出版) 2015年8月 pp.22-27
- 5) 「第3章:管楽器による音楽表現のための技法~第1節:サクソフォンから見た『音・音楽』の様相」『音楽表現のフィールド2』(日本音楽表現学会編) pp.48-56 2016年9月(東京堂出版)

## 5. 主要な社会活動業績(2013.4～)

- 1) 静岡県教育総合センター「静岡県の授業づくりの指針」活用推進委員会音楽科指導者(2014年5月~2015年3月)
- 2) 静岡県高等学校総合文化祭・静岡県高等学校文化連盟日本音楽専門部発表会講師(2013年、2014年、2015年)
- 3) 新潟県幼児音楽合奏大会講師(2013年1月、2014年1月、2015年1月、2015年1月、2016年1月、2017年1月)

# 伊藤文彦

所属 静岡大学教育学部  
職位・学位 教授 学術修士  
博士課程分野 創造系教科学  
担当科目 表現・鑑賞論 美術教材論研究 教科開発学セミナー I  
研究テーマ 美術・デザイン教育方法開発、デザインリテラシー教育論



## 1. これまでの教育研究について

美術教育の中でもデザイン分野を専門として、デザインの発想法を中心にデザインプロセス全般を対象に研究を行っています。また、創造系の教科の指導者として求められる表現力の研鑽のために、ビジュアルデザインを中心に公的な場面で様々なデザインワークを展開しています。

現代環境において、デザインの領域は多岐に渡っており、コミュニケーション、プロダクト、環境デザイン等、現代の私たちの生活とは切り離せない深い関わりをもっています。しかしながらこれまでの美術教育では自己表現や感性などの伝統的な概念を重んじられてきたあまり、美術教育が社会への適合性といった点についてはかならずしも有効な教育になりえていなかったことが問題点としてあげられます。こうした問題意識を背景に、より今日の役割を明確にした横断的な学問としてのデザイン教育を構想するための研究を行っています。

## 2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまで行ってきたデザインプロセスの構造化およびデザインリテラシー研究を基盤として美術・図画工作科教育の諸問題を明確化し、今後重要度が増してくる表現と鑑賞教育のバランスのとれた芸術教育を学校教育にいかにか定着させるかという課題に取り組みたいと考えています。その際、これまで芸術における感性の問題としてブラックボックス化されてきた部分について、認知科学の知見を援用しながらモデル化することを通して、他の教科との接点を見出しながら、学際的な教科としての美術・デザイン教育を展望するという観点から博士課程での教育研究に関わっていきたいと考えています。

## 3. 担当講義について

### 【表現・鑑賞論】

芸術を表現することとそれを鑑賞することは表裏一体の関係であり、常に同時発生的に進行する創造性豊かな思考過程である。この授業では、そういった表現と鑑賞の思考過程を芸術学と認知科学を融合させた学際的な観点で整理し、芸術教育のありかたについて考察するものである。

特に美術・デザインの「リテラシー」について、具体的な作品・製品を鑑賞対象とし、ワークシート作業を含めた実践的な演習を含めて理解を深める。

### 【美術教材論研究】

美術・デザイン活動及びその教育について、今日の問題状況や新たな展開について展望する。特に、美術・デザインのもつ特性とその教育の価値について、コミュニケーションやそのリテラシーといった情報概念を軸に考察し、それを応用した教材開発について探求する。

## 4. 主要な研究業績 (2016.4～)

- 1) 『デザイン知の射程』「アートエデュケーション思考」所収、宮脇理監修・伊藤文彦他編著、学術研究出版/ブックウェイ、2016年9月
- 2) 『Project-Based-Learning 的視点からのデザイン・プロセス経験のための産学連携プロジェクト』、静岡大学教育実践総合センター紀要、櫻田采沙、伊藤文彦、2017年3月
- 3) 『「杉山明博 造形の世界展」ポスター他デザイン』、佐野美術館、2016年8月
- 4) 『「お茶のまち静岡市」ラッピングタクシーデザイン/シエント版』、静岡市、2016年11月

## 5. 主要な社会活動業績

- 1) 静岡市 茶どころ日本一委員会委員長 静岡市農業政策課 (2016年4月～2018年3月)
- 2) ワルシャワ工科大学建築学部+ワルシャワ芸術大学+静岡大学教育学部『古民家調査とデザインの未来』共同ワークショップ (2016年8月～2017年3月)



# 紅 林 秀 治



所属 静岡大学大学院教育学領域 技術教育系列  
職位・学位 教授 博士 (学校教育学)  
博士課程分野 創造系教科学  
担当科目 技術教育教材論研究 教科開発学実践論  
研究テーマ 技術教育 設計教育 教材開発論

## 1. これまでの教育研究について

静岡大学に着任して以来、技術科教育法等担当教員として、技術科教育に関する教材、指導法、カリキュラムの開発に関する研究を行っています。これまでに、技術を学ぶ意義を実感させる指導法、設計に関わる思考力やシステム概念の形成過程・に関する研究を深めています。

## 2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの教育研究で行ってきたことを基盤としながら、さらに、普通教育としての技術教育の本質や歴史を踏まえた上で、技術リテラシーについて考察します。また、設計力を高めるための指導や教材の在り方についても追究していきたいと考えています。

## 3. 担当講義について

### 【技術教育教材論研究】

本講義では、普通教育としての技術教育と専門教育としての技術教育の違いを整理してから、技術教育では欠かすことができない概念である設計について考察する。さらに、設計能力を高めるための教材や教育方法について検討します。検討にあたっては、実際に教材を設計したり製作したりします。

## 4. 主要な研究業績 (2014.4 ～)

- (1) 設計を中核とした技術教育の提案, 教科開発学論集, 第3号, 2015年, pp.151-158
- (2) KINECTを用いた動作分析, 臨床リハ Vol.24No.1, 2015年, pp.78-84,
- (3) 状態遷移図を利用したプログラムによる計測・制御教材の開発, 日本産業技術教育学会誌, Vol.57(2), 2015年, pp.93-101, 増田麻人・大村基将・片田宗一郎・紅林秀治
- (4) 無線通信技術を利用した簡易クリッカーの教育効果, 日本産業技術教育学会誌, Vol.57(3), 2015年, pp.163-169, 江口啓・安部寛二・河野裕太・新家和樹・紅林秀治
- (5) 技術教育の内容と技術的素養についての工業大学の学生に関する調査研究, 電気学会論文誌 A (基礎・材料・共通部門誌) 2015年, Vol.135 No.11 pp.690-697, DOI:10.1541/ieejfms.135.690, 江口啓・安部寛二・藤本邦昭・紅林秀治
- (6) 創造的な計測・制御学習のためのプログラミング環境と授業モデル, 日本産業技術教育学会誌 Vol.57(4), 2015年, pp.223-230, 青木浩幸・西ヶ谷浩史・紅林秀治・田口浩継・李 元揆
- (7) ZigBee 無線通信を利用した自作クリッカーの開発電気学会論文誌 A (基礎・材料・共通部門誌) 2015年, Vol.135 No.11 pp.688-689, 江口啓・安部寛二・紅林秀治
- (8) ものづくりをシステムづくりと捉え直す技術教育の検討, 教科開発学論集 第4号 2016年, pp.143-150

## 5. 主要な社会活動業績 (2014.4～)

- |                                 |             |
|---------------------------------|-------------|
| (1) 藤枝市教育研究会 講師                 | 2005年～2016年 |
| (2) 焼津市教育研究会 講師                 | 2005年～2016年 |
| (3) 島田市教育研究会 講師                 | 2005年～2016年 |
| (4) 静岡県教育研究会 技術・家庭研究部 静岡県大会 講師  | 2005年～2016年 |
| (5) 浜松市教育研究会 講師                 | 2005年～2016年 |
| (6) 静岡県教職員組合 教育研究集会 技術科教育分科会 講師 | 2009年～2016年 |
| (7) 藤枝市ロボットアカデミー 講師             | 2015年～2017年 |

# 杉山 康 司



所属 静岡大学教育学部保健体育講座  
職位・学位 教授 博士（スポーツ健康科学）  
博士課程分野 創造系教科学  
担当科目 教科開発学原論、体育・課外活動教材論研究  
研究テーマ 運動生理学、体力科学、トレーニング科学

## 1. これまでの教育研究について

保健体育の教科専門である運動生理学をメインに体力科学的、スポーツ科学的な研究を行っています。特に人が行う各種運動およびスポーツについてエネルギー消費量の経済性や骨格筋活動について評価し、その結果を基に運動指導に向けたプログラムや指針について検討しています。対象者は乳幼児から高齢者まで幅広くテーマを持ちつつ活動しております。

## 2. 博士課程における教育研究について

これまで、保健体育の教科としてだけではなく生涯にわたるスポーツ教育に目を向けて研究を行ってきました。特に運動生理学は客観的データの分析を主とした自然科学系の分野であり、教科教育学のように学校教育における授業そのものの方法について柔軟に知見を纏め上げていくフィールドとは異なっています。しかし、教科教育の背景には教科専門の知見を欠かすことはできません。博士課程では保健体育の教科専門と教科教育の一体化と連携を目指した教育研究に挑戦したいと考えています。

## 3. 担当講義について

### 【教科開発学原論】

さまざまな教科で教科専門と教科教育についてどのような連携があるのかななどを模索し、教科開発学専攻での学位の特色と人材育成に向けた討論をしたいと考えています。私の担当する時限では保健体育の授業現場において教師が理解しておかなければならない専門的な研究成果について紹介しながら、他教科との共通点や相違点、他教科の教師（初等、中等教育教員）も知るべき保健体育の知識について考えてみたいと思います。

### 【体育・課外活動教材論研究】

教科開発学原論において一部紹介した内容をさらに深めた内容にしたいと思います。運動生理学やスポーツ科学という分野で得られてきた研究成果をいくつかのトピックスに分類し、実際の研究データに触れながら論文抄読し、常に学校教育に応用する立場で討論してみたいと思います。保健体育教科専門の一つである運動生理学分野での実験的手法と今後の創造教科学分野での応用について理解を深めたいと考えています。

## 4. 主要な研究業績（2013.4 ～）

「Oxygen uptake, heart rate, perceived exertion, and integrated electromyogram of the lower and upper extremities during level and Nordic walking on a treadmill」: Journal of Physiological Anthropology 2013, 32:2 (13 February 2013), [Sugiyama K](#), et al, 「Relationships between physical fitness and body mass index in 11- and 12- year-old New Zealand and Japanese school children」: 教科開発学論集 2013 1 195-206, [Sugiyama K](#) and Michael J. Hamlin、 「乳幼児抱っこを想定した 10kg 重錘負荷時におけるノルディックウォーキングが脊柱起立筋および外側広筋の EMG パターンに及ぼす影響」: ウォーキング研究, 2015, 18, pp.13-20, [杉山康司](#), 他、など

## 5. 主要な社会活動業績

Sports and Exercise Medicine - Open Journal, Editor-in-Chief 平成 27 年～現在、日本体力医学会会員 昭和 62 年～現在（評議員 平成 14 年 10 月～現在）

# 村上陽子



所属 静岡大学教育学部家政教育講座  
職位・学位 教授 博士 (学術)  
博士課程分野 創造系教育学  
担当科目 教科開発学原論  
研究テーマ 食文化、食品物性学、食品色彩学、家庭科におけるものづくり、教科連携

## 1. これまでの教育研究について

食品学・栄養学・家庭科教育法等の担当教員として、食品学、家庭科教育に関する教材開発、教科連携に関する研究を行っています。食品学については、各種栄養素の成分組成や調理加工による変化、食品のもつ物理特性（硬さ、凝集性、付着性）とともに、これら物理特性が官能特性に及ぼす影響について研究しています。また、和菓子を中心として食品の色彩が嗜好性に及ぼす影響について分析するとともに、経験的に行われてきた調整方法を理論的に分析するなど、我が国の食文化について科学的・文化的な視点から研究を行っています。得られた成果については教材化し、幼稚園をはじめ、小・中・高等学校において実践を行っています。教育分野においては、家庭科におけるものづくりの課題を明らかにしつつ、これからの家庭科におけるものづくりのあり方を提案しています。

## 2. 博士課程における教育研究について

食品における物理的特性や化学的特性、官能特性などを科学的・文化的手法を用いて検討していきます。また、家庭科における食品学・栄養学の意義について、多様な視点から考察できる資質・能力の育成を行っていきたくと考えています。教科連携については、ものづくりを核として教科連携モデルを考案し、授業実践していきたくと考えています。

## 3. 担当講義について

### 【教科開発学原論】

家庭科の指導内容について、①小・中・高等学校の家庭科の学習における課題、②家庭科教育に必要な視点、③家庭科の知識・技能の定着と多角的視点の育成を目指した教材・指導法について分析・考察します。

## 4. 主要な研究業績 (2016)

- 1) 3DCG による拡張現実 (AR) を活用した食育教材開発の試み—盛り付け学習に着目して—、静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇、第 48 号、197-212、村上陽子、富田千秋、紅林秀治 (2017)
- 2) 学校教員養成課程における教科連携による授業実践の試み<sup>10)</sup> —図画工作科・家庭科における連携授業の実践と評価—：授業づくりについて、教育開発学論集、第 4 号、123-133、高橋智子、村上陽子 (2016)
- 3) 学校教員養成課程における教科連携の資質・能力の育成—図画工作科・家庭科における連携授業の試み—、日本教育大学協会研究年報、35 (印刷中)、村上陽子、高橋智子 (2016)
- 4) 設計の学習における最適解を得るまでの思考過程、教育開発学論集、第 5 号 (印刷中)、紅林秀治、村上陽子 (2017)
- 5) 和菓子 (練り切り) を用いた食育教材の開発と実践—高校生と保育園児—、日本家政学会第 68 回大会、村上陽子、藤田沙南 (2016.5)
- 6) グルテンの添加が米飯パンの物理特性に及ぼす影響、日本家政学会第 68 回大会、藤田沙南、村上陽子 (2016.5)
- 7) 大学生におけるリーフ緑茶の摂取状況と嗜好性—茶に関する道具に着目して—、日本調理科学会平成 28 年度大会 (2016.8)
- 8) 大学と附属学校との連携による現職教員の指導力向上に関する研究、日本教科教育学会第 42 回全国大会、村上陽子、高橋智子 (2016.10)

## 5. 主要な社会活動業績 (2016、2017)

- 1) 静岡県教育研究会技術・家庭科教育研究部夏期研究大会 助言者 (2016.8)
- 2) 浜松市小・中学校家庭科研究部研修会 助言者 (2016.11)
- 3) 第 7 回静岡大学教育学部教育研究フォーラム—大学・附属学校園・地域の連携と創造—、「高等部作業学習「静大プロジェクト」の取り組み—静岡大学寮教育学部美術科・家庭科との協働—、増田萌、高橋智子、村上陽子 (2017.1)

## VII. 諸 資 料

※:必修科目、(基):基礎科目、(応):応用科目  
 (環):教育環境系分野科目、(人):人文社会系教科学分野科目  
 (自):自然科学系教科学分野科目、(創):創造系教科学分野科目

(前期:愛知教育大学)

4月2日	4月3日	4月9日	4月10日	4月16日	4月17日	4月23日	4月24日	4月30日	5月1日	5月7日	5月8日	5月14日	5月15日	5月21日	5月22日	5月28日	5月29日	6月4日	6月5日	6月11日	6月12日	6月18日	6月19日	6月25日	6月26日	7月2日	7月3日	7月9日	7月10日	7月16日	7月17日	7月18日	7月23日	7月24日	7月30日	7月31日	8月6日	8月7日	8月13日	8月14日	8月20日	8月21日				
土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	月	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日
A週 基礎科目(7週)									B週 分野科目(開講8週)																		C週 補講および集中授業(3週)																			
1限~4限		合同ガイダンス		※(基)教科開発学原論①(愛知)		※(基)教科開発学原論②(愛知)		※(基)教科開発学原論③(静岡)		(基)文化資源活用論①(愛知)		※(基)教科開発学原論④(静岡)		(基)文化資源活用論②(愛知)		【静大停電】		【静大停電】		(人)野地		(環)子安		(人)伊藤		(環)子安		(人)伊藤		(環)子安		(人)伊藤		(環)子安		愛教大・オープンキャンパス(予定)		静大・オープンキャンパス(予定)		(人)伊藤(注1)		(応)教科開発学セミナーⅢ(静大浜松キャンパス)				

(注1)第4回目は講義のまとめとしてフィールドワークを行うため、日程を変更する場合があります。

(前期:静岡大学)

4月2日	4月3日	4月9日	4月10日	4月16日	4月17日	4月23日	4月24日	4月30日	5月1日	5月7日	5月8日	5月14日	5月15日	5月21日	5月22日	5月28日	5月29日	6月4日	6月5日	6月11日	6月12日	6月18日	6月19日	6月25日	6月26日	7月2日	7月3日	7月9日	7月10日	7月16日	7月17日	7月18日	7月23日	7月24日	7月30日	7月31日	8月6日	8月7日	8月13日	8月14日	8月20日	8月21日				
土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	月	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日
A週 基礎科目(7週)									B週 分野科目(開講8週)																		C週 補講および集中授業(3週)																			
1限~4限		合同ガイダンス		※(基)教科開発学原論①(愛知)		※(基)教科開発学原論②(愛知)		※(基)教科開発学原論③(静岡)		(基)教育プログラム開発論②・(基)教育フィールド調査論①		※(基)教科開発学原論④(静岡)		(基)教育フィールド調査論②		【静大停電】		【静大停電】		(環)村山・益川		(環)村山		(環)益川		(環)村山		(環)村山・益川		(環)益川		(環)村山		(環)益川		愛教大・オープンキャンパス(予定)		静大・オープンキャンパス(予定)		(人)白畑・黒川		(環)教科開発学セミナーⅢ(静大浜松キャンパス)				

注)開講の原則

- ① 授業は原則として1日4コマで開講する(そのため、1単位は2日、2単位は4日間の授業開講が必要である)
- ② 基礎科目はA週またはD週で集中授業として開講する(C週、F週で開講することも可能)
- ③ 分野科目は原則としてB週とE週で開講する(開講する曜日は、土曜日か日曜日のどちらか一方とし、第1週目開始か、第2週目開始を選択する)
- ④ C週とF週は補講期間であるが、基礎科目、あるいは分野科目の集中授業を置くこともできる
- ⑤ 教科開発学セミナーⅠおよびⅡはF週で開講し、セミナーⅢはC週で開講する



平成28年 8月23日

共同教科開発学専攻所属の大学院生の皆さんへ

共同教科開発学専攻 学務委員会

## 共同教科開発学専攻の授業等に関するアンケート（前期）

学務委員会では、大学院生の皆さんを対象に授業等に関するアンケートを実施し、本専攻の今後の改善に生かそうと考えています。ぜひ、ご協力をお願いします。本アンケートは無記名ですが、メールでの添付による返信をお願いしているため、提出の有無が記録される点をご了承下さい。

提出先：愛知教育大学教務課大学院係（渡辺）

提出期限：平成28年 8月31日（水）

なお、集計は事務職員によって行われ、授業を担当する教員が、アンケートに書かれた内容を直接見ることはありませんので、ありのままのご意見をお書き下さい。

### 1. 所属大学について いずれか一方に、○をつけて下さい

( ) 愛知教育大学 ( ) 静岡大学

### 2. 「基礎科目」について

a) 前期に受講した「基礎科目」の名称すべてに○をつけて下さい。

( ) 教科開発学原論 ( ) 文化資源活用論

( ) 教育プログラム開発論 ( ) 教育フィールドワーク（調査）論

※「基礎科目」のいずれも受講しなかった方は、**3**に進んでください。

b) 受講した基礎科目全般に関して、次の1～4の当てはまるものを選んで回答して下さい。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない)

①授業の内容に満足しましたか …………… ( )

②あなたは授業に積極的に取り組みましたか …………… ( )

③シラバスに書かれた目標は達成されたと思いますか …………… ( )

④授業の内容は自分の研究のために役立つと思いますか …………… ( )

c) 基礎科目全般、あるいは基礎科目の個々の授業についてご意見やご要望がありましたら、自由にご記入下さい。

### 3. 「分野科目」について

a) 前期に受講した「分野科目」の分野すべてに○をつけて下さい（C 期間の集中の授業も含む）。

( ) 教育環境学分野科目 ( ) 人文社会系教科学分野科目

( ) 自然系教科学分野科目 ( ) 創造系教科学分野科目

※「分野科目」のいずれも受講しなかった方は、**4**に進んでください。

b) 受講した分野科目全般に関して、次の1～4の当てはまるものを選んで回答して下さい。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない)

①授業の内容に満足しましたか …………… ( )

②あなたは授業に積極的に取り組みましたか …………… ( )

③シラバスに書かれた目標は達成されたと思いますか …………… ( )

④授業の内容は自分の研究のために役立つと思いますか …………… ( )

- c) 分野科目全般、あるいは分野科目の個々の授業についてご意見やご要望がありましたら、自由にご記入下さい。

#### 4. 「応用科目」について

- a) 8月に開講した「教科開発学セミナーⅢ」について、受講あるいは聴講した方でご意見やご要望がありましたら、自由にご記入下さい。

#### 5. 共同大学院の授業全般（カリキュラム）について

- a) 授業全般に関して、次の1～4の当てはまるものを選んで回答して下さい。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない)

- ①受講した授業は、全体として満足できるものでしたか …………… ( )  
②授業時間割は、履修しやすかったですか …………… ( )  
③遠隔システムを使った授業は満足できるものでしたか …………… ( )

- b) 昨年度より変更された授業時間割りの開講枠（設定週）や開講曜日、一日の授業時間数、あるいは遠隔システムなどについてご意見やご要望がありましたら、自由にご記入下さい。

- c) 履修申請の時期や方法、あるいは履修の方法等についてご意見やご要望がありましたら、自由にご記入ください。

#### 6. 共同大学院での研究や授業や学生生活全般について

- a) 研究指導や学位取得に関してご意見やご要望がありましたら、自由にご記入下さい。

- b) 共同大学院での学生生活へのサポートについてご意見やご要望がありましたら、自由にご記入下さい。

- c) その他、本専攻のあり方についてご意見やご要望がありましたら、自由にご記入下さい。

以上です。



平成 29 年 2 月 24 日

共同教科開発学専攻所属の大学院生の皆さんへ

共同教科開発学専攻 学務委員会

## 共同教科開発学専攻の授業等に関するアンケート（後期）

共同教科開発学専攻の学務委員会では、大学院生の皆さんを対象に授業等に関するアンケートを実施し、本専攻の今後の改善に活かそうと考えています。ぜひ、ご協力下さい。本アンケートは無記名ですが、メールでの添付による返信をお願いするため、提出の有無が記録される点をご了承下さい。

提出先： 愛知教育大学教務課大学院係（渡辺）

提出期限： 平成 29 年 3 月 10 日（金）

なお、集計は事務職員によって行われ、授業を担当する教員が、アンケートに書かれた内容を直接見ることはありませんので、ありのままのご意見をお書き下さい。

1. 所属大学について いずれか一方に、○をつけて下さい  
（ ） 愛知教育大学 （ ） 静岡大学

### 2. 後期の「基礎科目」について

- a) 後期に受講した「基礎科目」の名称すべてに○をつけて下さい。  
（ ） 教科開発学実践論 （ ） 科学技術活用論  
（ ） 教育評価実証方法論 （ ） 表現・鑑賞論  
（ ） 教育プレゼンテーション論

※「基礎科目」のいずれも受講しなかった方は、3に進んでください。

- b) 後期の基礎科目全般に関して、次の1～4の当てはまるものを選んで回答して下さい。  
(1. そう思う 2. ややそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない)  
①授業の内容に満足しましたか …………… ( )  
②あなたは授業に積極的に取り組みましたか …………… ( )  
③シラバスに書かれた目標は達成されたと思いますか …………… ( )  
④授業の内容は自分の研究のために役立つと思いますか …………… ( )

- c) 後期の基礎科目全般、あるいは基礎科目の個々の授業についてご意見やご要望がありましたら、自由にご記入下さい。

### 3. 後期の「分野科目」について

- a) 後期に受講した「分野科目」の分野すべてに○をつけて下さい（F期間の集中の授業も含む）。  
（ ） 教育環境学分野科目 （ ） 人文社会系教科学分野科目  
（ ） 自然系教科学分野科目 （ ） 創造系教科学分野科目

※「分野科目」のいずれも受講しなかった方は、4に進んでください。

b) 後期の分野科目全般に関して、次の1～4の当てはまるものを選んで回答して下さい。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない)

①授業の内容に満足しましたか …………… ( )

②あなたは授業に積極的に取り組みましたか …………… ( )

③シラバスに書かれた目標は達成されたと思いますか …………… ( )

④授業の内容は自分の研究のために役立つと思いますか …………… ( )

c) 後期の分野科目全般、あるいは分野科目の個々の授業についてご意見やご要望がありましたら、自由にご記入下さい。

#### 4. 後期の「応用科目」について

a) 2月に開講した「教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ」について、ご意見やご要望がありましたら、自由にご記入下さい。

#### 5. 年間を通しての授業全般（カリキュラム）について

a) 授業全般に関して、次の1～4の当てはまるものを選んで回答して下さい。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない)

①本専攻で開講される授業は全体として満足できるものですか ( )

②本専攻の授業時間割りは、履修しやすいですか …………… ( )

③遠隔システムを使った授業は満足できるものでしたか …………… ( )

b) 授業時間割りの開講枠（設定週）や開講曜日、一日の授業時間数、あるいは遠隔システムなどについてご意見やご要望がありましたら、自由にご記入下さい。

c) 履修申請の時期や方法、あるいは履修の方法等についてご意見やご要望がありましたら、自由にご記入ください。

#### 6. 年間を通しての研究や学生生活全般について

a) 研究指導や学位取得に関してご意見やご要望がありましたら、自由にご記入下さい。

b) 共同大学院での学生生活へのサポートについてご意見やご要望がありましたら、自由にご記入下さい。

c) その他、本専攻のありかたについてご意見やご要望がありましたら、自由にご記入下さい。

以上です。

平成26年度～28年度 共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況(3年間) その1

前期: A期間(4月～5月) B期間(6月～7月) C期間(7月～8月)  
 後期: D期間(10月) E期間(11月～1月) F期間(1月～2月)

愛知教育大学・静岡大学 合同開講科目				平成26年度 集計		平成27年度 集計		平成28年度 集計	
共同専攻 科目	授業科目名	単位	担当教員	曜日・時限・期 間	受講者	曜日・時限・期 間	受講者	曜日・時限・期 間	受講者
基礎科目	教科開発学原論	a 2	子石熊黒杉村益 安川倉川山 酒恭敬み康陽弘 之り司子如	A期間 4/13(日)・ 4/20(日)・ 4/27(日)・ 5/11(日) ★遠隔	愛教大D1 4名 静岡大D2 1名 静岡大D1 4名	A期間 4/12(日)・ 4/19(日)・ 4/26(日)・ 5/10(日) ★遠隔	愛教大D1 3名 静岡大D1 3名	A期間 4/10(日)・ 4/17(日)・ 4/24(日)・ 5/8(日) ★遠隔	愛教大D2 1名 愛教大D1 4名 静岡大D2 2名 静岡大D1 5名
	教科開発学実践論	a 1	稲中葉野川南永口林 小真裕陽泰京秀 松亮弘子治 坂紅	D期間 10/11(土)・ 10/12(日) ★遠隔	愛教大D1 4名 静岡大D1 4名	D期間 10/3(土)・ 10/4(日) ★遠隔	愛教大D1 4名 静岡大D1 3名	D期間 10/1(土)・ 10/2(日) ★遠隔	愛教大D1 4名 静岡大D2 3名 静岡大D1 5名
応用科目	教科開発学セミナーⅠ	b 2	全 教 員	F期間 2/14(土)・ 2/15(日) ●浜松	愛教大D1 3名 静岡大D1 4名	F期間 2/13(土)・ 2/14(日) ●浜松	愛教大D2 1名 愛教大D1 4名 静岡大D1 3名	F期間 2/11(土)・ 2/12(日) ●浜松	愛教大D1 4名 静岡大D2 3名 静岡大D1 5名
	教科開発学セミナーⅡ	b 2	全 教 員	F期間 2/14(土)・ 2/15(日) ●浜松	愛教大D2 4名 静岡大D2 5名	F期間 2/13(土)・ 2/14(日) ●浜松	愛教大D2 3名 静岡大D2 4名	F期間 2/11(土)・ 2/12(日) ●浜松	愛教大D2 4名 静岡大D3 1名 静岡大D2 3名
	教科開発学セミナーⅢ	b 2	全 教 員	C期間 8/24(日) ●浜松	愛教大D3 1名 静岡大D3 3名	C期間 8/23(日) ●浜松	愛教大D3 4名 静岡大D3 6名	C期間 8/21(日) ●浜松	愛教大D3 2名 静岡大D3 2名

平成26年度～28年度 共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況(3年間) その2

前期: A期間(4月～5月) B期間(6月～7月) C期間(7月～8月)

後期: D期間(10月) E期間(11月～1月) F期間(1月～2月)

愛知教育大学開講科目				平成26年度 集計		平成27年度 集計		平成28年度 集計	
共同専攻科目	授業科目名	単位	担当教員	曜日・時限・期間	受講者	曜日・時限・期間	受講者	曜日・時限・期間	受講者
基礎科目	文化資源活用論	a1	西宮 秀紀 野地 恒貴 伊丹 藤博	A期間 4/26(土)・ 5/10(土)	愛教大D2 2名 愛教大D1 3名	A期間 4/25(土)・ 5/9(土)	愛教大D2 1名	A期間 4/30(土)・ 5/7(土)	愛教大D2 1名 愛教大D1 3名 静岡大D2 1名 静岡大D1 1名
	科学技術活用論	a1	岩山 勉 稲毛 正彦	D期間 10/25(土)・ 10/26(日)	愛教大D2 1名 愛教大D1 3名 静岡大D1 1名	D期間 10/24(土)・ 10/25(日)		D期間 10/22(土)・ 10/23(日)	愛教大D2 2名 愛教大D1 1名 静岡大D2 1名
	教育評価実証方法論	a1	石田 靖彦 倉本 真司 古井 清次郎	D期間 10/18(土)・ 10/19(日)	愛教大D2 2名 愛教大D1 3名 静岡大D1 2名	D期間 10/17(土)・ 10/18(日)	愛教大D2 1名 愛教大D1 3名	D期間 10/8(土)・ 10/9(日)	愛教大D1 2名 静岡大D1 1名
分野科目(選択科目)	教育課程論研究	a2	子安 潤	B期間 土曜1・2限	愛教大D1 2名	B 5/31(日)・ 6/14(日)・ 6/28(日)・ 7/12(日)	愛教大D3 1名 愛教大D2 1名 愛教大D1 1名	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名
	遊び文化環境論研究	a2	石川 恭	E期間 土曜1・2限	愛教大D2 1名 愛教大D1 3名 静岡大D2 1名	E 11/1(日)・ 11/29(日)・ 12/13(日)・ 12/27(日)	愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	E期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1 3名
	教育経営臨床論研究	a2	倉本 哲男					E期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 1名
	学校適応論研究	a2	石田 靖彦					E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 1名
	多言語多文化教材論研究	a2	中田 敏夫	E期間 土曜1・2限		E 11/1(日)・ 11/29(日)・ 12/13(日)・ 12/27(日)	愛教大D2 1名 愛教大D1 2名 静岡大D1 1名	E期間 土曜日・ 隔週	静岡大D2 1名
	言語教育内容論研究	a2	稲葉 みどり	E期間 日曜1・2限	愛教大D3 1名 愛教大D1 2名	E 10/31(土)・ 11/28(土)・ 12/12(土)・ 12/26(土)	愛教大D1 1名 静岡大D1 2名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2 2名 愛教大D1 2名
	歴史教育内容論研究	a2	西宮 秀紀	E期間 土曜3・4限		E 11/21(土)・ 12/5(土)・ 12/19(土)・ 1/9(土)		E期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 1名
民俗学教材論研究	a2	野地 恒有	B期間 土曜3・4限	愛教大D2 1名 静岡大D1 1名	B 6/7(日)・ 6/21(日)・ 7/5(日)・ 7/19(日)	愛教大D1 1名	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D2 2名 静岡大D2 2名	
地理学教材論研究	a2	伊藤 貴啓	B期間 土曜1・2限	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名	B 5/31(日)・ 6/14(日)・ 6/28(日)・ 7/12(日)		B期間 土曜日・ 隔週		
国語科教育教材論研究	a2	丹藤 博文					E期間 土曜日・ 隔週		
生活科教育内容論研究	a2	中野 真志					E期間 土曜日・ 隔週		
自然系教科学	数学教材論研究	a2	飯島 康之	B期間 日曜3・4限	愛教大D1 1名	B 6/6(土)・ 6/20(土)・ 7/4(土)・ 7/18(土)		B期間 日曜日・ 隔週	静岡大D2 1名
	物理教材論研究	a2	岩山 勉	E期間 日曜3・4限	静岡大D1 1名	E 11/21(土)・ 12/5(土)・ 12/19(土)・ 1/9(土)		E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2 1名
	理科教育内容論研究	a2	稲毛 正彦	E期間 土曜3・4限	愛教大D1 1名 静岡大D2 1名	E 11/22(日)・ 12/6(日)・ 12/20(日)・ 1/10(日)	愛教大D3 1名	E期間 土曜日・ 隔週	
創造系教科学	体育教育内容論研究	a2	簡井 清次郎	E期間 日曜3・4限		E 11/1(日)・ 11/29(日)・ 12/13(日)・ 12/27(日)	愛教大D1 1名 静岡大D2 1名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 1名
	保健教育内容論研究	a2	古田 真司	B期間 日曜3・4限	愛教大D2 1名 静岡大D2 1名 静岡大D1 1名	B 6/6(土)・ 6/20(土)・ 7/4(土)・ 7/18(土)	愛教大D2 2名 愛教大D1 1名	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 2名

平成26年度～28年度 共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況(3年間) その3

前期: A期間(4月～5月) B期間(6月～7月) C期間(7月～8月)

後期: D期間(10月) E期間(11月～1月) F期間(1月～2月)

静岡大学開講科目				平成26年度 集計		平成27年度 集計		平成28年度 集計		
共同専攻科目	授業科目名	単位	担当教員	曜日・時限・期間	受講者	曜日・時限・期間	受講者	曜日・時限・期間	受講者	
基礎科目	選択科目	教育プログラム開発論	a 1	山村 保寿功	A期間 4/19(土)・ 4/26(土)	静岡大D1 4名	A期間 4/11(土)・ 4/18(土)	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	A期間 4/9(土)・ 4/23(土)	愛教大D3 2名 静岡大D1 1名
		表現・鑑賞論	a 1	北山 教康彦	D期間 10/4(土)・ 10/5(日)	静岡大D1 1名	D期間 10/17(土)・ 10/18(日)	静岡大D3 1名	D期間 10/8(土)・ 10/16(日)	愛教大D3 1名 愛教大D2 1名 静岡大D2 1名
		教育フィールド調査論	a 1	丹沢 哲郎真	E期間 11/16(日)・ 11/30(日)	愛教大D3 1名 愛教大D2 2名 静岡大D1 4名	D期間 10/18(日)・ 10/25(日)		D期間 4/23(土)・ 5/14(土)	愛教大D1 2名 静岡大D1 2名
		教育フィールドワーク論								
		教育プレゼンテーション論	a 1	白澤 畑知彦 澤渡 千枝	D期間 10/26(日)・ 12/14(日)	静岡大D1 3名	D期間 10/10(土)・ 10/25(日)	静岡大D3 1名 静岡大D1 2名	D期間 11/27(日)・ 1/7(土)	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名 静岡大D2 2名 静岡大D1 2名
教育環境学	学校経営論研究	a 2	山村 保寿功	E 11/1(土)・ 11/29(土)・ 12/13(土)・ 12/20(土)	静岡大D1 1名	E 10/31(土)・ 11/28(土)・ 12/12(土)・ 12/26(土)	愛教大D2 2名 静岡大D2 2名	E 10/29(土)・ 11/26(土)・ 12/10(土)・ 12/24(土)	静岡大D1 2名	
	学校危機管理論研究	a 2	村越 真	B 6/21(土)・ 7/5(土)・ 7/12(土)・ 7/19(土)	静岡大D3 1名 静岡大D1 1名	B 6/6(土)・ 6/20(土)・ 7/4(土)・ 7/18(土)	静岡大D2 2名 静岡大D1 2名	E 11/19(土)・ 12/3(土)・ 12/17(土)・ 1/7(土)	静岡大D3 1名	
	教育工学論研究	a 2	村山 功	B 5/31(土)・ 6/7(土)・ 6/14(土)・ 6/28(土)	愛教大D2 1名 静岡大D1 3名	B 5/30(土)・ 6/13(土)・ 6/27(土)・ 7/11(土)	愛教大D2 1名 静岡大D1 1名	B 6/4(土)・ 6/11(土)・ 6/25(土)・ 7/2(土)		
	学習科学論研究	a 2	益川 弘如					B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1 2名 静岡大D2 3名	
	人文社会科学	外国語教育論研究	a 2	白畑 知彦	B 6/15(日)・ 7/6(日)・ 7/13(日)・ 7/20(日)	静岡大D1 1名	B 6/7(日)・ 6/21(日)・ 7/5(日)・ 7/19(日)	静岡大D1 2名	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1 2名 静岡大D1 1名
		歴史教材論研究	a 2	黒川 みどり	E 11/1(土)・ 7/15(土)・ 7/22(土)・ 7/29(土)	静岡大D1 1名	E 11/21(土)・ 12/5(土)・ 12/19(土)・ 1/9(土)		B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 2名
		国語教育論研究	a 2	坂口 京子					B期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1 1名
	自然系教科学	数学教育論研究	a 2	熊倉 啓之	E 11/22(土)・ 12/6(土)・ 12/13(土)・ 12/20(土)		E 11/22(日)・ 12/6(日)・ 12/20(日)・ 1/10(日)	愛教大D2 2名	E期間 土曜日・ 隔週	静岡大D2 1名
		生物教育内容論研究	a 2	小南 陽亮	E 11/2(日)・ 12/7(日)・ 12/21(日)・ 1/11(日)	静岡大D1 1名	E 11/22(日)・ 12/6(日)・ 12/20(日)・ 1/10(日)		E 11/13(日)・ 12/11(日)・ 12/25(日)・ 1/21(土)	愛教大D2 1名
		理科教育論研究	a 2	丹沢 哲郎	E 11/1(土)・ 11/15(土)・ 11/22(土)・ 11/29(土)	静岡大D1 2名	E 11/1(日)・ 11/29(日)・ 12/13(日)・ 12/27(日)		B期間 日曜日・ 隔週	静岡大D2 1名
		自然系教材開発論研究	a 2	澤渡 千枝					B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 1名
	創造系教科学	音楽教育論研究	a 2	北山 教康彦	B 6/29(日)・ 7/6(日)・ 7/13(日)・ 7/20(日)	静岡大D2 1名	B 5/31(日)・ 6/14(日)・ 6/28(日)・ 7/12(日)		B期間 日曜日・ 隔週	
美術教材論研究		a 2	伊藤 文彦	B 6/28(土)・ 7/5(土)・ 7/12(土)・ 7/19(土)		B 5/30(土)・ 6/13(土)・ 6/27(土)・ 7/11(土)	静岡大D2 1名	B期間 土曜日・ 隔週		
体育教育論研究		a 2	新保 淳	C 7/26(土)・ 7/27(日)・ 8/2(土)・ 8/3(日)	静岡大D2 2名 静岡大D1 1名	C 7/25(土)・ 7/26(日)・ 8/1(土)・ 8/2(日)	愛教大D1 1名 静岡大D2 1名	C 8/7(日)・ 8/13(土)・ 8/14(日)・ 8/20(土)		
技術教育内容論研究		a 2	松永 泰弘	C 7/26(土)・ 7/27(日)・ 8/9(土)・ 8/10(日)	静岡大D1 1名	C 7/25(土)・ 7/26(日)・ 8/1(土)・ 8/2(日)		B期間 日曜日・ 隔週	静岡大D2 1名	
家政教育内容論研究		a 2	小川 裕子	E 11/16(日)・ 11/30(日)・ 12/7(日)・ 11/14(日)		E 11/1(日)・ 11/29(日)・ 12/13(日)・ 12/27(日)		E 11/13(日)・ 12/11(日)・ 12/25(日)・ 1/21(土)	愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	
体育・課外活動教材論研究		a 2	杉山 康司					B 6/11(土)・ 6/12(日)・ 7/9(土)・ 7/10(日)		
家庭科教材論研究		a 2	村上 陽子					B 6/8(水)・ 7/2(土)・ 7/9(土)・ 7/16(土)		
技術教育教材論研究		a 2	紅林 秀治					B期間 土曜日・ 隔週		

【論文】

- 保健教育の評価を目的とした健康情報判断力テストの開発・・・・・・・・・・・・・・・・古田 真司  
 國島 花恵  
 森 慶恵  
 原 郁水
- 軽度知的障害生徒の学校生活への適応に関する研究・・・・・・・・・・・・・・・・伊藤 佐奈美  
 ー知的障害教育高高等部における質問紙調査をもとにー
- 日本語の物語文における言語知識の発達過程の考察・・・・・・・・・・・・・・・・稲葉 みどり  
 ー発話数・単語数・形態素数・平均発話長の解析ー
- 5歳児の育ち合い保育実践を通して保育者が期待している効果・・・・・・・・名倉 一美  
 ー「社会的自己調整能力」と「集団所属感」に注目してー
- 質問生成に着目した保健教育における批判的思考・・・・・・・・・・・・・・・・森 慶恵  
 古田 真司
- 健常幼児と障害幼児の語彙及び音韻意識獲得の特徴・・・・・・・・・・・・・・・・大島 光代
- 心理劇のアセスメント機能を応用したASD児の問題点の特定・・・・・・・・長田 洋一  
 稲葉 みどり
- 小学校水泳授業の現状と児童および教員の意識に関する検討・・・・・・・・寺本 圭輔  
 家崎 仁成  
 古田 理郁  
 平野 雅巳  
 村松 愛梨奈  
 三浦 唯  
 瀧本 歩
- 設計の学習における最適解を得るまでの思考過程・・・・・・・・・・・・・・・・紅林 秀治  
 村上 陽
- 21世紀に求められる「生きる力」の育成に関する一考察・・・・・・・・一之瀬 敦幾  
 ー高等学校のアクティブ・ラーニングを用いた授業実践を通してー

中学生の「ネット依存行動」の改善に向けた要因の分析・・・・・・・・・・ 酒井 郷平  
－「ネット依存」に関する自己認識に着目して－

安全教育の課題と 21 世紀型能力・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 村越 真

高校日本史における「歴史的思考力」育成の課題・・・・・・・・・・・・ 渡邊 明彦

「単元の核となる社会的事象」を設定した社会科地域教材開発の一考察・・・・・・・・ 大西 洋  
－小学 4 年生・静岡市を近代都市化した，海野孝三郎の静岡茶直輸出の具体的事例から－

里山の自然史に関する意識調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 延原 尊美  
～袋井市における小学校 5・6 年生の児童を対象に～ 永田 聖大

**【研究ノート・資料】**

技術・家庭科技術分野における「見方・考え方」に関する検討・・・・・・・・・・ 磯部 征尊  
－社会的，環境的及び経済的側面の比較・検討を通して－ 服部 洋平

**【付録】**

愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科 共同教科開発学専攻紀要発行要項  
『教科開発学論集』投稿要領

---

愛知教育大学・静岡大学教育学研究科  
(後期3年博士課程)  
共同教科開発学専攻 2016年度報告書  
ROAD 第5号

印刷：平成29年3月31日  
発行：国立大学法人愛知教育大学  
国立大学法人静岡大学  
編集：愛知教育大学・静岡大学教育学研究科  
ISSN 2187-7319

---



愛知教育大学・静岡大学教育学研究科（後期3年博士課程）共同教科開発学専攻 2016年度報告書

[ROAD]

# ROAD

第5号 平成29年3月発行